

【表紙】

【提出書類】 有価証券報告書

【根拠条文】 金融商品取引法第24条第1項

【提出先】 関東財務局長

【提出日】 2019年6月28日

【事業年度】 第148期(自 2018年4月1日 至 2019年3月31日)

【会社名】 武蔵野興業株式会社

【英訳名】 Musashino Kogyo Co., Ltd.

【代表者の役職氏名】 代表取締役社長 河野 義勝

【本店の所在の場所】 東京都新宿区新宿三丁目36番6号

【電話番号】 東京(3352)1439・0380

【事務連絡者氏名】 執行役員経理部長 山崎 雄司

【最寄りの連絡場所】 東京都新宿区新宿三丁目36番6号

【電話番号】 東京(3352)1439・0380

【事務連絡者氏名】 執行役員経理部長 山崎 雄司

【縦覧に供する場所】 株式会社東京証券取引所
(東京都中央区日本橋兜町2番1号)

第一部 【企業情報】

第1 【企業の概況】

1 【主要な経営指標等の推移】

(1) 連結経営指標等

回次	第144期	第145期	第146期	第147期	第148期
決算年月	2015年3月	2016年3月	2017年3月	2018年3月	2019年3月
売上高 (千円)	1,641,542	1,669,901	1,432,644	1,576,697	1,688,818
経常利益 (千円)	130,612	139,778	50,752	97,181	162,678
親会社株主に帰属する 当期純利益 (千円)	84,812	107,789	78,589	102,297	122,916
包括利益 (千円)	202,938	167,710	78,800	102,914	122,267
純資産額 (千円)	3,282,996	3,450,443	3,529,061	3,631,467	3,753,637
総資産額 (千円)	6,031,947	5,912,123	6,230,154	6,232,833	6,466,430
1株当たり純資産額 (円)	3,136.06	3,296.30	3,371.66	3,470.13	3,587.01
1株当たり当期純利益 金額 (円)	81.02	102.97	75.08	97.75	117.46
潜在株式調整後 1株当たり 当期純利益金額 (円)		-	-	-	-
自己資本比率 (%)	54.4	58.4	56.6	58.3	58.0
自己資本利益率 (%)	2.7	3.2	2.3	2.9	3.3
株価収益率 (倍)	32.35	20.78	32.09	26.33	21.53
営業活動による キャッシュ・フロー (千円)	214,385	246,531	180,497	210,170	214,372
投資活動による キャッシュ・フロー (千円)	286,380	92,494	339,852	26,719	38,055
財務活動による キャッシュ・フロー (千円)	221,159	231,408	50,630	102,860	88,849
現金及び現金同等物の 期末残高 (千円)	758,204	680,833	572,108	652,699	740,167
従業員数 (ほか、平均臨時 雇用者数) (名)	48 (50)	45 (53)	48 (44)	47 (59)	44 (64)

- (注) 1 従業員数は、就業人員数を記載しております。
 2 売上高には消費税等は含まれておりません。
 3 潜在株式調整後1株当たり当期純利益金額については、各期において潜在株式がないため、記載しておりません。
 4 2017年10月1日付で普通株式10株につき1株の割合をもって株式併合を行っております。これに伴い、第144期の期首に当該株式併合が行われたと仮定し、1株当たり純資産額及び1株当たり当期純利益金額を算定しております。
 5 「『税効果会計に係る会計基準』の一部改正」(企業会計基準第28号 2018年2月16日)等を第148期の期首から適用しており、第147期に係る主要な経営指標等については、当該会計基準等を遡って適用した後の指標等となっております。

(2) 提出会社の経営指標等

回次	第144期	第145期	第146期	第147期	第148期
決算年月	2015年3月	2016年3月	2017年3月	2018年3月	2019年3月
売上高 (千円)	1,204,631	1,149,435	997,460	1,162,689	1,284,081
経常利益 (千円)	90,290	85,695	50,543	91,060	132,690
当期純利益又は当期純損失 (千円)	45,224	70,550	10,986	68,069	60,163
資本金 (千円)	1,004,500	1,004,500	1,004,500	1,004,500	1,004,500
発行済株式総数 (株)	10,500,000	10,500,000	10,500,000	1,050,000	1,050,000
純資産額 (千円)	3,319,002	3,449,210	3,438,251	3,506,430	3,565,847
総資産額 (千円)	5,855,722	5,700,362	5,970,295	5,926,530	6,119,143
1株当たり純資産額 (円)	3,170.45	3,295.12	3,284.90	3,350.65	3,407.55
1株当たり配当額 (円)		-	-	-	-
(内1株当たり中間配当額) (円)	()	(-)	(-)	(-)	(-)
1株当たり当期純利益金額又は当期純損失金額 (円)	43.20	67.40	10.50	65.04	57.49
潜在株式調整後1株当たり当期純利益金額 (円)		-	-	-	-
自己資本比率 (%)	56.7	60.5	57.6	59.2	58.3
自己資本利益率 (%)	1.4	2.1	0.3	2.0	1.7
株価収益率 (倍)	60.65	31.76	229.52	39.58	43.99
配当性向 (%)		-	-	-	-
従業員数 (ほか、平均臨時雇用者数) (名)	22 (32)	21 (33)	23 (27)	21 (39)	21 (45)
株主総利回り (比較指標：配当込みTOPIX) (%)	137.9 (130.7)	112.6 (116.5)	126.8 (133.7)	135.5 (154.9)	133.1 (147.1)
最高株価 (円)	295	284	251	2,810 (348)	2,699
最低株価 (円)	186	200	209	2,549 (235)	2,311

- (注) 1 売上高には消費税等は含まれておりません。
 2 従業員数は、就業人員数を記載しております。
 3 潜在株式調整後1株当たり当期純利益金額については、各期において潜在株式がないため、記載しておりません。
 4 2017年10月1日付で普通株式10株につき1株の割合をもって株式併合を行っております。これに伴い、第144期の期首に当該株式併合が行われたと仮定し、1株当たり純資産額及び1株当たり当期純利益金額又は当期純損失金額を算定しております。
 5 「『税効果会計に係る会計基準』の一部改正」(企業会計基準第28号 2018年2月16日)等を第148期の期首から適用しており、第147期に係る主要な経営指標等については、当該会計基準等を遡って適用した後の指標等となっております。
 6 株価は、東京証券取引所市場第2部によります。
 7 2017年6月29日開催の第146回定時株主総会の決議により、2017年10月1日付で株式併合(普通株式10株につき1株の割合で併合)を行っております。第147期の株価については、株式併合後の最高・最低株価を記載し、株式併合前の最高・最低株価は()にて記載しております。

2 【沿革】

- 1920年 5月 桜井新治以下 8 名が発起人となり、資本金11万円をもって東京都新宿区に於いて、映画興行を目的とする株式会社武蔵野館を設立し、映画館「武蔵野館」（現・「新宿武蔵野館」）を開館。
- 1928年12月 現在地新宿区新宿三丁目に「武蔵野館」を移転し、近代的な洋画専門館として発足。
- 1949年 6月 旧帝都興業株式会社を吸収合併。
- 1949年 8月 商号を武蔵野映画劇場株式会社と変更。
- 1949年 9月 東京証券取引所に株式を上場。
- 1951年 7月 目黒区自由が丘に「自由が丘武蔵野館」を開館。
- 1955年 1月 大宮市所在の映画館を買収、「大宮武蔵野館」を開館。
- 1963年10月 東京証券取引所市場第二部に指定替。
- 1968年12月 武蔵野ビルを改築し、映画館、貸店舗など経営の多角化に着手。
- 1970年 7月 「大宮武蔵野館」を取り壊し、跡地に地上 8 階、地下 3 階の賃貸ビルを建設、これを大宮高島屋に賃貸。
- 1973年 6月 不動産部門を設置、マンション及び別荘地の分譲を開始。
- 1978年 3月 資本金を 5 億円に増資。
- 1981年 1月 埼玉県大里郡寄居町に株式会社寄居武蔵野自動車教習所（現・連結子会社）を設立。
- 1985年12月 中野区に「中野武蔵野ホテル」及び「中野武蔵野ホール」を開設。
- 1986年10月 商号を武蔵野興業株式会社と変更。
- 1986年10月 「自由が丘武蔵野館」を取り壊し、跡地に総合レジャービル「自由が丘ミュー」を新築し、「自由が丘武蔵野館」・「エグザス自由が丘武蔵野ミュー」（2008年 3 月「コナミスポーツクラブ自由が丘」に名称を変更）をそれぞれ開設。
- 1988年10月 資本金を10億450万円に増資。
- 1992年 9月 第二武蔵野ビルを建設、これを株式会社丸井に賃貸。
- 1994年10月 武蔵野ビル 3 階に「シネマ・カリテ」（2002年 1 月「新宿武蔵野館」に館名変更）（3 館）を開館。
- 1996年 4月 株式会社野和ビル(テナント飲食店ビルの経営)を合併会社として設立(現・関連会社)。
- 1998年 9月 山梨県甲府市に「甲府武蔵野シネマ・ファイブ」（5 館）を開館。
- 2003年 9月 「新宿武蔵野館」（4 館）のうち武蔵野ビル7階（1 館）を閉館。
- 2004年 2月 「自由が丘武蔵野館」を閉館。
- 2004年 5月 「中野武蔵野ホール」を閉館。
- 2004年 8月 「中野武蔵野ホテル」を閉鎖。
- 2004年12月 「第二武蔵野ビル」を売却。
- 2005年 5月 株式会社リサ・パートナーズと資本・業務提携。
- 2005年 5月 「武蔵野ビル」を流動化。
- 2011年 3月 「甲府武蔵野シネマ・ファイブ」を閉鎖。
- 2011年 3月 「コナミスポーツクラブ自由が丘」を閉鎖。
- 2012年12月 新宿区新宿に「シネマカリテ」を開館。
- 2013年 8月 新宿区新宿に武蔵野エンタテインメント株式会社（現・連結子会社）を設立。

3 【事業の内容】

当社及び当社連結関係会社(子会社3社、関連会社2社)は映画事業を主力事業としてかけるとともに、保有資産の活用をはかり、賃貸を主体とした不動産関連事業や自動車教習所などを運営しております。各セグメントにおける当社及び関係会社との位置付けは次のとおりです。

(映画事業)

当社が東京都新宿区に映画館「新宿武蔵野館」(3スクリーン)及び「シネマカリテ」(2スクリーン)を運営しております。なお、連結子会社の武蔵野エンタテインメント(株)は、当社と連携し、映画関連事業を行っております。

(スポーツ・レジャー事業)

現在は営業中止中であります。

(不動産事業)

当社が埼玉県さいたま市大宮区に商業テナントビル、東京都杉並区に賃貸マンション、東京都目黒区に商業テナントビル(連結子会社の自由ヶ丘土地興業(株)が所有する建物を賃借)をそれぞれ1棟経営しております。また、当社は関連会社(株)野和ビルに敷地を賃貸、(株)野和ビルは商業テナントビルを運営し、当社経営の映画館が当該ビルに入居しております。不動産の仲介・販売につきましては、仲介関連業務を主体に活動し、当連結会計年度は不動産の仕入・販売等の活動は行っておりません。

(自動車教習事業)

(株)寄居武蔵野自動車教習所が、埼玉県大里郡寄居町において自動車教習所を運営しております。

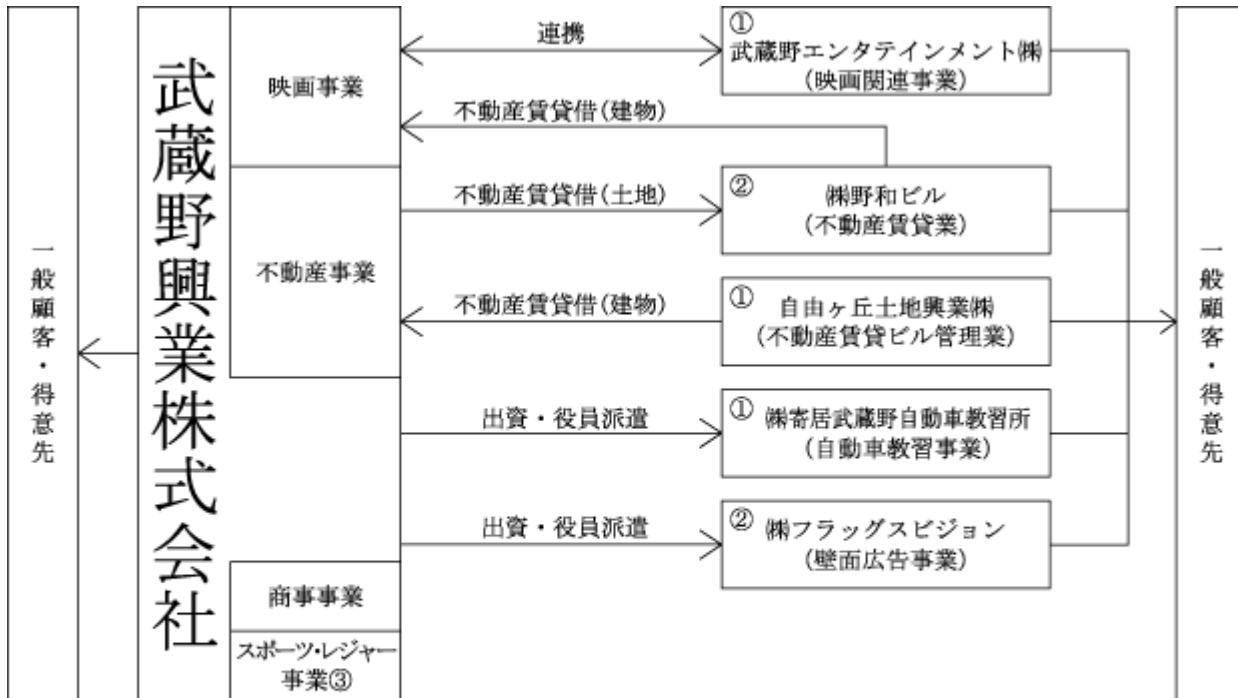
(商事事業)

自由ヶ丘土地興業(株)が東京都目黒区において軽飲食店の委託経営を行っております。

(その他)

主として、当社が管理しているマクミラン・アリスの著作権事業や、当社と自由ヶ丘土地興業(株)の自販機手数料等であります。

(事業系統図)



- ※① 連結子会社
- ※② 持分法適用会社
- ※③ スポーツ・レジャー事業は現在営業中止中です。
- ※ 上記のほかに持分法非適用の関連会社が1社あります。

4 【関係会社の状況】

名称	住所	資本金又は 出資金 (千円)	主要な事業 の内容	議決権の 所有(被所有)割合		関係内容
				所有割合 (%)	被所有割合 (%)	
(連結子会社) ㈱寄居武蔵野 自動車教習所 1	埼玉県大里郡	10,000	自動車教習事業	100.0		土地の賃貸 資金の貸付 役員の兼任 4名
自由ヶ丘土地興業㈱ 2	東京都新宿区	10,000	不動産事業	100.0		建物の賃借 資金の貸付 役員の兼任 4名
武蔵野エンタテインメン ト㈱ 3	東京都新宿区	5,000	映画事業	90.0		資金の貸付 役員の兼任 4名
(持分法適用関連会社) ㈱野和ビル	東京都新宿区	20,000	不動産事業	50.0		土地の賃貸 建物の賃借 債務保証 役員の兼任 3名
㈱フラッグスビジョン	東京都新宿区	30,000	壁面広告事業	33.3		役員の兼任 2名

(注) 1 連結子会社における主要な事業の内容欄には、セグメントの名称を記載しております。

2 有価証券届出書または有価証券報告書を提出している会社はありません。

3 1 ㈱寄居武蔵野自動車教習所については、売上高（連結会社相互間の内部売上高を除く）の連結売上高に占める割合が10%を超えております。

主要な損益情報等	売上高	311百万円
	経常利益	33百万円
	当期純利益	34百万円
	純資産額	255百万円
	総資産額	428百万円

4 2 債務超過会社であり、債務超過額は412百万円であります。

5 3 債務超過会社であり、債務超過額は291百万円であります。

5 【従業員の状況】

(1) 連結会社の状況

2019年3月31日現在

セグメントの名称	従業員数(名)
映画事業	8 (45)
不動産事業	2 (0)
自動車教習事業	23 (19)
商事事業	1 (0)
全社(共通)	10 (0)
合計	44 (64)

- (注) 1 従業員数は、嘱託契約の従業員を含み、当社グループから当社グループ外への出向者を除いた就業人員であります。
- 2 従業員数欄の(外書)は、臨時従業員の年間平均雇用人員であります。
- 3 全社(共通)は、総務及び経理等の本社部門の従業員であります。

(2) 提出会社の状況

2019年3月31日現在

従業員数(名)	平均年齢(歳)	平均勤続年数(年)	平均年間給与(円)
21 (45)	48.9	17.1	4,367,262

セグメントの名称	従業員数(名)
映画事業	8 (45)
不動産事業	2 (0)
商事事業	1 (0)
全社(共通)	10 (0)
合計	21 (45)

- (注) 1 従業員は、当社から他社への出向者を除いた就業人員数であります。
- 2 平均年間給与は、賞与及び基準外賃金を含んでおります。
- 3 従業員数欄の(外書)は、臨時従業員の年間平均雇用人員であります。

(3) 労働組合の状況

当社連結子会社である(株)寄居武蔵野自動車教習所には、全国労働組合総連合に属する東京自動車教習所労働組合寄居支部が組織されており、組合員9名が在籍しております。

なお、労使関係について特記すべき事項はありません。

第2 【事業の状況】

1 【経営方針、経営環境及び対処すべき課題等】

文中の将来に関する事項は、当連結会計年度末現在において、当社グループが判断したものであります。

(1) 会社の経営の基本方針

当社は1920年に、東京都新宿区新宿に於いて映画館「武蔵野館」を開館させて以来、社会に映画を中心とした健全な娯楽を提供することを主要な事業目的・経営の基本方針とし、その後、長期にわたり映画興行事業を中心とした事業展開を行ってまいりました。しかしながら、娯楽の形態も時代の変遷とともに多様な変化を遂げるなか、当社も映画興行事業を会社の主力事業と認識し経営の軸に据えながらも、不動産賃貸事業やフィットネスクラブ運営等のスポーツ・レジャー事業（現在営業中止中）、また連結子会社で展開する自動車教習事業など、複合的な事業展開によって、グループ全体の安定的な経営基盤を構築維持してまいりました。

今後も、複合的な事業からなる経営基盤を安定的に構築維持していくことを礎としながら、創業の地・新宿において、2020年6月には「武蔵野館」開館100周年を迎えることもあり、映画興行のみならず、映画配給も手掛ける包括的な映画事業を長期安定的に手掛ける会社として、健全かつ快適で安全な娯楽空間を提供し、より多くの方々に映画を楽しんでいただくことが、創業以来の会社の経営の基本方針と考えております。

(2) 当社グループを取り巻く経営環境

当連結会計年度末における当社グループの経営環境につきましては、当社グループの不動産事業においては、間接的に国内外経済等の影響下にはあるものの、主軸である不動産賃貸事業は、主要な賃貸物件は首都圏の利便性の高い場所に所在しており、比較的安定した顧客の確保を維持しております。また自動車教習事業は、少子化による運転免許取得資格者の減少や若年層の自動車運転免許離れ、近隣の自動車教習所との競合といった厳しい経営環境の中、地域との信頼関係とサービスの充実を心がけ自動車運転免許の取得需要の確保に注力しております。一方で当社の主力事業である映画事業を取り巻く経営環境につきましては、2018年においては、業界全体としては前々年度、前年度に次ぐ映画興行収入を記録したものの、それはシネコンでの興行を中心とした大ヒット作品の力によるところが大きく、中規模以下のクリーンヒットと呼べるような作品はどちらかといえば減少の傾向となり、業界全体の収益はほぼ横ばいとなりました。そんな中、ミニシアター系の作品は一部にロングラン上映となった話題作もあったものの、上映回数や上映期間、劇場のキャパシティ等、上映環境は限られており、当社のようなミニシアターにおいて、さらなるヒット作を生み出すには依然として厳しい状況にあります。当社におきましても、シネコンのラインナップとは一線を画したミニシアターならではの作品の魅力を認知していただくため、映画祭「カリテ・ファンタスティック！シネマ・コレクション（通称『カリコレ』）」等のイベントの企画や劇場内におけるディスプレイ等でのPRに加え、番組編成にも工夫を凝らし、口コミによる情報の広がりにも注意を払うなど、その経営環境に対し、臨機応変に対応してまいります。

(3) 目標とする経営指標

当社グループは、具体的な目標とする中長期的な経営指標を設定しておりませんが、将来の復配を視野に、営業利益の積み上げによる安定的な内部留保の充実を目指しております。なお、2020年3月期(連結)の業績見込といたしましては、前連結会計年度の各事業部門の営業成績をベースに目標値を設定し、加えてテナントビルにおける修繕費、100周年記念事業に係る諸経費等を考慮した結果、親会社株主に帰属する当期純利益を2千万円と見込んでおりますが、基幹事業の営業利益による内部留保の積み上げには今しばらくの時間を要するものと考えております。そのため今後も、経営基盤のさらなる安定化を目指すため、特に映画事業におきましては将来のセグメント利益の確保に向けて、映画興行のみならず映画配給も手掛けることで事業コンテンツの充実をはかるなど、復配を目標としたより前向きな経営施策を講じてまいります。

(4) 中長期的な会社の経営戦略

中長期的な会社の経営戦略として、殊にミニシアター経営に係る映画事業を取り巻く厳しい経営環境の中、主軸である映画事業を今後も継続して行くため、映画興行に加え映画配給も手掛ける総合的な映画事業の展開を行うとともに、映画事業以外でも当社グループの事業資産のポテンシャルをしっかりと引き出し、有効活用していくことが重要であると考えております。

当社は「社会に健全な娯楽を提供すること」を主要な事業目的としており、その役割を現在担っているのが映画事業であると考えております。しかしながら、映画事業は個人消費の動向や上映作品の持つ集客力、流行等に大きな影響を受けやすい事業であるため、主力事業として企業イメージに対する数字に表れない貢献はあるものの、収益面で常時安定的に会社の業績向上に寄与できる事業とは言い難い側面があることも否めません。当社の映画館が所在する東京都新宿区におきましても、多くのシネコンが開設されている現状では、当社のようなミニシアターでは上映作品の選定においても厳しい環境にあるといえます。そんな経営環境の中にあって、ミニシアターの存在価値をより高めるために、絵劇場の規模に見合ったより良い作品を自ら選別する力をより磨いていく必要があると考え、番組編成の強化に加えて、映画の自社買付配給にも力を入れてまいります。当社は映画興行と映画配給は車の両輪であると認識しており、映画配給に関するノウハウを蓄積し、包括的に映画事業を手がける会社として経営戦略を練り直してまいります。

また、収益的に不確実性が伴う映画事業を継続的に運営していくには、会社の経営基盤の安定が不可欠であり、そのためには、不動産賃貸事業を中心とした不動産事業や自動車教習事業においても確実に収益を上げていくことが重要であります。従いまして、映画事業に加えて不動産事業や自動車教習事業も含めたグループ全体の事業資産をより有効に活用することで、確実に収益を生み出せる経営体質を維持継続していくことが経営戦略として重要であると考えております。

今後も当社では、主要な事業目的である映画事業を主軸とした「社会に健全な娯楽を提供すること」を安定的に継続していくために、さらなる経営基盤の充実を心がけてまいります。

(5) 会社が対処すべき課題

主力事業である映画事業をはじめ、基幹事業による営業利益を長期継続的に確保し、復配を実現することが当社グループの課題であります。

当連結会計年度におきましては、不動産投資に係る一時的な収入があったことにより、前連結会計年度と比べ、売上高、営業利益、経常利益、親会社株主に帰属する当期純利益が増加しておりますが、映画事業をはじめとした基幹事業の収益による安定的な内部留保の積み上げには、いましばらくの時間を要するものと考えております。

そのため今後も、将来の継続的な利益配分を念頭に置き、営業利益による自己資本の充実に向けて、映画の自社買付配給等、映画に関連した新たなビジネス・コンテンツの開発に力を入れることにより映画事業の収益力改善を目指し、また不動産事業、自動車教習事業のより一層の安定化を進め、グループの収益力の強化と早期復配に向け、経営の全力を傾注してまいります。

具体的には、映画事業におきましては、2020年6月に「武蔵野館」が100周年を迎えるにあたっての記念上映・記念企画や、本年度6回目を迎える「シネマカリテ」における映画祭「カリテ・ファンタスティック!シネマ・コレクション(通称『カリコレ』)」の開催、また、お客様のニーズを把握するために業界の情報・動向をしっかりと把握し、当社が所有する東京都新宿地区5スクリーンの連携により、良作・話題作に富んだ魅力的な番組編成を行い、安定的な来場者の確保・増加を目指してまいります。映画の自社買付配給につきましても、当連結会計年度は中国・香港合作映画『閃光少女』、イタリア映画『チャンブラにて』を公開し好評を博しましたが、今後も映画の規模や品質、収益性等のバランスを考慮し、より良い映画を買い付け配給していくことで映画興行との相乗効果をはかってまいります。

不動産事業におきましては、不動産投資に係る一時的な収入があったことにより、前連結会計年度に比べ増益となりましたが、一方で主要テナントビルの老朽化等による大規模修繕・減価償却費の増加もより顕著になってくることが懸念され、今まで以上に関連業者や顧客との連携・連絡に気を配り、しっかりとプロパティ・マネジメントを行っていくことで引き続き安定した収益の確保をはかってまいります。

自動車教習事業におきましては、少子化や若年層の運転免許離れ、また近隣の自動車教習所との競合といった厳しい経営環境が教習生の確保に影響を及ぼしているものと認識しております。そのような経営環境の中、普通自動車運転免許以外にも、準中型自動車や大型自動車、大型特殊自動車、大型二輪、さらには高齢者教習など、多様な教習メニューを受けられるコンテンツの充実性をPRし、きめ細かな送迎ルートによる通い易い自動車教習所を目指し、収益の維持に努めてまいります。

商事事業におきましては、東京都目黒区にて経営委託している飲食店「ピーターラビット ガーデンカフェ」の営業成績が収益の中心となっておりますが、そのイメージキャラクターの世界観を活かした店舗作りと顧客の嗜好とのマッチングが営業成績に影響を及ぼす重要な要素であると考えております。今後も、イメージキャラクターの魅力を活かしたオリジナルメニューやキャラクターとのコラボグッズの開発、イベントの開催など、営業成績の向上に向けて収益力の強化をはかってまいります。

以上のように、各事業部門において経営環境に留意しながら諸施策を実施することにより、対処すべき課題の解消に向けて、全社挙げて全力で取り組んでまいります。

2 【事業等のリスク】

投資者の判断に影響を及ぼす可能性のある事項には、以下のようなものがあります。

なお、文中の将来に関する事項は、有価証券報告書提出日現在において当社グループが判断したものであります。

経営環境の変化、特定の取引先等への依存等

(映画事業)

映画興行事業は上映する作品の集客力により興行成績が大きく左右されます。快適に映画鑑賞していただける劇場空間を提供することが当社の責務であるとともに、当社の劇場規模や雰囲気に見合い、かつ集客力の高い作品を継続的に上映し続けることが興行成績の安定的な維持には不可欠であります。それだけ作品への依存度は高く、その選択によっては収益の減少につながるリスクが存在しております。

映画ファンの嗜好も多様化している現在、当社のようなミニシアター経営におきましては、シネコンとの差別化をはかりながらの上映作品の選定はより難しさが増しているといえます。そのため、作品のジャンルにとらわれることなく、劇場の立地・特性も考慮し、選択可能な作品の中から、より集客力が見込め、かつ劇場の雰囲気に見合った作品をいかに選択していくかが番組編成の大きなテーマとなっております。

一方、近隣シネコンとの競合やミニシアター向け作品のヒット作不足、設備の維持管理に要するコストの増大も映画館経営における大きなリスクとなっており、また、自然災害の発生により営業継続が困難になるケースや、入居しているテナントビルの諸事情や停電等の影響による営業の休止・自粛、さらにはインフルエンザ等の流行またはその兆候が顕著となった場合につきましても、集客が激減する可能性も考えられます。

また、新たに参入した映画配給事業においては、作品の公開状況や配給成績等が当初の計画と乖離した場合、当社グループの経営成績及び財政状態に影響を及ぼす可能性があります。

(不動産事業)

当社の収益の大きな柱である不動産賃貸部門は、各賃貸物件の借主様が安定的継続的に入居していただけることが収益力持続の前提となっておりますが、テナントビルにおいて長期間にわたりテナントが決まらないケース等、その前提条件が困難な状況となった場合、収益力の継続にリスクが生じるおそれがあります。

また、設備の老朽化等に起因する維持管理費用の増加や新たな設備投資が財務面に与える影響、さらには地震等の自然災害による損害の発生や予期せぬ事故・賃貸物件の瑕疵等による信用力の低下も考えられ、当社の経営に大きな影響を及ぼす可能性があります。

(自動車教習事業)

自動車運転免許の新規取得者は、18歳～20歳代の若年層人口が大半を占めておりますが、今後統計的に若年層人口は減少の傾向にあります。若年層人口の減少は運転免許取得者の減少に直結するため、業界全体としても将来の収益の確保において重要な問題と認識しており、併せて昨今では、若年層の自動車運転免許離れという懸念もあるため、当社グループの経営成績及び財政状態に影響を及ぼす可能性があります。

また、教習所内外における交通事故に起因する賠償責任をはじめとするあらゆるリスク、設備の老朽化による維持管理費用の増加や新たな設備投資が財務面に与える影響、また、国内や世界の景況、中東情勢、自然災害の影響等、社会情勢の変化により原油価格が高騰し燃料費が増加するリスクも常に認識していく必要があります。

不採算事業からの撤退等の事業再編による影響

将来において当社グループを取り巻く経営環境に変化が生じた場合、不採算事業からの撤退や関係会社の整理をはじめとしたリストラ等、事業再編を行う可能性があります。その場合、事業の撤退や事業所の閉鎖、関係会社の整理等に係る特別損失の発生等、係る事業再編が当社グループの業績及び財政状態に影響を及ぼす可能性があります。

既存の出資先等に関するリスク

当社グループはフィリピンの現地相手先との合弁会社「ROCES MUSASHINO HOLDINGS, INC.」に対し出資を行っておりますが、同社の事業計画は当初と比べその進捗状況に乖離が生じており、そのため、2017年3月期に同社株式を減損処理いたしました。有価証券報告書提出日現在、同社の今後の方針について、引き続き現地相手先と調整・交渉を行っておりますが、今後の同社の方針や財政状態の変化等により、当社グループの経営成績及び財政状態にさらなる影響を及ぼす可能性があります。

新規事業等に係る出資・投資額回収のリスク

当社グループが新規事業に係る一定の出資または投資等を行うにあたり、当該事業の業績・資金の運用状況によっては、出資金額または投資金額の回収に懸念が生じ、当社グループの経営成績及び財政状態に影響を及ぼす可能性があります。

3 【経営者による財政状態、経営成績及びキャッシュ・フローの状況の分析】

(1) 経営成績等の状況の概要

当連結会計年度における当社グループ（当社、連結子会社及び持分法適用会社）の財政状態、経営成績及びキャッシュ・フロー（以下、経営成績等という。）の状況の概要は次のとおりであります。

財政状態及び経営成績の状況

A. 当連結会計年度の経営成績の状況

当連結会計年度の我が国の経済は、根強いインバウンド需要がサービス消費を下支えしたものの、深刻な人手不足や海外経済の減速もあり、先行きが不透明な状況のもと推移いたしました。当社グループの主要な事業である映画興行界、特に当社のようなミニシアター経営におきましても先行きの見通しは難しく、依然として厳しい経営環境となっております。

このような状況のもと、当社グループの当連結会計年度の業績につきましては、映画事業部門は良質な作品を多く取り揃え、また自社買付配給作品の上映も行うなど、ミニシアターならではのバラエティに富んだ番組編成を行ってまいりましたが、全体的な興行収入は伸び悩み、また映画配給関連費用の計上もありセグメント損失となりました。不動産事業部門は、主要テナントビルにおける修繕費等維持管理費用の増加があったものの、その稼働状況は引き続き安定しており、また不動産投資に係る一時的な収入の計上もあったことから、営業成績は概ね堅調に推移いたしました。自動車教習事業部門は、入所者の教習メニューの消化が進み、また営業費用の減少もあり、セグメント利益は前連結会計年度に比べ増加いたしました。商事事業部門は、外部に経営委託している飲食店の業績が概ね堅調であり、前連結会計年度並みの営業成績となりました。

その結果、全体として売上高は16億8千8百万円（前期比7.1%増）、営業利益は1億3千9百万円（前期比303.8%増）、経常利益は1億6千2百万円（前期比67.4%増）、親会社株主に帰属する当期純利益は1億2千2百万円（前期比20.2%増）となりました。

B. セグメントの状況

（映画事業部門）

「武蔵野館」では自社買付配給作品『チャンブラにて』をはじめ、『バッド・ジーニアス 危険な天才たち』『THE GUILTY ギルティ』等、「シネマカリテ」では自社買付配給作品『閃光少女』をはじめ、『ブリグズビー・ベア』『ア・ゴースト・ストーリー』等、バラエティに富んだ個性ある作品を多数ラインナップし、話題作も上映したものの、全体的な興行収入は伸び悩みました。また、連結子会社における映画配給関連事業に係る営業費用負担の影響もあり、その結果、部門全体の売上高は、5億6千3百万円（前期比4.6%減）、セグメント損失は6千万円（前期は5千8百万円のセグメント損失）となりました。

（不動産事業部門）

主要テナントビルの建物老朽化に伴う修繕費等の維持管理費用の増加はありましたが、賃貸部門の稼働状況は概ね安定しております。販売部門につきましては、当連結会計年度におきましても具体的な営業活動の成果を上げるには至りませんでした。また、当社が信託受益権を共同保有している「武蔵野ビル」において、不動産投資に係る一時的な収入を売上高に計上いたしました。その結果、部門全体の売上高は7億2千4百万円（前期比26.0%増）、セグメント利益は4億7千8百万円（前期比30.1%増）となりました。

（自動車教習事業部門）

普通自動車に加えて自動二輪、大型自動車、特殊自動車まで、多種多様な運転免許取得ニーズに応える自動車教習所として地域でのPR活動を行うとともに、各種教習料金割引キャンペーンの実施や送迎ルートの充実に力を注ぎました。その結果、部門全体の売上高は3億1千1百万円（前期比2.8%減）、セグメント利益は営業費用の減少もあり、3千6百万円（前期比122.5%増）となりました。

（商事事業部門）

東京都目黒区において経営委託している飲食店は、季節に応じたメニューの開発や物販に力を入れるなど、集客力の向上に努めておりますが、営業成績は概ね前連結会計年度並みとなりました。その結果、部門全体の売上高は8千1百万円（前期比0.0%減）、セグメント利益は7百万円（前期比0.1%減）となりました。

（その他）

主としてマクミラン・アリスの著作権料収入や自販機手数料等でありますが、全体として売上高は7百万円（前期比9.9%減）、セグメント利益は2百万円（前期比18.7%減）となりました。

スポーツ・レジャー事業部門は営業中止中であります。

C. 当連結会計年度の財政状態の状況

総資産につきましては、不動産投資に係る一時的な収入等による売上高の増加により現金及び預金の増加8千7百万円があったことに加え、テナントビルの設備更新工事に係る有形固定資産の増加1億2千7百万円等があったことから、前連結会計年度末から2億3千3百万円の増加となりました。負債につきましては、未払金等の増加による流動負債の増加2億9百万円があった一方、有利子負債の返済に係る長期借入金の減少や退職給付に係る負債の減少による固定負債の減少9千7百万円があったことから、前連結会計年度末に比べ1億1千1百万円の増加となりました。純資産につきましては、親会社株主に帰属する当期純利益の計上1億2千2百万円等により、前連結会計年度末から1億2千2百万円の増加となりました。

以上のことから、当連結会計年度末残高は総資産64億6千6百万円、負債27億1千2百万円、純資産37億5千3百万円となりました。

キャッシュ・フローの状況

当連結会計年度末における連結ベースの現金及び現金同等物（以下「資金」という。）は、税金等調整前当期純利益の計上に加え、有利子負債の約定返済額が減少したことなどから、7億4千万円（前期比13.4%増）となりました。

内訳といたしましては、営業活動において2億1千4百万円の資金を得て、投資活動において3千8百万円の資金を使用し、財務活動において8千8百万円の資金を使用した結果、資金残高は前連結会計年度末より8千7百万円増加いたしました。

当連結会計年度における各キャッシュ・フローの状況とそれらの要因は次のとおりであります。

営業活動によるキャッシュ・フロー

営業活動の結果得られた資金は2億1千4百万円（前期比2.0%増）となりました。

主な内訳は税金等調整前当期純利益1億5千8百万円、減価償却費1億2千1百万円等があった一方、仕入債務の減少額2千9百万円等があったことによるものであります。

投資活動によるキャッシュ・フロー

投資活動の結果使用した資金は3千8百万円（前期に使用した資金は2千6百万円）となりました。

これは主に有形固定資産の取得による支出4千2百万円等があったことによるものであります。

財務活動によるキャッシュ・フロー

財務活動の結果使用した資金は8千8百万円（前期に使用した資金は1億2百万円）となりました。

これは長期借入金の返済による支出6千6百万円、リース債務の返済による支出2千2百万円等があったことによるものであります。

生産、受注及び販売の状況

当社はサービス業及び不動産賃貸・販売業を中心に業態を形成しており、受注・生産形式の営業活動は行っておりません。また、販売の状況については、「 財政状態及び経営成績の状況 B.セグメントの状況」におけるセグメント業績の売上高の記載に示した通りであります。

なお、セグメント別に販売の内訳について示すと、下記の通りであります。

項目		前連結会計年度 (自 2017年4月1日 至 2018年3月31日)			当連結会計年度 (自 2018年4月1日 至 2019年3月31日)		
		販売高(千円)	構成比(%)	セグメント内構成比(%)	販売高(千円)	構成比(%)	セグメント内構成比(%)
セグメント	販売の内訳						
	映画事業						
	入場料売上	525,964		89.0	501,179		88.8
	配給収入等	437		0.1	339		0.1
	売店売上等	64,702		10.9	62,442		11.1
	計	591,104	37.5	100.0	563,961	33.4	100.0
不動産事業	不動産賃貸等売上()	538,496		93.7	686,907		94.9
	不動産管理売上	36,372		6.3	37,225		5.1
	計	574,868	36.5	100.0	724,133	42.9	100.0
自動車教習事業	教習指導売上	319,962		99.8	310,933		99.8
	自販機売上等	634		0.2	544		0.2
	計	320,597	20.3	100.0	311,477	18.4	100.0
商事事業	飲食店舗の委託経営	81,224		99.9	81,223		99.9
	住宅資材卸売等	76		0.1	76		0.1
	計	81,300	5.1	100.0	81,299	4.8	100.0
その他	著作権料収入等	8,826	0.6		7,948	0.5	
	合計	1,576,697	100.0		1,688,818	100.0	

主な相手先別の販売実績及び当該販売実績の総販売実績に対する割合

相手先	前連結会計年度		当連結会計年度	
	販売高(千円)	割合(%)	販売高(千円)	割合(%)
株式会社高島屋	221,592	14.1	221,592	13.1

(2) 経営者の視点による経営成績等の状況に関する分析・検討内容

経営者の視点による当社グループの経営成績等の状況に関する認識及び分析・検討内容は次のとおりであります。なお、文中の将来に関する事項は、当連結会計年度末現在において当社グループが判断したものであります。

重要な会計方針及び見積り

当社グループの連結財務諸表は、我が国において一般に公正妥当と認められている会計基準に基づき作成されております。この連結財務諸表の作成に当たって、資産・負債の報告金額及び報告期間における収益・費用の報告金額を継続的かつ適正に評価するために、過去の実績や状況に応じ合理的だと考えられる様々な方法に基づき、また予測し有る偶発事象の影響値等も加味しながら、いくつかの重要な見積りおよび判断・評価を行っております。しかしながら、見積り特有の不確実性があるため、実際の結果がこれらの見積りと異なる場合があります。

ここでは当社グループの重要な会計方針のうち、判断、見積りによる評価が重要と認識される項目について説明をいたします。

A. 繰延税金資産

将来減算一時差異の回収可能性を検討し、回収可能性が低いと判断されるものについては評価性引当額を計上して、適正な計上額を見積っております。当連結会計年度におきましては、提出会社および連結子会社の(株)寄居武蔵野自動車教習所、自由ヶ丘土地興業(株)において、当連結会計年度末における各社の将来の課税所得見込額に応じた繰延税金資産を計上しております。

B. 貸倒引当金

過年度(3ヶ年)の貸倒実績に基づき、一般債権の貸倒引当率を連結0.416%としております。また、一部の債権については個別評価によっており、相手先の財政状態等、回収可能性を十分に検討したうえで、引当額の見積りを行っております。

C. 土地

(再評価に係る繰延税金負債及び土地再評価差額金)

当社が保有する土地は、全般的に取得時より相当の年月が経過しているものが多く、時価との乖離が重要な金額であったことから、時価と照らし合わせて適正な価格で評価をし直すことが望ましいものと考え、2000年3月期に土地の再評価をいたしました。再評価の方法につきましては、「第5 経理の状況 1 連結財務諸表等 (1)連結財務諸表 注記事項(連結貸借対照表関係)」をご参照ください。

(減損損失)

各資産のグルーピングに基づいた減損の兆候を確認し、兆候有りと判断したものについては、将来キャッシュ・フローの見積もり等の方法や遊休資産においては不動産鑑定評価額等により、減損損失の認識(判定)、減損損失の測定を行っております。

当連結会計年度の経営成績等の状況に関する認識及び分析・検討内容

A. 連結貸借対照表関係

(流動資産の部)

「現金及び預金」が8千7百万円増加しております。これは主に、不動産投資に係る一時的な収入の計上もあつたため、営業活動によるキャッシュ・フローの増加額が、投資活動によるキャッシュ・フローと財務活動によるキャッシュ・フローにおける資金の減少額を上回つたためであります。一方で流動資産全体としては、7千8百万円増加(前期比10.5%増)しております。

(固定資産の部)

有形固定資産につきましては、全体で1億2千7百万円増加(前期比2.7%増)しております。主な増加の理由は、テナントビルにおける設備更新工事に係る「建物及び構築物」の取得であります。無形固定資産につきましては、大きな増減はありません。投資その他の資産につきましては、持分法適用関連会社の収益計上による「投資有価証券」の増加を主な理由とし、2千8百万円増加(前期比4.5%増)しております。以上のことから固定資産全体としては、1億5千5百万円増加(前期比2.8%増)しております。

(流動負債の部)

主として、テナントビルの設備更新工事に伴う未払金の増加等による「その他」の増加1億9千9百万円等があつたことにより、流動負債全体としては、2億9百万円増加(前期比40.9%増)しております。

(固定負債の部)

約定返済による「長期借入金」の減少6千6百万円、「リース債務」の減少1千4百万円、また、「退職給付に係る負債」の減少1千6百万円等により、固定負債全体としては、9千7百万円減少(前期比4.7%減)していません。

(純資産の部)

親会社株主に帰属する当期純利益1億2千2百万円の計上により利益剰余金が増加し、純資産全体としては、1億2千2百万円増加(前期比3.4%増)しております。

B. 連結損益計算書関係

(売上高及び営業利益)

当連結会計年度におきましては、映画事業は、「武蔵野館」「シネマカリテ」両館ともに、前連結会計年度と比べ減益となり、また連結子会社において取り組んでいる映画の自社買付配給等に係る営業費用の発生もあり、映画事業は全体としてセグメント損失の計上となりました。一方、不動産事業部門においては主要な商業テナントビルの営業成績は堅調に推移し、また不動産投資に係る一時的な収入の計上もあり、セグメント利益は前連結会計年度に比べ増加いたしました。自動車教習事業部門は少子化や若年層の運転免許離れ等の厳しい経営環境の中、営業費用の減少もあり、セグメント利益は前連結会計年度を上回りました。

その結果、当連結会計年度の売上高は16億8千8百万円（前期比7.1%増）、営業利益は1億3千9百万円（前期比303.8%増）となりました。

当社は、中期事業計画の練り直しに時間を要していることもあり、中長期的な経営方針・経営戦略等または経営上の目標の達成状況を判断するための客観的な指標等は設定しておりませんが、セグメント損失を計上した映画事業部門の現状や自動車教習事業部門の将来の経営環境をしっかりと捉え、会社の経営課題である復配に向けて、営業利益による利益剰余金の積み上げをはかるため、下記のセグメント別の状況に対応した営業施策等の検討や見直しを行いながら、安定的な内部留保の充実を目指してまいります。

セグメント別の状況については次のとおりであります。

・映画事業

映画興行界全体といたしましては、前年度に引き続き、シネコン等で上映された大ヒット作や意外性のあるヒット作が生まれ業界をけん引したものの、中規模以下のヒット作と呼べる作品は前年度と比較してもそう多くはなく、特に当社のようなミニシアターにおきましては、上映作品の公開規模や広告宣伝、また劇場のキャパシティにおいても限られた側面があり、依然として厳しい経営環境となりました。当連結会計年度におきましては、「武蔵野館」「シネマカリテ」とともに、一部に人気を博した話題作の上映もありましたが、全体的に、番組編成力や映画館自らの情報発信力の不足もあり、それらが営業成績に影響したものと認識・分析しております。また、連結子会社において取り組んでいる映画の自社買付配給におきましては、当連結会計年度においては、中国・香港合作映画『閃光少女』、イタリア映画『チャンブラにて』を公開し好評を博したものの、限られた公開規模やPR不足もあり、営業損失を計上いたしました。その結果、部門全体の売上高は、5億6千3百万円（前期比4.6%減）、セグメント損失は6千万円（前期は5千8百万円のセグメント損失）となりました。

以上のことから、当連結会計年度は部門全体としてセグメント損失の計上となりましたが、映画興行事業におきましては、東京都新宿地区において「武蔵野館」「シネマカリテ」2館5スクリーンの連携を高め、より柔軟性・機動性に富んだ魅力的な番組編成を行い、小さなシネコンのような相乗効果を高めていくことで、安定的な来場者の確保・増加を目指し、今後につなげてまいります。また、過去の営業成績の検証もしっかりと行い、お客様のニーズを把握するために業界の情報・動向を把握・分析し、部門の収益力強化に取り組んでまいります。なお、2020年6月には「武蔵野館」が100周年を迎えるにあたっての記念上映・記念企画を2019年6月より実施いたします。映画の自社買付配給等につきましては、当社は映画興行と映画配給は車の両輪のようなものであるとの考えから、自ら映画を選び配給する力を育成することで、将来、当社の映画事業の主軸である映画興行事業にも必ずや好影響をもたらすものと考えており、映画の規模や品質、収益性等のバランスを熟考し、より多くのお客様に満足いただける作品を買い付け配給してまいります。

・不動産事業

不動産事業につきましては、主要な賃貸物件は首都圏の利便性の高い場所に所在し、またそのプロパティ・マネジメントにも細心の注意をはらうことにより、引き続き安定した顧客の確保を維持出来ているものと認識しております。当連結会計年度におきましても、主要な商業テナントビルは安定的に稼働し、収益の確保に貢献いたしました。また、当連結会計年度は、所有テナントビルの老朽化に係る設備更新工事による修繕費等の発生があり、今後とも所有賃貸等不動産の老朽化による大規模修繕や減価償却費等の費用の増加が懸念されることから、今まで以上に関連業者や顧客との連携・連絡に気を配り、しっかりとしたプロパティ・マネジメントを行っていくことで、引き続き収益の確保をはかってまいります。なお、当連結会計年度は、東京都新宿区の「武蔵野ビル」において不動産投資に係る一時的な収入があり、営業利益は増加いたしました。不動産販売につきましては、当連結会計年度も具体的な営業活動の成果はなく業界の動向を窺うに止まりましたが、今後とも関連業者との連絡を密にし、取引の機会を検討してまいります。その結果、部門全体の売上高は7億2千4百万円（前期比26.0%増）、セグメント利益は4億7千8百万円（前期比30.1%増）となりました。

以上のことから、当連結会計年度における不動産事業は賃貸部門を中心に堅調な営業成績となりましたが、引き続き、現状の収益水準を維持し増強していくために、所有賃貸等不動産の管理状況やテナントの状況をしっかりと把握し、関連業者やテナントとの連携・連絡を緊密に行うことで、今後ともプロパティ・マネジメントの強化をはかってまいります。

・自動車教習事業

自動車教習事業は、少子化や若年層人口の運転免許離れといった厳しい経営環境のなか、それらの経営環境を背景とした若年層の教習生の減少や、また繁忙期に教習メニューの消化が追いつかず前受金が増加したことに伴う売上高の減少はあったものの、一方で諸税公課・修繕費等の営業費用の減少があり、セグメント利益は前連結会計年度に比べ増加いたしました。その結果、部門全体の売上高は3億1千1百万円（前期比2.8%減）、セグメント利益は3千6百万円（前期比122.5%増）となりました。

自動車教習事業では、それらの経営環境や現状を踏まえ、当該経営環境等に対応すべく、今後とも大型自動車・大型自動二輪や大型特殊自動車・けん引自動車、さらには高齢者講習など、普通自動車運転免許以外にも多様な運転免許を取得できる自動車教習所として地域での認知度をより高め、幅広い教習生の獲得に努めるとともに、効率のよい教習指導員の配置にも工夫を凝らし、また、よりきめ細かな送迎パスのルートの開拓により教習生の皆様が教習所に通い易い環境を整備すること等が業績の安定化につながるものと分析し、今後とも経営環境の変化に向けた対策をしっかりと講じてまいります。

・商事業

商事業におきましては、当連結会計年度は目黒区自由が丘にて経営委託している飲食店の営業成績が収益の中心となっております。当該店舗「ピーターラビット ガーデンカフェ」は、イメージ・キャラクターの魅力を生かした店舗作りが好評をいただいております。当連結会計年度もイメージ・キャラクターをモチーフにしたメニュー・グッズの開発やイベントの開催等を行いました。現在の業態に変更してから相応の年数が経過したこともあり、売上高は前連結会計年度と比べ概ね横ばいとなりました。その結果、部門全体の売上高は8千1百万円（前期比0.0%減）、セグメント利益は7百万円（前期比0.1%減）となりました。

今後も収益力の維持・改善に向けて、地域における経営環境の分析とともにイメージ・キャラクターの魅力がより伝わるような店舗設計を目指し、店舗経営委託先との連絡をより密にし、地域のお客様のニーズを捉え、オリジナルメニューやグッズの開発、イベントの開催など、店舗のブランド力のさらなる強化をはかってまいります。

・その他

主としてマクミラン・アリスの著作権料収入や自販機手数料を「その他」の事業としており、全体として売上高は7百万円（前期比9.9%減）、セグメント利益は2百万円（前期比18.7%減）となりました。マクミラン・アリスの著作権事業につきましては、著作権提供先の状況に気を配り収益の確保につながるような管理をしっかりと行ってまいります。また、自販機手数料につきましては、季節や天候の変動、またドリンクのラインナップや自販機のバージョンアップ等にも気を配ってまいります。

(経常利益)

営業外収益として、受取利息及び配当金 2 百万円、持分法による投資利益 2 千 7 百万円等があった一方、営業外費用として支払利息 2 百万円、「その他」の営業外費用 6 百万円があり、経常利益は 1 億 6 千 2 百万円（前期比 67.4%増）となりました。

(親会社株主に帰属する当期純利益)

特別損失として、所有不動産の環境対策費（アスベスト除去費用）4 百万円の計上がありました。法人税等につきましては、法人税、住民税及び事業税 4 千 1 百万円に対し、主として連結子会社である株式会社寄居武蔵野自動車教習所の収益見込に基づいた繰延税金資産の増加による法人税等調整額の計上 6 百万円があり、法人税等合計は 3 千 5 百万円となりました。よって、当連結会計年度の親会社株主に帰属する当期純利益は 1 億 2 千 2 百万円（前期比 20.2%増）となりました。

C. 連結キャッシュ・フロー計算書関係

「営業活動によるキャッシュ・フロー」につきましては、税金等調整前当期純利益の計上や減価償却費があった一方、仕入債務の減少や持分法による投資利益の計上があり、2 億 1 千 4 百万円の資金の増加（前期比 2.0%増）となりました。「投資活動によるキャッシュ・フロー」は、「シネマカリテ」におけるロビーの改修工事や自動車教習事業部門における教習車両の取得等による支出により、3 千 8 百万円の資金の減少（前期は 2 千 6 百万円の資金の減少）となり、「財務活動によるキャッシュ・フロー」は、金融機関よりの長期借入金の約定返済やリース債務の返済が進んだことにより 8 千 8 百万円の資金の減少（前期は 1 億 2 百万円の資金の減少）となりました。

その結果、「現金及び現金同等物の期末残高」は 7 億 4 千万円（前期比 13.4%増）となりました。

経営成績に重要な影響を与える要因について

映画事業は、話題性・集客力のある作品を数多く世に送り出して行くことが経営成績の安定には不可欠であり、そのためには、映画興行・映画配給の双方向から、映画の魅力をいかにPRしていくかが、経営成績に重要な影響を与えるひとつの要因と考えております。当社は映画興行のみならず映画配給も手がけることによって、映画の魅力をより重層的に発信していくことができるものと考えており、その効果として、一人でも多くのお客様が映画館に足を運んで映画の魅力に触れていただき、経営成績に良い影響を及ぼし、より良い結果に結びつけていけるよう、今後も努力してまいります。

不動産事業につきましては、経常的に安定した収益が見込める不動産賃貸業を柱としており、当社グループ全体の事業基盤を下支えするうえで重要な役割を担っております。引き続き安定した経営基盤を維持していくためには、所有賃貸等不動産の状況を常に把握し、設備の更新や入居テナントの経営環境等にも気を配りながら、所有不動産の資産価値の維持向上に務めていくことが不可欠であると考えております。

自動車教習事業におきましては、若年層の人口減少や自動車運転免許への関心の低下、さらには地域内における自動車教習所の競合といった要因による収益への影響が引き続き今後も予想されるため、大型特殊自動車等の普通自動車以外の車種や高齢者教習など、近隣の自動車教習所との差別化をはかるべく、多様な教習メニューの提供と送迎パスルートの拡充、教習指導員の教育や効率のよい配置、また地域との信頼関係を深める努力を怠らず、収益の維持に努めてまいります。

商事事業といたしましては、経営委託先の飲食店にて採用するキャラクターのイメージが重要な経営成績につながるファクターであると認識しており、経営委託先と連携し、キャラクターの魅力がより伝わるような新しい飲食メニューやグッズ等の開発により、店舗のブランド力を高め、収益の向上に繋げてまいります。

経営戦略の現状と見通し

当社は映画事業を通じて「社会に健全な娯楽を提供すること」を主要な事業目的としております。しかしながら、映画事業は上映作品の持つ集客力、流行等に大きな影響を受ける事業であり、主力事業としての数字でははかれない会社への貢献はあるものの、収益面においては、現時点において、常時安定的に会社の業績向上に寄与しているとは言い難く、セグメント損失を計上している現状から考えても、不確実な側面があることは否めません。映画事業においては、今後も引き続き、番組編成やサービスの質の向上・設備の充実等、映画館に足を運んでいただく営業努力を継続していくことでセグメント収益の改善に向けて取り組んでいくことはもちろんですが、不動産事業、自動車教習事業においてもその事業資産を有効に活用することで、グループ全体として確実に収益を生み出せる経営体質の強化に努め、さらなる経営基盤の安定化に向けて努力していくことが重要と考えております。

映画事業においては、従来の映画興行事業に加え、映画配給事業等、新たに取り組み始めた事業の拡充も視野に入れ、さらには「武蔵野館」100周年記念事業による企画上映等のイベントを行うことで、ミニシアターの存在価値をPRし、また将来のミニシアターを取り巻く経営環境にも配慮しながら、包括的に映画事業を手がける会社を目指してまいります。

資本の財源及び資金の流動性についての分析

A. 流動性の管理方針

映画興行や不動産賃貸が事業の主軸である当社は、現金または銀行振込による売上入金の高いため、売上債権の回収については概ね効率が良いものと考えております。したがって毎日の入金管理に重点を置くことはもちろん、売掛債権等が発生する場合には、その相手先の状態に気を配り、また信用調査を行うなど、営業部門と経理部門双方からのリスク管理を徹底しております。

B. 短期的な債務の状況

当社グループの総資産のうち、流動負債の構成比は11.2%となりました。前年度の8.2%に比べ、未払金が増加の傾向にありますが、その理由はテナントビルの設備更新工事に係る未払金からなる「その他」の増加であります。また、流動比率は114.6%（前年度は146.0%）となっております。今後も財務基盤の安定性を保つために、短期的な債務の管理には細心の注意をはらってまいります。

C. ファイナンス及び資本の財源

資本市場における資金の調達は1989年以降行っておりません。現在は主に金融機関からの借入金により資金調達を行っております。また当社は安定的な営業利益の積み上げによる復配の実現を経営課題としており、キャッシュ・フロー経営を徹底させることにより自己資本の増強に努めることが第一と考えております。

また、当社は、より快適な劇場空間を提供しお客様の来館満足度の向上を目指すため、当連結会計年度に映画館「シネマカリテ」におけるロビーの改装を行っており、その支出は2千5百万円となりましたが、当該支出に係る資金につきましては手許資金で賄っており、当連結会計年度において新たな金融機関よりの借入は行っておりません。

経営者の問題認識と今後の方針について

主力事業である映画事業をはじめ、基幹事業による営業利益を長期継続的に確保し、復配を実現することが当社グループの課題であると認識しております。当連結会計年度におきましては、不動産投資に係る一時的な収入等もあり、連結損益計算書における親会社株主に帰属する当期純利益は1億2千2百万円となり、利益剰余金は3億3百万円となりましたが、その原資は概ね一時的な収益によるものであり、映画事業においては映画興行収入の減少や映画配給関連事業に係る営業費用の発生によりセグメント損失の計上となりました。映画事業は当社の主力事業であり、会社を代表する事業セグメントとして数字には表れない貢献はあるものの、一方でセグメント損失の計上は当社の財務面に重要な影響を及ぼしており、早急に改善すべき経営課題であると考えております。そのため当社では映画事業を今後も継続していくために、その収益力の向上に向けての映画配給事業への取り組みや、また、映画の素晴らしさ、映画館で映画を観る楽しさをより多くの方々に再認識していただき、当社映画館のファン裾野を拡げることを企画の趣旨とした「武蔵野館」100周年記念事業の開催など、映画事業に関する新たな経営戦略を打ち出しておりますが、その収益力の改善にはいましばらくの時間と投資が必要であり、復配の原資となる営業利益の積み上げによる安定的な内部留保の確保には、現段階においては至っていないものと考えております。そのため今後も、すべての事業において安定的に営業利益を積み重ねていけるよう、経営基盤のさらなる強化を目指し、特に映画事業におきましては、映画配給関連事業の育成に注力し、映画興行のみならず映画配給も手掛ける会社として事業コンテンツの充実をはかるなど、復配に向けた、より前向きな経営施策を講じてまいります。

4 【経営上の重要な契約等】

当社は株式会社リサ・パートナーズ（以下「リサ・パートナーズ」）との間で、2005年5月27日に開催した取締役会での決議を経て、資本提携について基本合意書を締結しております。具体的な内容については、次の通りです。

1．資本提携の目的

リサ・パートナーズとの関係強化及び相互の発展を主要な目的とするものであります。

2．資本提携先の概要（2019年3月31日現在）

名称	株式会社リサ・パートナーズ
本店所在地	東京都港区港南二丁目15番3号
代表者	成影 善生
設立年月日	1998年7月2日
資本金	100百万円
事業の内容	金融・不動産関連業

3．資本提携の概要

当社の連結子会社が所有していた当社株式を、2005年5月27日付でリサ・パートナーズに譲渡いたしました。

2019年3月31日現在、リサ・パートナーズは当社株式を100,562株保有しております。詳しくは、「第4 提出会社の状況 1 株式等の状況 (6) 大株主の状況」をご参照ください。

5 【研究開発活動】

該当事項はありません。

第3 【設備の状況】

1 【設備投資等の概要】

当社グループでは、映画事業部門、不動産事業部門、自動車教習事業部門のいずれにおいても、保有資産の活用や施設の保全、またリニューアルといったことが集客力や収益力の維持と向上のために不可欠であり、各事業を取り巻く経営環境に見合った効果的な設備投資を行うことは、会社の重要課題のひとつであります。当連結会計年度においては、不動産事業部門におけるテナントビルの老朽化に伴う設備更新工事等を行い、その総額は253百万円となりました。

各セグメント別の主な設備投資状況につきましては、映画事業部門におけるロビー改修工事2千5百万円、不動産事業部門におけるテナントビル設備更新工事2億1千1百万円、自動車教習事業部門における教習車両入替5百万円、建物およびコース補修・修繕工事2百万円、教習用教材他器具備品取得2百万円、本社部門における会計システム・ハードウェア入替3百万円等であります。

2 【主要な設備の状況】

(1) 提出会社

2019年3月31日現在

事業所名 (所在地)	セグメントの名称	設備の内容	帳簿価額(千円)					従業員数 (名)	摘要	
			建物及び 構築物	機械装置 及び 運搬具	土地 (面積㎡)	工具、器 具及び備 品	リース資 産			合計
大宮ビル (埼玉県さいたま市大宮区)	不動産 事業	テナント ビル	379,190		1,558,481 (1,043)			1,937,671		1
新宿武蔵野館 (東京都新宿区 新宿)	映画事業	映画館	252,745	6,259		2,905	43,797	305,707	4 (28)	2
シネマカリ テ (東京都新宿区 新宿)	映画事業	映画館	39,036			1,387	2,767	43,191	4 (17)	3
信託受益権 (東京都新宿区 新宿)	不動産 事業	テナント ビル	587		151,230 (11)			151,817		4

(2) 国内子会社

2019年3月31日現在

会社名	事業所名 (所在地)	セグメントの名称	設備の内容	帳簿価額(千円)					従業員数 (名)	摘要
				建物及び 構築物	機械装置 及び 運搬具	土地 (面積㎡)	工具、 器具及 び備品	合計		
(株)寄居武蔵野 自動車教習所	寄居武蔵野自動 車教習所 (埼玉県大里郡 寄居町)	自動車 教習事業	自動車 教習	61,231	15,492	31,617 (1,403)	5,069	113,411	23 (19)	
自由ヶ丘土地 興業(株)	自由ヶ丘ミュー ビル (東京目黒区自由 ヶ丘)	不動産 事業	テナン トビル	135,360				135,360		5

- (注) 1 1 大宮ビルは(株)高島屋に賃貸しております。土地面積は持分に応じた面積を記載しております。
 2 2 新宿武蔵野館は東京都新宿区の武蔵野ビルにテナントとして入居しております。
 3 3 シネマカリテは東京都新宿区の野和ビルにテナントとして入居しております。
 4 4 信託受益権の土地面積は、持分に応じた面積を記載しております。
 5 5 自由ヶ丘土地興業(株)所有の自由ヶ丘ミュージービル(地下1階地上3階)は、全フロア(延床面積1,787㎡)を提出会社がテナントに賃貸しており、2019年3月期の賃貸収入は99,706千円であります。
 6 従業員数の(外書)内は臨時従業員数を示しております。
 7 上記の他、連結会社以外からの主要な賃借設備の内容は、下記のとおりであります。

(1) 国内子会社

会社名	事業所名 (所在地)	セグメントの名称	設備の内容	台数 (台)	年間リース料 (千円)	リース契約 残高(千円)
(株)寄居武蔵野 自動車教習所	寄居武蔵野自 動車教習所 (埼玉県大里 郡寄居町)	自動車教習事 業	一般教習車両	8	1,486	759

3 【設備の新設、除却等の計画】

該当事項はありません。

第4 【提出会社の状況】

1 【株式等の状況】

(1) 【株式の総数等】

【株式の総数】

種類	発行可能株式総数(株)
普通株式	4,000,000
計	4,000,000

【発行済株式】

種類	事業年度末現在 発行数(株) (2019年3月31日)	提出日現在 発行数(株) (2019年6月28日)	上場金融商品取引所 名又は登録認可金融 商品取引業協会名	内容
普通株式	1,050,000	1,050,000	東京証券取引所 (市場第二部)	単元株式数は100株で あります。
計	1,050,000	1,050,000		

(2) 【新株予約権等の状況】

【ストックオプション制度の内容】

該当事項はありません。

【ライツプランの内容】

該当事項はありません。

【その他の新株予約権等の状況】

該当事項はありません。

(3) 【行使価額修正条項付新株予約権付社債券等の行使状況等】

該当事項はありません。

(4) 【発行済株式総数、資本金等の推移】

年月日	発行済株式 総数増減数 (株)	発行済株式 総数残高 (株)	資本金増減額 (千円)	資本金残高 (千円)	資本準備金 増減額 (千円)	資本準備金 残高 (千円)
2017年10月1日 (注)	9,450,000	1,050,000		1,004,500		

(注) 株式併合(10:1)によるものであります。

(5) 【所有者別状況】

2019年3月31日現在

区分	株式の状況(1単元の株式数100株)							単元未満株式の状況(株)	
	政府及び地方公共団体	金融機関	金融商品取引業者	その他の法人	外国法人等		個人その他		計
					個人以外	個人			
株主数(人)		1	6	32	1	1	1,928	1,969	
所有株式数(単元)		380	8	2,422	1	1	7,632	10,444	5,600
所有株式数の割合(%)		3.64	0.08	23.19	0.01	0.01	73.07	100.00	

(注) 自己株式3,546株は、「個人その他」に35単元、「単元未満株式の状況」に46株含まれています。

(6) 【大株主の状況】

2019年3月31日現在

氏名又は名称	住所	所有株式数(株)	発行済株式(自己株式を除く。)の総数に対する所有株式数の割合(%)
河野義勝	東京都渋谷区	345,968	33.06
株式会社リサ・パートナーズ	東京都港区港南2丁目15-3	100,562	9.60
有限会社河野商事	東京都新宿区新宿3丁目36-6	100,000	9.55
河野優子	東京都渋谷区	82,463	7.88
株式会社みずほ銀行(常任代理人 資産管理サービス信託銀行株式会社)	東京都千代田区大手町1丁目5-5(東京都中央区晴海1丁目8-12 晴海アイランドトリトンスクエアオフィスタワーZ棟)	38,000	3.63
株式会社小泉	東京都杉並区荻窪4丁目32-5	30,300	2.89
長谷川際一	埼玉県さいたま市見沼区	10,200	0.97
河野勝樹	東京都渋谷区	5,491	0.52
穂本龍志	東京都杉並区	4,240	0.40
清水紀子	東京都杉並区	2,200	0.21
計		719,424	68.74

(7) 【議決権の状況】

【発行済株式】

2019年3月31日現在

区分	株式数(株)	議決権の数(個)	内容
無議決権株式			
議決権制限株式(自己株式等)			
議決権制限株式(その他)			
完全議決権株式(自己株式等)	(自己保有株式) 普通株式 3,500		
完全議決権株式(その他)	普通株式 1,040,900	10,409	
単元未満株式	普通株式 5,600		
発行済株式総数	1,050,000		
総株主の議決権		10,409	

(注) 「単元未満株式」欄の普通株式には、当社所有の自己株式46株が含まれております。

【自己株式等】

2019年3月31日現在

所有者の氏名 又は名称	所有者の住所	自己名義 所有株式数 (株)	他人名義 所有株式数 (株)	所有株式数 の合計 (株)	発行済株式 総数に対する 所有株式数 の割合(%)
(自己保有株式) 武蔵野興業株式会社	東京都新宿区新宿 3-36-6	3,500		3,500	0.33
計		3,500		3,500	0.33

2 【自己株式の取得等の状況】

【株式の種類等】 会社法第155条第7号による普通株式の取得

(1) 【株主総会決議による取得の状況】

該当事項はありません。

(2) 【取締役会決議による取得の状況】

該当事項はありません。

(3) 【株主総会決議又は取締役会決議に基づかないものの内容】

区分	株式数(株)	価額の総額(千円)
当事業年度における取得自己株式	38	97
当期間における取得自己株式		

(注) 当期間における取得自己株式には、2019年6月1日から有価証券報告書提出日までの単元未満株式の買取りによる株式数は含めておりません。

(4) 【取得自己株式の処理状況及び保有状況】

区分	当事業年度		当期間	
	株式数(株)	処分価額の総額(千円)	株式数(株)	処分価額の総額(千円)
引き受ける者の募集を行った取得自己株式				
消却の処分を行った取得自己株式				
合併、株式交換、会社分割に係る移転を行った取得自己株式				
その他				
保有自己株式数	3,546		3,546	

(注) 当期間における保有自己株式数には、2019年6月1日から有価証券報告書提出日までの単元未満株式の買取りによる株式数は含めておりません。

3 【配当政策】

当社は、株主の皆様への利益還元を課題とする一方、経営体質の強化と将来の事業展開に向けた一定の内部留保も重要であるものと考えております。

当連結会計年度におきましては、映画事業においては映画興行収入の減少や映画の自社買付配給に係る諸費用の計上もあり、セグメント損失となりました。不動産事業と自動車教習事業は比較的堅調な営業成績を計上できたものの、不動産事業は所有テナントビルの老朽化による維持管理費・更新工事等による費用の増加が今後も見込まれ、また自動車教習事業は少子化や若年層人口の運転免許離れの影響もあり、将来の経営環境は厳しいことが予想されます。一方で、当連結会計年度は不動産投資に係る一時的な収入の計上もあり、連結損益計算書における親会社株主に帰属する当期純利益は1億2千2百万円となり、利益剰余金は増加いたしました。復配の原資となる営業利益の積み上げによる安定的な内部留保の充実までには、既存事業のさらなる収益力の強化が不可欠であり、いましばらくの時間が必要であると考えております。

今後の方針といたしましては、経営の基盤である不動産賃貸事業における収益の堅持はもとより、映画事業では新たに取り組み始めた映画の自社買付配給事業で成果を上げることで映画興行事業との相乗効果をあげることのひとつの目標とし、全社一丸となって各事業部門の強化と復配を目指してまいります。将来にわたって安定した配当を行うためには、確かな中期事業計画における利益計上の確実性が重要となります。現状におきましては、主要テナントビルの老朽化に係る設備更新計画の精査や、さらには映画の自社買付配給等の新たなビジネス・コンテンツに係る事業計画等、将来の業績に影響を及ぼす不確実な要素の検討に時間を要しており、中期事業計画についても練り直しを重ねているため、将来の確実な内部留保の見通しを見極める段階に至っておらず、中期事業計画は公表を差し控えている状況であります。従いまして、復配の時期についてもその見極めが前提として必要となることから、当期の配当・次期の配当予想につきましては、無配とさせていただきたく存じます。

引き続き今後も、将来の安定的な利益配分に向けて経営の全力を傾注してまいります。

なお、毎事業年度における配当の回数につきましては、中間及び期末の年2回を基本的な方針としており、中間配当の決定機関は取締役会、期末配当の決定機関は株主総会であります。

また、当社は会社法第454条第5項に規定する中間配当をすることができる旨を定款に定めております。

4 【コーポレート・ガバナンスの状況等】

(1) 【コーポレート・ガバナンスの概要】

有価証券報告書提出日現在、当社のコーポレート・ガバナンスの状況については、下記の通りであります。

コーポレート・ガバナンスに関する基本的な考え方

企業としての社会的信頼に応え、企業倫理・法令順守の基本姿勢を明確にするため、以下に掲げた基本姿勢に十分留意した内部統制システムの整備・構築を行い、順法経営を徹底します。

1. 法令および定款に適合した取締役・全職員の職務執行の徹底
2. ステークホルダーの権利に配慮した経営方針等の整備
3. リスク管理に対する取締役・全職員の意識向上と社内体制の整備
4. 取締役等の選任、報酬、監査報酬等の決定に対する公正性・妥当性の確立
5. 当社企業グループ各社における企業倫理・法令遵守姿勢の確立と相互連携および監視
6. 監査役・会計監査人の独立性および潤滑な職務執行に係る体制の確立

企業統治の体制の概要及び当該体制を採用する理由

(ガバナンス体制の選択の理由)

当社は監査役設置会社であります。当社は監査役を設置し、当社出身の財務・会計に関し相当程度の知見を有する常勤監査役と経営・法律的知見を有する社外監査役が、内部統制担当役員、内部監査部門である監査室等および独立した立場から当社業務を監督する社外取締役と連携する監査体制が、会社の意思決定の適正性を保全し、経営規模に見合った企業統治を行うに十分な体制であると判断し、監査役設置会社形態を採用しております。

(現状の体制の概要)

・取締役会

取締役会は、代表取締役社長 河野義勝が議長を務めており、常務取締役 河野優子、取締役 仲村正憲、取締役 長坂紘司（社外取締役）、取締役 三村篤（社外取締役）、取締役 マッシュー アイアトン（社外取締役）の6名（有価証券報告書提出日現在）で構成しております。

取締役会は2019年3月期は5回開催しており、法令で定められた事項や会社の意思決定に関する重要な事項について、適法性・合理性に鑑みながら慎重な討議を行っております。社外取締役は、企業経営者および経営コンサルタントとして、また、映像制作、配給およびコンサルティング等の業務に豊富な知見を持つ方であり、客観的な立場から当社の業務執行の監督、また経営に関する助言や指導等の役割を果たしております。取締役候補者の選定や報酬の内容の決定については、取締役会の決議により決定しております。

・監査役会

監査役会は、常勤監査役 谷口均、監査役 宇野昭秀（社外監査役）、監査役 出口洋一（社外監査役）の3名（有価証券報告書提出日現在）で構成しております。

監査役会は2019年3月期は5回開催しており、各監査役は各自の監査意見および監査室からの報告内容を吟味し、また会計監査人とも連携を取り見解の調整を行うほかに、取締役会や社内の重要な会議に出席して、社内の意思決定方法や議題の内容・議事の進行についても、適宜、監査役の立場からの意見提議を行っております。なお、当社は、法令に定める監査役の員数を欠くことになる場合に備え、補欠監査役1名を選任しております。

監査役の機能強化に係る取組状況といたしましては、監査役会は常勤監査役1名、社外監査役2名の合計3名で構成されており、各監査役それぞれが異なった分野で専門的な知識・見識を有している者を選任することでその役割の機能強化を図っております。常勤監査役 谷口均は当社の経理部長および常務取締役経理部担当の経験があり、財務・会計に関し相当程度の知見を有しております。社外監査役2名は公認会計士・税理士と司法書士であり、それぞれが独立した立場で企業会計や法律に携わっている専門家であるため、会社の経営に対し、客観的かつ公正な立場での経営監視、また、的確な助言・提言をしていただけるものと判断し、社外監査役に選任しております。なお、社外監査役 宇野昭秀氏は、公認会計士、税理士、経営コンサルタントとしての幅広い実績と専門的な知識・経験を有し、財務および会計に関する相当程度の知見を有しております。

監査役監査の状況につきましては、「(3) 監査の状況 監査役監査の状況」についても併せてご参照ください。

・執行役員制度

業務執行体制強化のために執行役員制度を導入しております。本制度導入の目的は、業務に精通した人材を執行役員に登用し、特定の業務執行を委ねることにより、経営環境の変化に対するより機動的かつ効率的な業務執行を目指すものであります。有価証券報告書提出日現在、執行役員の数 は 2 名であり、それぞれ、経理部および興行部を担当しております。なお執行役員は、取締役会からの要請があれば取締役会に出席し、業務執行状況等の報告を行うことがあります。

・監査室

監査室は、常勤監査役 谷口均が統括し、監査役会と連携して監査役監査業務の補助を行う部門として、監査室直属の従業員 1 名、また必要に応じて各部門から適宜招集された従業員（2019年3月期は 3 名）、およびオブザーバーとして業務監視にあたる財務・会計に関し相当程度の知見を有する常勤顧問により、内部監査の強化を目的として活動しております。監査室では「監査プロジェクト」を組織し、メンバーが自ら所属する部門を除いたかたちで連結子会社を含めた各部門の内部監査を少なくとも年1回以上実施し、秩序ある社内体制の維持と従業員のコンプライアンス意識の向上を目標に活動しております。その監査結果は報告書としてまとめられ監査役会に報告され、必要に応じて取締役会に提出されます。

・内部統制プロジェクト

金融商品取引法の求める内部統制報告制度に準拠した内部統制評価体制の構築およびその継続的維持と、内部統制の構築・評価を通じた業務効率の改善を目的として、「内部統制プロジェクト」を立ち上げ、代表取締役社長 河野義勝直轄の独立した組織として位置づけております。具体的には、内部統制担当取締役 河野優子を責任者とし、会社組織が小規模であることを考慮し、主として総務部、経理部の従業員が「内部統制プロジェクト」のメンバーとなり、各事業部門、各管理部門の内部統制評価体制の構築のほかに内部統制運用状況の評価を相互に行っております。「内部統制プロジェクト」は、必要に応じて監査室や監査役会、また内部監査部門と連携を取り、内部統制評価に関する意見交換を行っております。なお、「内部統制プロジェクト」内に、重要な経営リスクの管理等を目的とした「リスク管理・コンプライアンス推進室」を設けております。「リスク管理・コンプライアンス推進室」は内部統制担当取締役の管轄のもと、内部統制プロジェクトのメンバーに加え、必要に応じて各部門長、常勤顧問、常勤監査役が参加し、概ね月 1 回程度、内在する事業リスクやコンプライアンスの運用状況につき、討議を行っております。

・会計監査人

会計監査人につきましては、2019年3月期は八重洲監査法人と監査契約をしております。なお、「(3) 監査の状況 会計監査の状況」についても併せてご参照ください。

・責任限定契約の概要

1. 社外取締役との責任限定契約の締結について

当社は、会社法第427条第 1 項に基づき、社外取締役との間において、会社法第423条第 1 項の賠償責任を限定する契約を締結しております。当該契約に基づく損害賠償責任限度額は、法令が定める額としております。なお、当該責任限定が認められるのは、当該社外取締役が責任の原因となった職務の遂行について善意でかつ重大な過失がないときに限られます。

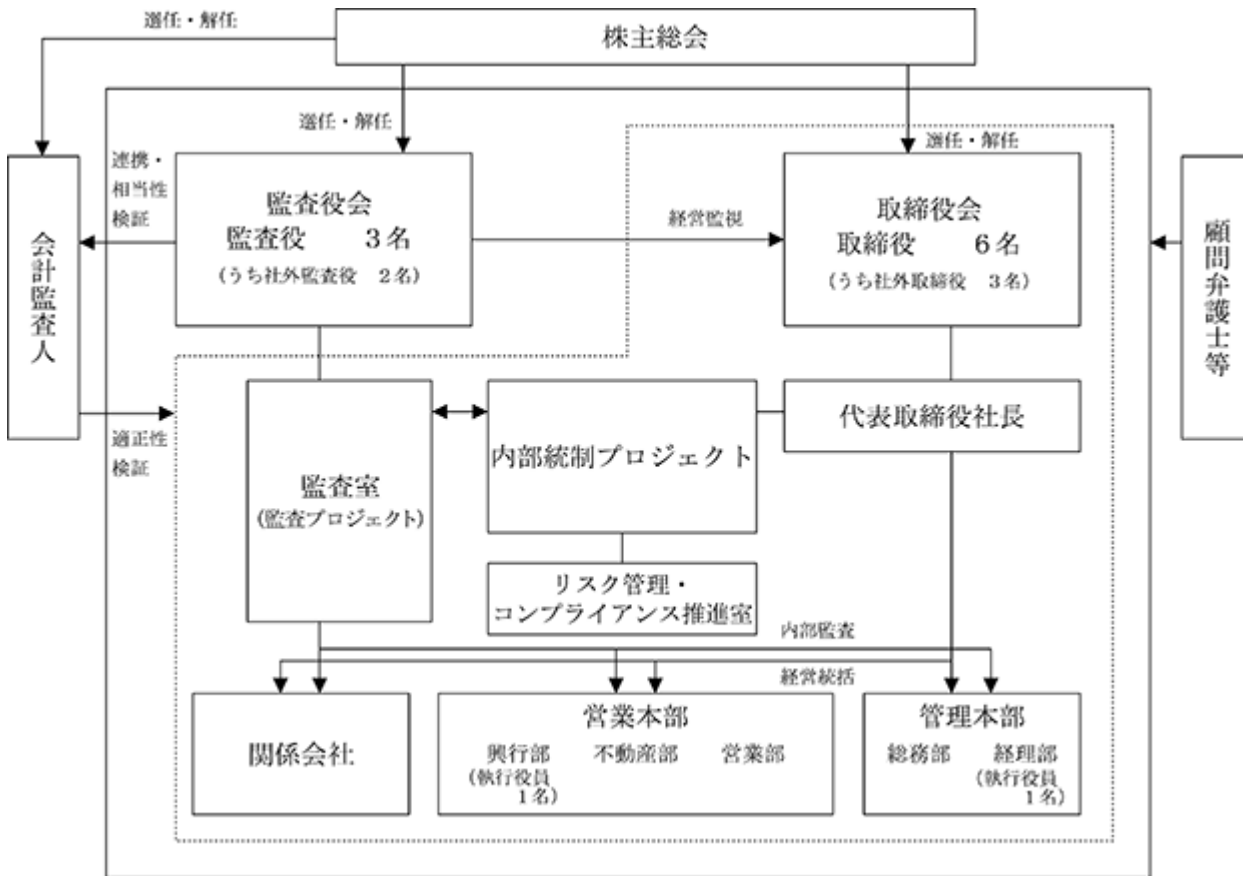
2. 社外監査役との責任限定契約の締結について

当社は、会社法第427条第 1 項に基づき、社外監査役との間において、会社法第423条第 1 項の賠償責任を限定する契約を締結しております。当該契約に基づく損害賠償責任限度額は、法令が定める額としております。なお、当該責任限定が認められるのは、当該社外監査役が責任の原因となった職務の遂行について善意でかつ重大な過失がないときに限られます。

3. 会計監査人との責任限定契約の締結について

当社は、会社法第427条第 1 項に基づき、会計監査人との間において、会社法第423条第 1 項の賠償責任を限定する契約を締結しております。当該契約に基づく損害賠償責任限度額は、法令が定める額としております。なお、当該責任限定が認められるのは、当該会計監査人が責任の原因となった職務の遂行について善意でかつ重大な過失がないときに限られます。

(企業統治図)



企業統治に関するその他の事項

当社は、以下の通り、「内部統制システム構築の基本方針」を定め、内部統制システム、リスク管理体制、提出会社の子会社の業務の適正を確保するための体制につき整備しております。

業務の適正を確保するための体制

- (A) 当社および子会社の取締役・使用人の職務執行が法令および定款に適合することを確保するための体制
 - a. 企業としての社会的信頼に応え、企業倫理・法令遵守の基本姿勢を明確にするため、全取締役・使用人を対象とした行動指針としてコンプライアンス指針を定め、周知徹底する。子会社においても、その取締役・使用人を対象としたコンプライアンス指針を定め、同様に周知徹底する。
 - b. コンプライアンス担当役員を置き、内部統制を推進する組織を設置するとともに、リスク管理体制とコンプライアンス体制を構築し運用を行う。子会社においても、その規模や業態等に応じて、適正数の監査役もしくはコンプライアンス推進担当者を配置する。
 - c. 取締役・使用人に対するコンプライアンスの研修を実施するとともに、コンプライアンスの強化および企業倫理の浸透を図る。
 - d. 法令・諸規則および規定に反する行為等を早期に発見し是正することを目的とする社内報告体制として社外の弁護士、社内担当者等を直接の情報受領者とする内部通報システムを構築し、当社グループ（当社ならびにその子会社からなる企業集団を指し、以下同じ）の役職員が直接通報できる体制のもと、その運用を行う。
 - e. 金融商品取引法および関係諸法令との適合性を確保するため、「財務報告に係る内部統制の基本方針」を制定し、財務報告の信頼性と適正性を得るための社内体制を整備する。
- (B) 取締役の職務の執行に係る情報の保存および管理に関する体制
取締役の職務の執行に係る情報については、文書管理規程等の社内規程を整備し、適切に保存および管理を行う。
- (C) 当社および子会社の損失の危機の管理に関する規程その他の体制
 - a. 内部統制を推進する組織のもとに、リスク管理を統括する部門を置き、リスク管理体制を構築し、その運用を行う。
 - b. 各事業部門は、それぞれの部門に関するリスク管理を行い、リスク管理を統括する部門へ定期的にはリスク管理の状況を報告し、連携を図る。
 - c. 取締役および使用人に対するリスク管理の研修を実施するとともに、リスク管理の強化を図る。
- (D) 取締役の職務執行が効率的に行われることを確保するための体制
 - a. 取締役の職務の執行が効率的に行われることを確保するための体制の基本として定例取締役会および臨時取締役会の開催を位置づけ、重要事項に関して迅速的確な意思決定を行う。
 - b. 取締役会の決定に基づく業務執行については、業務分掌規程等において、それぞれの責任者およびその責任と執行手続の詳細について定める。

- (E) 当社グループにおける業務の適正を確保するための体制
- a. 当社グループ各社における業務の適正を確保するため、共通のコンプライアンス指針を定め、グループ全体のコンプライアンス体制を構築する。また、内部通報システムについては、その通報窓口を子会社にも開放し、これを周知することにより、当社グループ各社におけるコンプライアンスの実効性を確保する。
 - b. 子会社等の関係会社を管理する担当部署を置き、子会社の状況に応じて必要な管理を行う。当社におけるリスクを管理する部門は、当社グループ全体のリスクの評価および管理の体制を適切に構築・運用し、グループ全体の業務の適正化を図る。
 - c. 子会社等の関係会社を管理する担当部署を通じて、各子会社に対し、業務執行状況・営業成績・財務状況等を定期的に当社に報告させるような体制を構築する。加えて、経営上重要な業務執行事項に関しては、当社の事前の承認または当社への報告を求めるとともに、当社において子会社の事業計画等と照らし合わせ、業務の適正性を確認する。
 - d. 各子会社について、当社内の対応部署を定め、当該部署が子会社の重要な業務執行事項について協議、情報交換等を行うことで、当社グループ全体における経営の健全性、効率性等の向上を図る。
- (F) 監査役がその職務を補助すべき使用人を置くことを求めた場合における当該使用人に関する体制、当該使用人の取締役からの独立性に関する事項、および当該使用人に対する指示の実効性の確保に関する事項
- a. 監査役会が監査役の業務を補助すべき使用人の設置を求めた場合、取締役は速やかに監査スタッフを設置する。
 - b. 監査役より監査業務に必要な命令を受けた使用人は、その命令に従うとともに、当該命令に関して、取締役等の指揮命令を受けないものとする。監査スタッフの任命・解任・人事異動については、監査役会の事前の同意を得るものとし、当該スタッフの人事考課は監査役が行うものとする。
- (G) 当社グループの取締役および使用人等が監査役に報告するための体制、その他の監査役への報告に関する体制、報告をしたことを理由として不利な取り扱いを受けないことを確保するための体制
- a. 当社グループの取締役および使用人等は、会社に著しい損害を及ぼす事実が発生し、または発生する恐れがあるとき、違法または不正な行為を発見したとき、その他監査役会が報告すべきものと定めた事項が生じたときは、監査役会に報告する。
また、監査役はいつでも必要に応じて、当社企業グループの取締役および使用人等に対して報告を求められることができる。
 - b. 監査役は、取締役会のほか、重要な意思決定の過程および業務の執行状況を把握するため、重要な会議等に出席し、必要に応じて取締役会および使用人等にその説明を求めるとする。また、代表取締役と適宜意見交換を行い、意思の疎通を図る。
 - c. 当社は、監査役への報告を行った当社グループの役員および従業員に対し、当社公益通報保護規程に準拠し、当該報告をしたことを理由として不利な取り扱いを行うことを禁止し、その旨を当社グループの役員、使用人等に周知徹底する。
- (H) 当社の監査役職務の執行について生じる費用の前払いまたは償還の手続その他の当該職務執行について生ずる費用または債務の処理に係る方針に関する事項
- 当社は、監査役がその職務の執行について、当社に対し、費用の前払い等の請求をしたときは、担当部署において審議の上、当該請求に係る費用または債務が当該監査役職務の執行に必要でないとされた場合を除き、速やかに当該費用または債務を処理する。

(I) その他当社の監査役の監査が実効的に行われることを確保するための体制

- a . 当社は監査役の半数以上を社外監査役とし、その選任にあたっては、各監査役が適切に同意権を行使し、その独立性につき慎重に検討する。
- b . 当社の常勤監査役は、当社グループの各事業の予算会議・月次報告会議等に出席し、当該会議にて収集した情報について他の社外監査役と共有を図る。
- c . 当社の監査役は、監査の実施にあたり、必要に応じて公認会計士および弁護士等の外部専門家との連携を図る。
- d . 監査役は、監査の充実のために、独自に各取締役および必要な従業員に対して個別のヒアリングを実施することができる。また、監査役は、代表取締役ないし会計監査人との間で、定期的に情報・意見等の交換を行う。

(J) 反社会的勢力を排除するための体制

- a . 当社は、「武蔵野興業グループコンプライアンス行動指針」において反社会的勢力および団体との不適切な一切の関係を排除し関係法規の趣旨に反する行為は行わない旨を明記し、全従業員にその周知徹底を図る。
- b . 当社は、反社会的勢力との助長取引を排除し、経営活動への関与および被害を防止する体制を整備する。
- c . 当社は、総務部を統括部署として不当要求防止責任者を設置し、社内研修を行うとともに、公益社団法人警視庁管内特殊暴力防止対策連合会に加盟し、反社会的勢力の動向に係る情報を収集するとともに、弁護士、警察等と連携して適切に組織的な対応を図る。

業務の適正を確保するための体制の運用状況の概要

- (A) 当社および子会社の取締役・使用人の職務執行が法令および定款に適合することを確保するための体制の運用状況
- a. 「武蔵野興業グループコンプライアンス行動指針」を制定すると共に、各部門に内部統制担当職員を配置し、コンプライアンス指針の周知徹底を図っております。また、毎週開催の定例ミーティングと月次報告会議において、子会社を含めた各部門の責任者からの報告等で法令・諸規則および規定に反する行為等を早期に発見することに努め、経営全般におけるリスク管理およびコンプライアンス管理を行っております。
 - b. コンプライアンス担当役員である常務取締役を中心に役職員に対し、コンプライアンス研修を行っております。
 - c. 「財務報告に係る内部統制の基本方針」を制定し、監査法人による監査にあたっては、同方針を踏襲することで、財務報告の信頼性向上・金融商品取引法等との適合性を確保しております。
- (B) 取締役の職務の執行に係る情報の保存および管理に関する体制の運用状況
- 取締役の職務の執行に係る情報（取締役会をはじめとする重要な会議の議事録・資料や稟議書等）は、その作成時点から情報の管理を関係役員に限定し、適切に保管しております。
- (C) 当社および子会社の損失の危機の管理に関する規程その他の体制の運用状況
- 経理部を中心とした内部統制プロジェクト担当者が、事業所および子会社の内部監査を行い、リスク管理の状況を取締役と監査役に報告しております。また、役職員に対し、コンプライアンス研修やミーティングを定期的に行っております。
- (D) 取締役の職務執行が効率的に行われることを確保するための体制の運用状況
- 当事業年度において取締役会を5回開催し、重要事項を慎重に討議の上、迅速・的確に意思決定を図っております。また、必要に応じて取締役、監査役が集まり意見交換を行っております。
- (E) 当社グループにおける業務の適正を確保するための体制の運用状況
- a. 経理部を子会社管理の担当部署とし、常勤顧問を中心にグループ全体の内部統制状況を取りまとめ、各プロセスに応じたリスク評価を行っております。
 - b. 子会社の取締役財務責任者は、当社の月次報告会議に出席し業務の執行状況、営業成績等の報告を行っており、稟議等の承認については当社が行い、子会社の業務の適正性を確保しております。
 - c. 財務関係は当社経理部が、法務関係は当社総務部が対応部署として子会社と定期的に情報交換を行い、当社グループ全体における経営の健全性、効率性等の向上を図っております。
- (F) 監査役がその職務を補助すべき使用人を置くことを求めた場合における当該使用人に関する体制、当該使用人の取締役からの独立性に関する事項、および当該使用人に対する指示の実効性の確保に関する事項の運用状況
- 監査室を設置し、監査役の業務の補助を行っております。監査室所属職員は、監査役の職務を補助する際には、監査役の指揮命令にのみ従い、取締役の指揮命令を受けずに職務を行っております。
- (G) 当社グループの取締役および使用人等が監査役に報告するための体制、その他の監査役への報告に関する体制、報告したことを理由として不利な取り扱いを受けないことを確保するための体制の運用状況
- a. 当期中に当社グループの取締役および使用人等より監査役に報告および監査役より使用人等が報告を求められた違法・不正な事案はありませんでした。
 - b. 常勤監査役は取締役会をはじめとする重要な会議およびミーティングに概ね出席し、代表取締役とも適宜意見を交換しております。

(H) 当社の監査役の職務の執行について生じる費用の前払いまたは償還の手続その他の当該職務執行について生ずる費用または債務の処理に係る方針に関する事項の運用状況
経理部が監査役の職務執行時の費用請求先として、同費用請求がなされた場合に迅速処理して対応しております。

(I) その他当社の監査役の監査が実効的に行われることを確保するための体制の運用状況

- a. 監査役3名のうち2名を社外監査役としており、定期的に監査役会を行い、情報を共有し意見交換を行っております。また常勤監査役は社内で行われる予算会議・月次報告会議やミーティング等に参加し、各部門から提供された情報を社外監査役に報告しております。
- b. 監査役は会計監査人と定期的に意見交換を行うことで連携を図り、また、監査の充実を図るために必要に応じて監査室を活用し従業員との意見交換を行っております。

(J) 反社会的勢力を排除するための体制の運用状況

担当役員が公益社団法人警視庁管内特殊暴力防止対策連合会の地区会に参加し、反社会的勢力に係る情報を役員で共有を図っております。また、反社会的勢力から不当要求への対応等に関し、社内研修を行っております。

株式会社の支配に関する基本方針

当社では、会社の財務および事業の方針の決定を支配する者のあり方に関する基本方針については、特に定めておりません。

反社会的勢力排除に向けた基本的な考え方

「 業務の適正を確保するための体制 (J) 反社会的勢力を排除するための体制」に記載した通りであります。

上記に掲げた体制の整備のもと、取締役会が全社の職務執行につき経営監視を統括するとともに、監査役会・監査室は独立した立場で内部監査を実施いたします。同時に、弁護士、税理士等の顧問契約を締結している外部有識者より経営や内部統制システムについての助言・提言を受け、加えて会計監査人からの法定監査と株主総会の開催により、株主の利益重視と企業倫理順守の経営方針を再確認しております。

また、監査室を中心に、各部門ごとの業務プロセスに係る整備・運用状況の点検を行い、併せて取締役会や監査役会が主催するリスクマネジメントについての研修を適宜行ってまいります。

当社では、報告・連絡・相談といった基本的なコミュニケーションの徹底をはかり、風通しのよいシンプルな組織作りを目指すことで、結果、全社的なコンプライアンス意識の向上と内部統制システム・リスク管理体制の構築に意義のある整備ができるものと考えております。

その他

1. 取締役の定数

当社の取締役は11名以内とする旨を定款で定めております。

2. 取締役の選解任の決議要件

当社は、取締役の選任決議は、議決権を行使することができる株主の議決権の3分の1以上を有する株主が出席し、その議決権の過半数をもって行う旨及び選任決議は、累積投票によらない旨を定款で定めております。

なお、当社は取締役を解任するための具体的な評価基準や解任要件を定めておりません。取締役の解任につきましては、会社の業績等の適切な評価を踏まえ、取締役がその機能を十分発揮していないと認められる場合、また、法令・定款等の違反や、社会通念上不適切な行為等により当社の企業価値を著しく毀損し、客観的にも取締役として不適格と判断できる場合に、独立社外取締役が出席する取締役会において十分な審議を行い、その決議を行います。

3. 株主総会決議事項を取締役会で決議することができることとした事項

a. 当社は、自己株式の取得について、経営環境の変化に対応して経営の諸政策を柔軟かつ機動的に遂行することを可能とするため、会社法第165条第2項の規定に基づき、取締役会の決議によって市場取引等により自己の株式を取得することができる旨を定款で定めております。

b. 当社は、取締役及び監査役が、職務の遂行にあたって期待される役割を十分発揮することができるよう、会社法第426条第1項の規定に基づき、任務を怠ったことによる取締役（取締役であった者を含む）の損害賠償責任を、法令の限度において、取締役会の決議によって免除することができる旨を定款で定めております。

c. 当社は、株主への機動的な利益還元を可能とするため、取締役会の決議によって毎年9月30日を基準日として中間配当をすることができる旨を定款で定めております。

4. 株主総会の特別決議要件

当社は、株主総会における定足数を緩和することにより株主総会を円滑に運営することを目的として、会社法第309条第2項に定める決議は、議決権を行使することができる株主の議決権の3分の1以上を有する株主が出席し、その議決権の3分の2をもって行う旨を定款で定めております。

(2) 【役員の状況】

役員一覧

男性8名 女性1名 (役員のうち女性の比率11.1%)

役職名	氏名	生年月日	略歴		任期	所有株式数 (株)
代表取締役 社長	河野 義勝	1958年4月3日生	1986年8月 1988年6月 1990年6月 1992年6月 2004年9月 2005年6月	当社入社 当社取締役就任 当社常務取締役就任 当社専務取締役就任 当社取締役副社長就任 当社代表取締役社長就任(現)	2018年 6月から 2年	345,968
常務取締役 営業担当兼内部統制担当	河野 優子	1961年9月17日生	2009年4月 2009年6月 2009年11月 2010年5月 2011年5月	当社顧問 当社取締役就任 当社常務取締役就任(現) 当社営業担当就任(現) 当社内部統制担当就任(現)	2019年 6月から 2年	82,463
取締役 総務部長	仲村 正憲	1960年2月10日生	1983年4月 2008年3月 2011年6月	当社入社 当社総務部長(現) 当社取締役就任(現)	2019年 6月から 2年	100
取締役	長坂 紘司	1943年5月29日生	1983年3月 1992年3月 2005年6月 2016年6月	㈱小泉代表取締役副社長就任 ㈱小泉代表取締役社長就任 当社取締役就任(現) ㈱小泉代表取締役会長就任(現)	2019年 6月から 2年	1,333
取締役	三村 篤	1969年7月23日生	2010年4月 2013年6月	㈱アースウィンド・アドバイザーズ代表取締役就任(現) 当社取締役就任(現)	2019年 6月から 2年	
取締役	マッシュュー アイアトン	1986年3月21日生	2015年4月 2019年6月	アイアトン・エンタテインメント ㈱入社 プロデューサー(現) 当社取締役就任(現)	2019年 6月から 2年	
常勤監査役	谷口 均	1954年1月1日生	1977年4月 1988年5月 1989年6月 1993年6月 2009年4月 2011年6月	当社入社 当社経理部長 当社取締役就任 当社常務取締役就任 当社経理部担当就任 当社常勤監査役就任(現)	2019年 6月から 4年	400
監査役	宇野 昭秀	1971年1月24日生	1997年1月 2012年3月 2012年6月 2013年6月	公認会計士登録 税理士法人宇野会計、㈱パート ナーズUNO入社(現) 税理士登録 当社監査役就任(現)	2019年 6月から 4年	
監査役	出口 洋一	1951年9月23日生	1976年3月 1979年3月 1991年10月 1993年4月 2014年3月	田中司法書士事務所入所 株式会社エスプリ設立 代表取締 役就任 東京司法書士会入会 出口司法書士事務所開設 所長就 任(現) 当社監査役就任(現)	2016年 6月から 4年	
計						430,264

- (注) 1 常務取締役河野優子は、代表取締役社長河野義勝の配偶者であります。
 2 取締役の長坂紘司、三村 篤、マッシュュー アイアトンは、社外取締役であります。
 3 監査役の宇野昭秀、出口洋一は、社外監査役であります。

社外取締役及び社外監査役

(ア) 員数並びに提出会社との人的関係、資本的關係又は取引關係その他の利害關係

当社の社外取締役は3名、社外監査役は2名であります。

・社外取締役 長坂紘司氏は、株式会社小泉の代表取締役会長であります。同氏および同社は当社の株主でもあります。議決権所有割合は合算しても10%未満であり、同氏の社外役員としての独立性を阻害するものではありません。人的關係、取引關係、その他の利害關係につきましても該当事項はありません。当社は同氏を株式会社東京証券取引所の定めに基づく独立役員に指定し、同取引所に届け出ております。

・社外取締役 三村 篤氏は、株式会社アースウィンド・アドバイザーズの代表取締役であります。同社との間には人的關係、資本的關係、取引關係、その他の利害關係につきましても該当事項はありません。当社は同氏を株式会社東京証券取引所の定めに基づく独立役員に指定し、同取引所に届け出ております。

・社外取締役 マッシュー アイアトン氏は、アイアトン・エンタテインメント株式会社のプロデューサーであります。同社との間には人的關係、資本的關係、取引關係、その他の利害關係につきましても該当事項はありません。当社は同氏を株式会社東京証券取引所の定めに基づく独立役員に指定し、同取引所に届け出ております。

・社外監査役 宇野昭秀氏は、公認会計士、税理士であり、税理士法人宇野会計および株式会社パートナーズUNOの従業員であります。両社との間には人的關係、資本的關係、取引關係はなく、その他の利害關係につきましても、該当事項はありません。また、同氏はオータックス株式会社の社外監査役を兼務しておりますが、同社と当社との間には人的關係、資本的關係、取引關係はなく、その他の利害關係につきましても該当事項はありません。当社は同氏を株式会社東京証券取引所の定めに基づく独立役員に指定し、同取引所に届け出ております。

・社外監査役 出口洋一氏は司法書士であり、出口司法書士事務所において業務執行の権限を有する者であります。当社は同事務所との間に登記申請等の業務に係る取引關係がありますが、取引の規模に照らして、株主、投資家の判断に影響を及ぼすおそれはないと判断しております。なお、重要な兼職先はなく、当社との人的關係、資本的關係、その他の利害關係につきましても該当事項はありません。当社は同氏を株式会社東京証券取引所の定めに基づく独立役員に指定し、同取引所に届け出ております。

(イ) 社外取締役または社外監査役が提出会社の企業統治において果たす機能および役割

一般株主と利益相反することなく、客觀的・中立的な立場で、取締役会の監督機能強化、経営に対する監視、業務執行の適正さの保持、また、公正な助言提言等をその役割とし、当社の企業価値向上に寄与すべく経営の監督・監視を果たしております。それらの役割が機能することで、当社の法令遵守姿勢や財務報告の適正性にさらなる信頼性を担保してくれるものと考えております。

当社の社外取締役は3名であり、それぞれが豊富なビジネス経験と幅広い見識を持ち、相互が対等な立場で意見交換および経営陣や監査役会と連携を取っております。社外取締役3名は客觀的な立場に基づく情報交換・認識共有をはかっており、ともに主要な役割を担いながら、当社の取締役会等の席上で議案審議に必要な発言を適宜行い、また、経営に関する有用な意見を提示できるよう、意見交換を行っております。

当社の社外監査役は2名であり、それぞれが企業会計・税務・法務の専門的な知識・経験を以て、客觀的な立場で適切な経営監視を行うため、情報交換・認識共有をはかっており、常勤監査役とも意見交換を行っております。また、取締役会においては適宜、疑問点等の質問や意見を述べ、監査役会においては監査結果についての意見交換、監査に関する重要事項の協議等を行っております。

(ウ) 社外取締役または社外監査役を選任するための独立性に関する基準又は方針の内容及び選任状況に対する提出会社の考え方

当社は、社外取締役または社外監査役を選任するための当社からの独立性に関する基準（社外役員独立性基準）を定めております。本基準は、当社のガバナンス体制において、客観的な経営の監督と透明性を確保するために、業務の執行には携わらず、業務の執行と一定の距離を置く独立性を有し、一般株主と利益相反が生じることがないことを基本条件に、東京証券取引所の独立役員の独立性に関する判断基準の内容を十分考慮したうえ、制定を行っております。本基準に定められた独立性を妨げる要因となる項目に該当しないことを必須条件とし、当社経営の責務を負うに相応しい人格、また、客観的・中立的な立場から経営監督・監視を行うための経験・見識等を総合的に勘案し、株主からの経営委任に対しその職務を全うできる人材を審議・検討し社外取締役または社外監査役を選任しております。

・社外取締役 長坂紘司氏は、企業経営者としての豊富な経験により培われた経営全般に対する優れた見識を以て、一般株主の利益に相反しない立場で当社の経営の監督を行えることから、当社の社外取締役として適任であります。また、一般株主と利益相反することのない独立性を有する当社の独立役員として適任であります。

・社外取締役 三村 篤氏は、経営コンサルタントとしての豊富なビジネス経験と幅広い見識があり、一般株主の利益に相反しない立場で当社の経営の監督を行えることから、当社の社外取締役として適任であります。また、東京証券取引所が定める独立性の基準および開示加重要件への該当事項もなく、一般株主と利益相反することのない独立性を有する当社の独立役員として適任であります。

・社外取締役 マッシュー アイアトン氏は、映像制作、配給およびコンサルティング等の業務に幅広く携わっており、同氏のエンタテインメント関連事業に関する識見をもとに、当社の経営全般に助言を頂戴することにより、当社の経営体制がさらに強化できるものと判断しており、一般株主の利益に相反しない立場で当社の経営の監督を行えることから、当社の社外取締役として適任であります。また、一般株主と利益相反することのない独立性を有する当社の独立役員として適任であります。

・社外監査役 宇野昭秀氏は、公認会計士、税理士、経営コンサルタントとしての幅広い実績と専門的な知識・経験等を以て、当社の経営に関して適切な監視を行えることから、当社の社外監査役として適任であります。また、東京証券取引所が定める独立性の基準および開示加重要件への該当事項もなく、一般株主と利益相反することのない独立性を有する当社の独立役員として適任であります。

・社外監査役 出口洋一氏は、司法書士としての専門分野である民事法、商事法、関連税法の専門的な知識・経験等を以て、当社の経営に関して適切な監視を行えることから、当社の社外監査役として適任であります。また、東京証券取引所が定める独立性の基準および開示加重要件への該当事項もなく、一般株主と利益相反することのない独立性を有する当社の独立役員として適任であります。

(エ) 社外取締役又は社外監査役による監督又は監査と内部監査、監査役監査及び会計監査との相互連携並びに内部統制部門との関係

社外取締役は、独立した立場で取締役会等に出席し、会社の意思決定方法や議題の内容、議事の進行等が公正妥当なものであるか、また一般株主の利益に相反しないものであるかどうか判断し、取締役会の監督機能の強化や経営監視を行うとともに、公正な助言提言を行っております。また、必要に応じて、内部監査部門や監査役会、会計監査人、内部統制部門と連携し、取締役会で決定された会社の公正妥当な経営方針等が実務に反映され、業務執行の適正さの保持がなされているか確認しております。

社外監査役は、独立した立場で取締役会等に出席し、会社の意思決定方法や議題の内容、議事の進行等が公正妥当なものであるか、また一般株主の利益に相反しないものであるかどうか監視するとともに、常勤監査役や内部監査部門、会計監査人、内部統制部門と連携し、会社の運営が客観的に公正妥当な経営判断のもと行われているか、監視をしております。

なお、「(3)監査の状況」の各項目につきましても、関連項目として併せてご参照ください。

(3) 【監査の状況】

監査役監査の状況

・監査役監査の組織、人員及び手続

監査役会は常勤監査役1名、社外監査役2名の計3名で構成され、取締役の業務遂行について監査しております。監査役は定例の監査役会で、各自の監査意見および監査室からの報告内容等を吟味し見解の調整を行うほか、取締役会や社内の重要な会議に出席して、社内の意思決定方法や議題の内容・議事の進行についても監査し、適宜、監査役としての意見の提議を行っております。

常勤監査役 谷口均氏は、当社内の経理部門での経験（経理担当役員及び経理部長職）を有し、財務および会計に関する相当程度の知見を有するものであります。社外監査役 宇野昭秀氏は、公認会計士、税理士、経営コンサルタントとしての幅広い実績と専門的な知識・経験を有し、財務および会計に関する相当程度の知見を有するものであります。

内部監査の状況

・内部監査の組織、人員及び手続

・内部監査、監査役監査及び会計監査の相互連携並びにこれらの監査と内部統制部門との関係

監査室は監査役会と連携した組織として、主として内部監査業務を執り行い、社内のコンプライアンスに対する意識向上を目的として組織されました。監査にあたっては、監査室直属の組織である「監査プロジェクト」が業務を担当しています。「監査プロジェクト」は、監査室直属の従業員1名と各部門より適宜指名された従業員（2019年3月期は3名）が自ら所属する部門を除いたかたちで、必要に応じて内部統制プロジェクトと内部統制評価に関する意見交換を行った上、連結子会社を含めた各部門の内部監査を少なくとも年1回以上実施しております。監査結果は報告書としてまとめられ、その後、監査室内で報告書をもとに状況の確認がなされ、必要に応じて再監査を行うなど十分な状況把握をした後、監査役会、取締役会に報告されます。なお、監査室所属職員は、監査役の職務を補助する際には、監査役の指揮命令にのみ従い、取締役の指揮命令を受けずに職務を行っております。

内部監査部門（監査室）は監査結果を監査役会に報告するとともに、監査役会から監査方法について適宜アドバイスを受け、内部監査の品質向上をはかっております。監査役は内部監査部門の監査報告を十分検討し、状況によっては内部監査に同行して状況把握に努めるとともに、内部統制プロジェクトと連携して問題点の指摘とその解決策について助言を行っております。

また、監査役は、当社の会計監査人である八重洲監査法人と定期的な情報・意見交換を行い、その監査意見の適正性について監査結果の報告を受けるなどの方法で確認を取りながら、自らの監査を踏まえて会計監査人の監査報告が相当であるかどうか判断しています。会計監査人は必要に応じて、内部監査部門が作成した監査結果報告書の閲覧を行っております。

会計監査の状況

a. 監査法人の名称

八重洲監査法人

b. 業務を執行した公認会計士

武田勇藏氏

滝澤直樹氏

c. 監査業務に係る補助者の構成

当社の会計監査業務に係る補助者は、公認会計士5名、その他1名であります。

d. 監査法人の選定方針と理由

当社が監査法人を選定するに当たり、以下の点を考慮しております。

- ・ 会計監査人が会社法第340条第1項各号のいずれにも該当しないこと。
- ・ 会計監査人に必要とされる独立性、専門性及び品質管理体制等を総合的に勘案し、問題がないこと。

八重洲監査法人を会計監査人とした理由は、上記の点を考慮した上、当該監査法人が1969年に設立以来、その公正性とクライアントの規模や実績にかなった合理的な監査が評価されていることなどから、効率的かつ効果的な監査業務の運営が期待できるため、適任であると判断したためであります。

会計監査人の解任または不再任の決定の方針につきましては、監査役会は、会計監査人が会社法・公認会計士法等の法令に違反・抵触した場合および公序良俗に反する行為があったと判断した場合、その事実に基づき当該会計監査人の解任または不再任の検討を行い、解任または不再任が妥当と判断した場合は、「会計監査人の解任」または「会計監査人の不再任」に関する議案を決定し、取締役会は、当該決定に基づき、当該議案を株主総会に提出いたします。

また、監査役会は、会計監査人が会社法第340条第1項各号に定める項目に該当すると認められる場合は、監査役全員の同意に基づき監査役会が会計監査人を解任いたします。この場合、監査役会が選定した監査役は、解任後最初に招集される株主総会において、会計監査人を解任した旨と解任理由を報告いたします。

e. 監査役及び監査役会による監査法人の評価

監査役および監査役会による、外部会計監査人候補を適切に選定し外部会計監査人を適切に評価するための基準は策定しておりませんが、監査役会は選定する外部会計監査人と個別に面談・意見交換を行い、当社以外の監査実績も勘案し、また、監査計画や監査体制、実務的な監査の進め方を確認し、高品質な監査を行うための独立性と専門性を有しているか判断し、選定・評価を行っており、その結果、八重洲監査法人の監査の方法は相当であると評価しております。

監査報酬の内容等

「企業内容等の開示に関する内閣府令の一部を改正する内閣府令」(2019年1月31日 内閣府令第3号)による改正後の「企業内容等の開示に関する内閣府令」第二号様式記載上の注意(56)d(f)iからの規定に経過措置を適用しております。

a. 監査公認会計士等に対する報酬の内容

区分	前連結会計年度		当連結会計年度	
	監査証明業務に基づく報酬(千円)	非監査業務に基づく報酬(千円)	監査証明業務に基づく報酬(千円)	非監査業務に基づく報酬(千円)
提出会社	12,500		12,500	
連結子会社				
計	12,500		12,500	

b. その他重要な報酬の内容
該当事項はありません。

c. 監査報酬の決定方針

監査報酬の決定方針については特に定めはありませんが、監査契約締結時に会計監査人と監査日数等について意見交換を行ったうえで双方合意のもと決定しております。

d. 監査役会が会計監査人の報酬等に同意した理由

監査役会は、日本監査役協会が公表する「会計監査人との連携に関する実務指針」を踏まえ、過年度の監査計画の内容ならびに会計監査人の職務遂行状況を確認し、当事業年度の監査計画および報酬額の妥当性を慎重に検討した結果、会計監査人の報酬等について、会社法第399条第1項の同意を行っております。

(4) 【役員の報酬等】

役員の報酬等の額又はその算定方法の決定に関する方針に係る事項

当社は役員報酬等の額又はその算定方法の決定に関する方針、また、その決定に関する役職ごとの方針を定めておりませんが、株主総会の決議に基づき、取締役および監査役の報酬等の限度額を決定しております。

当社の役員報酬等の額の決定権限は取締役会が有しており、その権限の内容及び裁量の範囲は、株主総会の決議による取締役および監査役の報酬等の限度額の範囲内で、代表取締役社長および関係取締役が取締役会の付託を受け、取締役会の決議にて各取締役個別の報酬等の額を決定することとしております。個別の監査役報酬等の額は、常勤・非常勤の別、業務分担の内容等を考慮し、監査役会における協議によって決定しております。当社は有価証券報告書提出日現在、役員報酬の支給は基本報酬のみであり、業績連動報酬は導入しておりません。また、当事業年度におきまして、役員賞与、役員退職慰労引当金繰入額は計上しておりません。

役員報酬等に関する株主総会の決議に関しましては、1993年6月29日開催の第122回定時株主総会において、取締役の固定報酬の限度額は月額12,000千円以内（但し使用人分給とは含まない。定款で定める取締役の員数は11名以内とする。有価証券報告書提出日現在は6名。）、監査役の報酬限度額は月額1,500千円以内（定款で定める監査役の員数は4名以内とする。有価証券報告書提出日現在は3名。）と決議いただいております。

各取締役の報酬等の額は、上記の決議内容の範囲内で、取締役会の決議により決定しております。

なお、当社は役員報酬等の額等の決定方針の決定に関与する委員会等はありません。また、業績連動報酬につきましても、本有価証券報告書提出日現在、業績連動報酬を導入していないため、業績連動報酬と業績連動報酬以外の報酬等の支給割合の決定の方針、業績連動報酬の額の決定の方法、業績連動報酬に係る指標、指標の選択理由、業績連動報酬の額の決定方法、当事業年度の指標の目標及び実績につきましても該当事項はありません。

当事業年度の役員報酬等の額の決定過程における取締役会の活動内容につきましては、同業他社の支給水準や担当職務における貢献度等を勘案し、それぞれの役員に求められる能力・責任に見合った報酬の額を算出し、社内取締役間の協議や社外取締役の承認を経た後、2018年6月28日開催の取締役会の決議に基づき、各取締役個別の報酬等の額を決定しております。

提出会社の役員区分ごとの報酬等の総額、報酬等の種類別の総額及び対象となる役員の員数

役員区分	報酬等の総額 (千円)	報酬等の種類別の総額(千円)			対象となる 役員の員数 (名)
		固定報酬	業績連動報酬	退職慰労金	
取締役 (社外取締役を除く。)	67,635	67,635			3
監査役 (社外監査役を除く。)	10,992	10,992			1
社外役員	8,310	8,310			3

役員ごとの連結報酬等の総額等

連結報酬等の総額が1億円以上である者が存在しないため、記載しておりません。

使用人兼務役員の使用人給与

使用人兼務役員の使用人給与のうち、重要なものではありません。

(5) 【株式の保有状況】

投資株式の区分の基準及び考え方

当社は、保有目的が純投資目的である投資株式と純投資目的以外の目的である投資株式の区分について、特段の基準を設けておりませんが、株価の変動によるキャピタルゲインや配当等による利益の確保を目的とするものを純投資目的である投資株式と考えており、現時点においてはそれらの株式を保有しておらず、また、保有の予定もありません。純投資目的以外の目的である投資株式につきましては、安定的かつ良好な取引関係の維持および当社事業における消費動向や経営環境を把握するための参考等の目的に資するかどうかを保有の判断の基準としており、下記に記載の銘柄を保有しておりますが、その株式総数は僅少であり、また保有目的も適切であると判断しております。投資株式につきましては、現時点におきましては増加もしくは縮小の予定はありません。

保有目的が純投資目的以外の目的である投資株式

a．保有方針及び保有の合理性を検証する方法並びに個別銘柄の保有の適否に関する取締役会等における検証の内容

個別銘柄ごとの保有方針として、安定的かつ良好な取引関係の維持および当社事業における消費動向や経営環境を把握するための参考等の目的を保有の判断基準としており、それらの保有方針に加え、当社グループおよび投資先双方の中長期的な企業価値の向上に資するか否かを踏まえ、各担当部門において保有の合理性を検証しております。現時点において、保有の合理性が認められない株式はありませんが、今後、当社グループや投資先を取り巻く経営環境の変化等により、それらの目的にそぐわず保有の合理性が認められないと考えられる株式については、個別に社外監査役の出席する取締役会での精査を経て、削減を検討いたします。また、当該株式の議決権行使につきましても特段の基準を設けておりませんが、保有する目的を鑑み、議案の内容を個別に吟味し、当社グループおよび投資先企業双方の中長期的な企業価値の向上に資するか否かを判断し、適切に行使いたします。

b．銘柄数及び貸借対照表計上額

	銘柄数 (銘柄)	貸借対照表計上額の 合計額(千円)
非上場株式	3	104,900
非上場株式以外の株式	4	7,226

(当事業年度において株式数が増加した銘柄)

該当事項はありません。

(当事業年度において株式数が減少した銘柄)

該当事項はありません。

c. 特定投資株式及びみなし保有株式の銘柄ごとの株式数、貸借対照表計上額等に関する情報

特定投資株式

銘柄	前事業年度	当事業年度	保有目的、定量的な保有効果 及び株式数が増加した理由	当社の株式の保有の有無
	株式数(株)	株式数(株)		
	貸借対照表計上額 (千円)	貸借対照表計上額 (千円)		
(株)東急レクリエーション	2,500	500	当事業における消費動向や経営環境を把握するための参考等の目的のため保有しており、定量的な保有効果については記載が困難であります。保有の合理性は、保有目的を鑑み、当社グループおよび投資先双方の中長期的な企業価値向上に資するか否か、各担当部門にて検証しております。	無
	2,397	2,492		
松竹(株)	200	200	当事業における消費動向や経営環境を把握するための参考等の目的のため保有しており、定量的な保有効果については記載が困難であります。保有の合理性は、保有目的を鑑み、当社グループおよび投資先双方の中長期的な企業価値向上に資するか否か、各担当部門にて検証しております。	無
	3,018	2,480		
(株)高島屋	2,000	1,000	安定的かつ良好な取引関係の維持および当事業における消費動向や経営環境を把握するための参考等の目的のため保有しており、定量的な保有効果については記載が困難であります。保有の合理性は、保有目的を鑑み、当社グループおよび投資先双方の中長期的な企業価値向上に資するか否か、各担当部門にて検証しております。	有
	2,042	1,474		
(株)三越伊勢丹ホールディングス	697	697	当事業における消費動向や経営環境を把握するための参考等の目的のため保有しており、定量的な保有効果については記載が困難であります。保有の合理性は、保有目的を鑑み、当社グループの中長期的な企業価値向上に資するか否か、各担当部門にて検証しております。	無
	818	779		

(注) 1. (株)高島屋は、2018年9月1日を効力発生日として、2株を1株に併合するとともに、単元株式数を1,000株から100株に変更しております。

2. (株)東急レクリエーションは、2018年7月1日を効力発生日として、5株を1株に併合するとともに、単元株式数を1,000株から100株に変更しております。

みなし保有株式

該当事項はありません。

保有目的が純投資目的である投資株式

該当事項はありません。

当事業年度中に投資株式の保有目的を純投資目的から純投資目的以外の目的に変更したもの

該当事項はありません。

当事業年度中に投資株式の保有目的を純投資目的以外の目的から純投資目的に変更したもの

該当事項はありません。

第5 【経理の状況】

1 連結財務諸表及び財務諸表の作成方法について

(1) 当社の連結財務諸表は、「連結財務諸表の用語、様式及び作成方法に関する規則」(1976年大蔵省令第28号)に基づいて作成しております。

なお、当連結会計年度(2018年4月1日から2019年3月31日まで)の連結財務諸表に含まれる比較情報のうち、「財務諸表等の用語、様式及び作成方法に関する規則等の一部を改正する内閣府令」(2018年3月23日内閣府令第7号。以下「改正府令」という。)による改正後の連結財務諸表規則第15条の5第2項第2号及び同条第3項に係るものについては、改正府令附則第3条第2項により、改正前の連結財務諸表規則に基づいて作成しております。

(2) 当社の財務諸表は、「財務諸表等の用語、様式及び作成方法に関する規則」(1963年大蔵省令第59号。以下「財務諸表等規則」という。)に基づいて作成しております。

なお、当事業年度(2018年4月1日から2019年3月31日まで)の財務諸表に含まれる比較情報のうち、改正府令による改正後の財務諸表等規則第8条の12第2項第2号及び同条第3項に係るものについては、改正府令附則第2条第2項により、改正前の財務諸表等規則に基づいて作成しております。

また、当社は、特例財務諸表提出会社に該当し、財務諸表等規則第127条の規定により財務諸表を作成しております。

2 監査証明について

当社は、金融商品取引法第193条の2第1項の規定に基づき、連結会計年度(2018年4月1日から2019年3月31日まで)の連結財務諸表及び事業年度(2018年4月1日から2019年3月31日まで)の財務諸表について、八重洲監査法人により監査を受けております。

3 連結財務諸表等の適正性を確保するための特段の取組みについて

会計基準等の内容を適切に把握できる体制を整備するため、公益財団法人財務会計基準機構へ加入し、有価証券報告書や四半期報告書の作成に関する各種セミナーへの参加や、機関誌およびホームページ等を閲覧し会計基準に関する情報の収集をはかっております。また、財団法人産業経理協会に加入し、会計制度に関する各種セミナーに参加しております。

1 【連結財務諸表等】

(1) 【連結財務諸表】

【連結貸借対照表】

(単位：千円)

	前連結会計年度 (2018年3月31日)	当連結会計年度 (2019年3月31日)
資産の部		
流動資産		
現金及び預金	652,699	740,167
売掛金	37,115	41,793
たな卸資産	1 2,340	1 1,100
その他	58,923	45,723
貸倒引当金	970	241
流動資産合計	750,108	828,544
固定資産		
有形固定資産		
建物及び構築物	4 2,764,867	4 2,901,391
減価償却累計額	2,032,898	2,001,461
建物及び構築物(純額)	731,968	899,929
機械装置及び運搬具	135,554	138,659
減価償却累計額	99,727	116,907
機械装置及び運搬具(純額)	35,827	21,751
工具、器具及び備品	93,030	75,083
減価償却累計額	65,662	51,187
工具、器具及び備品(純額)	27,367	23,895
土地	3, 4 3,904,167	3, 4 3,904,167
リース資産	138,041	100,818
減価償却累計額	68,122	50,092
リース資産(純額)	69,919	50,725
建設仮勘定	3,715	-
有形固定資産合計	4,772,966	4,900,469
無形固定資産		
借地権	67,260	67,260
その他	13,368	12,581
無形固定資産合計	80,628	79,841
投資その他の資産		
投資有価証券	2 446,390	2 473,240
繰延税金資産	46,415	52,821
敷金及び保証金	89,146	88,646
その他	51,785	46,663
貸倒引当金	4,607	3,795
投資その他の資産合計	629,130	657,575
固定資産合計	5,482,725	5,637,886
資産合計	6,232,833	6,466,430

(単位：千円)

	前連結会計年度 (2018年3月31日)	当連結会計年度 (2019年3月31日)
負債の部		
流動負債		
買掛金	86,318	56,607
短期借入金	4 66,348	4 66,348
リース債務	22,243	17,554
未払法人税等	6,200	48,418
賞与引当金	11,435	12,901
その他	321,142	520,869
流動負債合計	513,687	722,699
固定負債		
長期借入金	4 211,675	4 145,327
リース債務	47,675	33,171
退職給付に係る負債	110,194	93,289
役員退職慰労引当金	8,906	8,906
長期預り敷金	619,036	619,064
再評価に係る繰延税金負債	3 1,082,196	3 1,082,196
その他	7,994	8,139
固定負債合計	2,087,678	1,990,094
負債合計	2,601,366	2,712,793
純資産の部		
株主資本		
資本金	1,004,500	1,004,500
利益剰余金	180,802	303,719
自己株式	8,451	8,549
株主資本合計	1,176,851	1,299,670
その他の包括利益累計額		
その他有価証券評価差額金	2,532	1,883
土地再評価差額金	3 2,452,083	3 2,452,083
その他の包括利益累計額合計	2,454,616	2,453,967
純資産合計	3,631,467	3,753,637
負債純資産合計	6,232,833	6,466,430

【連結損益計算書及び連結包括利益計算書】

【連結損益計算書】

(単位：千円)

	前連結会計年度 (自 2017年 4月 1日 至 2018年 3月 31日)	当連結会計年度 (自 2018年 4月 1日 至 2019年 3月 31日)
売上高	1,576,697	1,688,818
売上原価	869,225	879,918
売上総利益	707,472	808,900
販売費及び一般管理費	1 672,919	1 669,375
営業利益	34,553	139,525
営業外収益		
受取利息及び配当金	50,534	2,308
持分法による投資利益	23,130	27,908
その他	6,979	1,145
営業外収益合計	80,644	31,363
営業外費用		
支払利息	3,385	2,045
遊休資産維持管理費用	13,707	-
その他	923	6,164
営業外費用合計	18,016	8,210
経常利益	97,181	162,678
特別損失		
環境対策費	-	4,565
特別損失合計	-	4,565
税金等調整前当期純利益	97,181	158,113
法人税、住民税及び事業税	7,468	41,316
法人税等調整額	12,583	6,119
法人税等合計	5,115	35,196
当期純利益	102,297	122,916
親会社株主に帰属する当期純利益	102,297	122,916

【連結包括利益計算書】

(単位：千円)

	前連結会計年度 (自 2017年 4月 1日 至 2018年 3月 31日)	当連結会計年度 (自 2018年 4月 1日 至 2019年 3月 31日)
当期純利益	102,297	122,916
その他の包括利益		
その他有価証券評価差額金	617	648
その他の包括利益合計	617	648
包括利益	102,914	122,267
(内訳)		
親会社株主に係る包括利益	102,914	122,267

【連結株主資本等変動計算書】

前連結会計年度(自 2017年4月1日 至 2018年3月31日)

(単位：千円)

	株主資本				その他の包括利益累計額			純資産合計
	資本金	利益剰余金	自己株式	株主資本合計	その他 有価証券 評価差額金	土地再評価 差額金	その他の 包括利益 累計額合計	
当期首残高	1,004,500	78,505	7,943	1,075,062	1,914	2,452,083	2,453,998	3,529,061
当期変動額								
親会社株主に帰属する 当期純利益		102,297		102,297				102,297
自己株式の取得			508	508				508
株主資本以外の項目 の当期変動額（純 額）					617	-	617	617
当期変動額合計	-	102,297	508	101,788	617	-	617	102,406
当期末残高	1,004,500	180,802	8,451	1,176,851	2,532	2,452,083	2,454,616	3,631,467

当連結会計年度(自 2018年4月1日 至 2019年3月31日)

(単位：千円)

	株主資本				その他の包括利益累計額			純資産合計
	資本金	利益剰余金	自己株式	株主資本合計	その他 有価証券 評価差額金	土地再評価 差額金	その他の 包括利益 累計額合計	
当期首残高	1,004,500	180,802	8,451	1,176,851	2,532	2,452,083	2,454,616	3,631,467
当期変動額								
親会社株主に帰属する 当期純利益		122,916		122,916				122,916
自己株式の取得			97	97				97
株主資本以外の項目 の当期変動額（純 額）					648	-	648	648
当期変動額合計	-	122,916	97	122,819	648	-	648	122,170
当期末残高	1,004,500	303,719	8,549	1,299,670	1,883	2,452,083	2,453,967	3,753,637

【連結キャッシュ・フロー計算書】

(単位：千円)

	前連結会計年度 (自 2017年 4月 1日 至 2018年 3月 31日)	当連結会計年度 (自 2018年 4月 1日 至 2019年 3月 31日)
営業活動によるキャッシュ・フロー		
税金等調整前当期純利益	97,181	158,113
減価償却費	116,011	121,881
固定資産売却損益（ は益）	-	287
貸倒引当金の増減額（ は減少）	229	1,540
退職給付に係る負債の増減額（ は減少）	3,496	16,905
受取利息及び受取配当金	50,534	2,308
支払利息	3,385	2,045
持分法による投資損益（ は益）	23,130	27,908
売上債権の増減額（ は増加）	10,647	4,678
たな卸資産の増減額（ は増加）	618	1,240
仕入債務の増減額（ は減少）	1,691	29,711
未払消費税等の増減額（ は減少）	30,974	24,306
預り敷金及び保証金の増減額（ は減少）	4,789	28
その他	30,249	45,403
小計	213,997	221,065
利息及び配当金の受取額	50,534	2,308
利息の支払額	3,433	2,031
法人税等の支払額	50,927	6,970
営業活動によるキャッシュ・フロー	210,170	214,372
投資活動によるキャッシュ・フロー		
有形固定資産の取得による支出	29,748	42,336
有形固定資産の売却による収入	3,000	287
投資有価証券の売却による収入	2,000	-
無形固定資産の取得による支出	3,867	1,751
その他	1,895	5,745
投資活動によるキャッシュ・フロー	26,719	38,055
財務活動によるキャッシュ・フロー		
長期借入れによる収入	100,000	-
長期借入金の返済による支出	176,408	66,348
リース債務の返済による支出	25,943	22,404
自己株式の取得による支出	508	97
財務活動によるキャッシュ・フロー	102,860	88,849
現金及び現金同等物の増減額（ は減少）	80,590	87,467
現金及び現金同等物の期首残高	572,108	652,699
現金及び現金同等物の期末残高	1 652,699	1 740,167

【注記事項】

(連結財務諸表作成のための基本となる重要な事項)

1 連結の範囲に関する事項

(1) 連結子会社の数 3社

主要な連結子会社名は、「第1 企業の概況 4 関係会社の状況」に記載しているため、省略していません。

(2) 主要な非連結子会社の名称等

非連結子会社はありません。

2 持分法の適用に関する事項

(1) 持分法適用の関連会社数 2社

持分法適用の関連会社名

(株)野和ビル

(株)フラッグスビジョン

(2) 持分法を適用していない関連会社のうち主要な会社の名称

ROCES MUSASHINO HOLDINGS, INC.

持分法を適用しない理由

持分法を適用していない会社は、当期純利益（持分に見合う額）および利益剰余金（持分に見合う額）等からみて、持分法の対象から除いても連結財務諸表に及ぼす影響が軽微であり、かつ、全体としても重要性がないため、持分法の適用範囲から除外しております。

3 連結子会社の事業年度等に関する事項

連結子会社の決算日が連結決算日と異なる会社は次のとおりであります。

会社名	決算日
(株)寄居武蔵野 自動車教習所	1月31日
自由ヶ丘土地興業(株)	1月31日

上記の連結子会社の決算日現在の財務諸表を使用しております。ただし、連結決算日との間に生じた重要な取引については、連結上必要な調整を行っております。

4 会計方針に関する事項

(1) 重要な資産の評価基準及び評価方法

有価証券

その他有価証券

時価のあるもの

連結決算日の市場価格等に基づく時価法(評価差額は全部純資産直入法により処理し、売却原価は移動平均法により算定)

時価のないもの

移動平均法による原価法

たな卸資産

通常の販売目的で保有するたな卸資産

商品及び貯蔵品

最終仕入原価法(収益性の低下による簿価切下げの方法)

映像使用権

個別法による原価法(収益性の低下による簿価切下げの方法)

(2) 重要な減価償却資産の減価償却の方法

有形固定資産(リース資産を除く)

建物及び構築物(2016年3月31日以前に取得した建物附属設備及び構築物を除く)
定額法によっております。

その他の有形固定資産

定率法によっております。

なお、主な耐用年数については次のとおりであります。

建物及び構築物 8～50年

機械装置及び運搬具 3～17年

工具、器具及び備品 3～15年

無形固定資産(リース資産を除く)

定額法によっております。

なお、自社利用のソフトウェアについては、社内における利用可能期間(5年)に基づく定額法によっております。

リース資産(所有権移転外ファイナンス・リース取引に係るリース資産)

リース期間を耐用年数とし、残存価額を零として算定する定額法によっております。

(3) 重要な引当金の計上基準

貸倒引当金

債権の貸倒による損失に備えるため、一般債権については貸倒実績率により、貸倒懸念債権等については個別に回収可能性を勘案し、回収不能見込み額を計上しております。

賞与引当金

従業員賞与の支給に充てるため、将来の支給見込額のうち当期の負担額を計上しております。

役員退職慰労引当金

役員退職慰労金の支出に備えるため、「役員退職慰労金規程」に基づく当連結会計年度末における基準額を計上しております。

(4) 退職給付に係る会計処理の方法

当社及び連結子会社は、退職給付に係る負債及び退職給付費用の計算に、退職給付に係る期末自己都合要支給額を退職給付債務とする方法を用いた簡便法を適用しております。

(5) 重要なヘッジ会計の方法

ヘッジ会計の方法

金利スワップ取引については、特例処理の要件を満たすものは、特例処理を採用しております。

ヘッジ手段とヘッジ対象

ヘッジ手段

金利スワップ

ヘッジ対象

借入金の利息

ヘッジ方針

借入金の金利変動リスクを回避する目的で金利スワップ取引を行っております。

ヘッジの有効性評価の方法

金利スワップの特例処理の要件を満たしておりますので、決算日における有効性の評価を省略しております。

(6) 連結キャッシュ・フロー計算書における資金の範囲

連結キャッシュ・フロー計算書における資金（現金及び現金同等物）は、手許資金、随時引き出し可能な預金及び容易に換金可能であり、かつ、価値の変動について僅少なリスクしか負わない取得日から3ヶ月以内に償還期限の到来する短期投資であります。

(7) その他連結財務諸表作成のための重要な事項

消費税等の会計処理

消費税および地方消費税の会計処理は税抜方式によっております。

(未適用の会計基準等)

- ・「収益認識に関する会計基準」(企業会計基準第29号 2018年3月30日)
- ・「収益認識に関する会計基準の適用指針」(企業会計基準適用指針第30号 2018年3月30日)

(1) 概要

収益認識に関する包括的な会計基準であります。収益は、次の5つのステップを適用し認識されます。

ステップ1：顧客との契約を識別する。

ステップ2：契約における履行義務を識別する。

ステップ3：取引価格を算定する。

ステップ4：契約における履行義務に取引価格を配分する。

ステップ5：履行義務を充足した時に又は充足するにつれて収益を認識する。

(2) 適用予定日

2022年3月期の期首より適用予定であります。

(3) 当該会計基準等の適用による影響

影響額は、当連結財務諸表の作成時において評価中であります。

(表示方法の変更)

「『税効果会計に係る会計基準』の一部改正」の適用に伴う変更

「『税効果会計に係る会計基準』の一部改正」(企業会計基準第28号 2018年2月16日)を当連結会計年度の期首から適用しており、繰延税金資産は投資その他の資産の区分に表示し、繰延税金負債は固定負債の区分に表示する方法に変更しております。

この結果、前連結会計年度の連結貸借対照表において、「流動資産」の「繰延税金資産」39,111千円及び「固定負債」の「その他」のうち1,117千円を「投資その他の資産」の「繰延税金資産」46,415千円に含めて表示しております。

また、税効果会計関係注記において、税効果会計基準一部改正第3項から第5項に定める「税効果会計に係る会計基準」注解(注8)(評価性引当額の合計額を除く。)及び同注解(注9)に記載された内容を追加しております。

ただし、当該内容のうち前連結会計年度に係る内容については、税効果会計基準一部改正第7項に定める経過的な取扱いに従って記載しておりません。

(連結貸借対照表関係)

1 たな卸資産の内訳は次のとおりであります。

	前連結会計年度 (2018年3月31日)	当連結会計年度 (2019年3月31日)
商品	554千円	458千円
映像使用权	156千円	154千円
貯蔵品	1,630千円	488千円
合計	2,340千円	1,100千円

2 非連結子会社及び関連会社に対するものは、次のとおりであります。

	前連結会計年度 (2018年3月31日)	当連結会計年度 (2019年3月31日)
投資有価証券(株式)	326,452千円	354,360千円
(うち、共同支配企業に対する投資の金額)	263,549千円	284,662千円)

3 土地の再評価の適用

「土地の再評価に関する法律」(1998年法律第34号)及び「土地の再評価に関する法律の一部を改正する法律」(1999年法律第24号)に基づき、事業用土地の再評価を行い、当該評価差額に係る税金相当額を「再評価に係る繰延税金負債」として負債の部に計上し、当該繰延税金負債を控除した金額を「土地再評価差額金」として純資産の部に計上しております。

再評価の方法

土地の再評価に関する法律施行令(1998年3月31日、公布政令第119号)第2条第4号に定める、地価税法(1991年法律第69号)第16条に規定する地価税の課税価格の計算の基礎となる土地の価額を算定するために国税庁長官が定めて公表した方法により算定した価額に合理的な調整を行って算定する方法により算出しております。

再評価を行った年月日	2000年3月31日
再評価を行った土地の期末における時価と再評価後の帳簿価額との差額	再評価を行った土地の期末における時価が再評価後の帳簿価額を上回っているため記載しておりません。

4 担保資産及び担保付債務

担保に供している資産は次のとおりであります。

	前連結会計年度 (2018年3月31日)	当連結会計年度 (2019年3月31日)
建物及び構築物	342,303千円	512,865千円
土地	3,686,683千円	3,686,683千円
合計	4,028,986千円	4,199,548千円

担保付債務は次のとおりであります。

	前連結会計年度 (2018年3月31日)	当連結会計年度 (2019年3月31日)
長期借入金	119,942千円	79,832千円
(うち1年以内返済予定の長期借入金)	30,072千円	30,072千円)

5 偶発債務

下記の関係会社の金融機関からの借入に対し保証をしております。

	前連結会計年度 (2018年3月31日)	当連結会計年度 (2019年3月31日)
株野和ビル	341,000千円	304,970千円

(連結損益計算書関係)

1 販売費及び一般管理費のうち主要な費目及び金額は、次のとおりであります。

	前連結会計年度 (自 2017年4月1日 至 2018年3月31日)	当連結会計年度 (自 2018年4月1日 至 2019年3月31日)
給料及び手当	203,572千円	217,174千円
役員報酬	124,858千円	127,737千円
賞与引当金繰入額	7,632千円	8,282千円
減価償却費	32,241千円	29,829千円
地代家賃	99,246千円	99,246千円
退職給付費用	6,273千円	6,410千円

(連結包括利益計算書関係)

その他の包括利益に係る組替調整額及び税効果額

	前連結会計年度 (自 2017年4月1日 至 2018年3月31日)	当連結会計年度 (自 2018年4月1日 至 2019年3月31日)
その他有価証券評価差額金		
当期発生額	890千円	935千円
組替調整額		
税効果調整前	890千円	935千円
税効果額	272千円	286千円
その他有価証券評価差額金	617千円	648千円
その他の包括利益合計	617千円	648千円

(連結株主資本等変動計算書関係)

前連結会計年度(自 2017年4月1日 至 2018年3月31日)

1 発行済株式に関する事項

株式の種類	当連結会計年度期首	増加	減少	当連結会計年度末
普通株式(株)	10,500,000		9,450,000	1,050,000

(注) 普通株式の発行済株式数の減少は2017年10月1日付で普通株式10株につき1株の割合で株式併合を実施したものであります。

2 自己株式に関する事項

株式の種類	当連結会計年度期首	増加	減少	当連結会計年度末
普通株式(株)	33,178	1,057	30,727	3,508

(変動事由の概要)

1. 増加数の主な内訳は、次の通りであります。

単元未満株式の買取りによる増加 1,057株

2017年5月26日開催の取締役会において、単元株式数変更に係る議案が承認可決されました。また、2017年6月29日開催の第146回定時株主総会において、株式併合に係る議案が承認可決されました。これにより株式併合の効力発生日(2017年10月1日)をもって、株式併合(普通株式10株につき1株の割合で併合)および単元株式数の変更(1,000株から100株に変更)しております。当連結会計年度における増加自己株式1,057株の内訳は、株式併合前963株、株式併合後94株であります。

2. 減少数の主な内訳は、次の通りであります。

2017年10月1日付で普通株式10株につき1株の割合で株式併合を実施したことによる減少 30,727株

3 新株予約権等に関する事項

該当事項はありません。

4 配当に関する事項

該当事項はありません。

当連結会計年度(自 2018年4月1日 至 2019年3月31日)

1 発行済株式に関する事項

株式の種類	当連結会計年度期首	増加	減少	当連結会計年度末
普通株式(株)	1,050,000			1,050,000

2 自己株式に関する事項

株式の種類	当連結会計年度期首	増加	減少	当連結会計年度末
普通株式(株)	3,508	38		3,546

(変動事由の概要)

増加数の主な内訳は、次の通りであります。

単元未満株式の買取りによる増加 38株

3 新株予約権等に関する事項

該当事項はありません。

4 配当に関する事項

該当事項はありません。

(連結キャッシュ・フロー計算書関係)

1 現金及び現金同等物の期末残高と連結貸借対照表に記載されている科目の金額との関係

	前連結会計年度 (自 2017年4月1日 至 2018年3月31日)	当連結会計年度 (自 2018年4月1日 至 2019年3月31日)
現金及び預金勘定	652,699千円	740,167千円
現金及び現金同等物	652,699千円	740,167千円

(リース取引関係)

ファイナンス・リース取引

所有権移転外ファイナンス・リース取引に係るリース資産

(借主側)

リース資産の内容

・有形固定資産

主として映画事業関連における映写機器（機械装置及び運搬具）、空調機器（機械装置及び運搬具）、自動発券機器（機械装置及び運搬具）であります。

リース資産の減価償却の方法

リース期間を耐用年数とし、残存価額を零として算定する定額法によっております。

(金融商品関係)

1 金融商品の状況に関する事項

(1) 金融商品に対する取組方針

当社グループは、主に映画館、テナントビルおよび自動車教習所等の設備の維持管理および新たな設備投資計画に照らして、また通常の運転資金として、必要な資金(主に銀行借入)を調達しております。資金運用については主に短期的な預金等により運用しております。デリバティブは、後述するリスクを回避するために利用しており、投機的な取引は行わない方針であります。

(2) 金融商品の内容及びそのリスク

営業債権である売掛金は、顧客の信用リスクに晒されております。投資有価証券は、主に取引先企業や同業他社等、業務に関連する株式等であり、市場価格の変動リスクに晒されております。

営業債務である買掛金は、すべて1年以内の支払期日であります。借入金およびファイナンス・リース取引に係るリース債務は、主に設備投資に必要な資金の調達または通常の運転資金として調達をしたものであり、償還日は決算日後、最長で5年8ヶ月後(前連結会計年度は6年8ヶ月後)であります。このうち一部は、変動金利であるため金利の変動リスクに晒されています。

(3) 金融商品に係るリスク管理体制

信用リスク(取引先の契約不履行等に係るリスク)の管理

当社は、経理規程に定められた「債権・債務の管理」に関する条項に沿って、営業債権について、各事業部門における管理責任者が主要な取引先の状況を定期的にモニタリングし、取引相手ごとに期日及び残高を管理するとともに、財務状況等の悪化等による回収懸念の早期把握や軽減を図っております。連結子会社についても、当社の経理規程に準じて、同様の管理を行っております。

投資有価証券は、取引先企業や同業他社等、業務に関連した信頼関係の強い相手先に関連する株式が主であり、経理規程に定められた「資金調達運用」に関する条項に沿って管理しており、信用リスクにつきましても僅少かつ早期に見極めが可能と考えております。

デリバティブ取引の利用にあたっては、カウンターパーティーリスクを軽減するために、格付の高い金融機関とのみ取引を行っております。

当期の連結決算日現在における最大信用リスク額は、信用リスクに晒される金融資産の貸借対照表価額により表わされています。

市場リスクの管理

当社は、一部長期借入金に係る支払金利の変動リスクを抑制するために、金利スワップ取引を利用しておりません。

投資有価証券については、定期的に時価や発行体(取引先企業)の財務状況等を把握し、また取引先企業との関係を勘案して保有体制の合理性を継続的に見直しております。

デリバティブ取引については、経理規程に定められた「資金調達運用」に関する条項に従って、執行・管理しております。

資金調達に係る流動性リスク(支払期日に支払いを実行できなくなるリスク)の管理

当社は、各部署からの報告に基づき経理部が適時に資金繰計画を作成・更新するとともに、毎月の支払債務や有利子負債に係る金融機関とのコミットメント等を勘案し、必要な手許流動性の維持管理を行うことにより、流動性リスクを管理しております。

(4) 金融商品の時価等に関する事項についての補足説明

金融商品の時価には、市場価格に基づく価額のほか、市場価格がない場合には合理的に算定された価額が含まれております。当該価額の算定においては変動要因を織り込んでいるため、異なる前提条件等を採用することにより、当該価額が変動することもあります。また、「デリバティブ取引関係」注記におけるデリバティブ取引に関する契約額等については、その金額自体がデリバティブ取引に係る市場リスクを示すものではありません。

(5) 信用リスクの集中

該当事項はありません。

2 金融商品の時価等に関する事項

連結貸借対照表計上額、時価及びこれらの差額については、次のとおりであります。なお、時価を把握することが極めて困難と認められるものは、次表には含めておりません((注2)を参照ください。)

前連結会計年度(2018年3月31日)

(単位:千円)

	連結貸借対照表 計上額	時価	差額
(1) 現金及び預金	652,699	652,699	
(2) 売掛金	37,115	37,115	
(3) 投資有価証券 其他有価証券	15,038	15,038	
資産計	704,853	704,853	
(1) 買掛金	86,318	86,318	
(2) 長期借入金	278,023	282,495	4,472
負債計	364,341	368,814	4,472

当連結会計年度(2019年3月31日)

(単位:千円)

	連結貸借対照表 計上額	時価	差額
(1) 現金及び預金	740,167	740,167	
(2) 売掛金	41,793	41,793	
(3) 投資有価証券 其他有価証券	13,979	13,979	
資産計	795,941	795,941	
(1) 買掛金	56,607	56,607	
(2) 長期借入金	211,675	214,393	2,718
負債計	268,282	271,000	2,718

(注1)金融商品の時価の算定方法並びに有価証券及びデリバティブ取引に関する事項

資 産

(1) 現金及び預金、ならびに(2) 売掛金

これらは短期間で決済されるため、時価は帳簿価額にほぼ等しいことから、当該帳簿価額によっております。

(3) 投資有価証券

これらの時価について、株式は取引所の価格によっております。

また、保有目的ごとの有価証券に関する注記事項については、(有価証券関係)注記を参照ください。

負 債

(1) 買掛金

これらは短期間で決済されるため、時価は帳簿価額にほぼ等しいことから、当該帳簿価額によっております。

(2) 長期借入金

これらの時価については主に、将来キャッシュ・フローに信用リスクを織り込み、リスクフリーレート(国債利回りの利率)で割り引いて算定する方法によっております。

(注2)時価を把握することが極めて困難と認められる金融商品の連結貸借対照表計上額

(単位:千円)

区分	2018年3月31日	2019年3月31日
非上場株式	431,352	459,260
敷金及び保証金	89,146	88,646
長期預り敷金	619,036	619,064
保証債務 1		

1 保証債務の額は、前連結会計年度末341,000千円、当連結会計年度末304,970千円であります。

非上場株式は市場価格がなく、かつ将来キャッシュ・フローを見積もることができず、時価を把握することが極めて困難と認められるため、「(3) 投資有価証券 その他有価証券」には含めておりません。また、「敷金及び保証金」「長期預り敷金」「保証債務」についても、諸般の取引条件を勘案した結果、時価を把握することが極めて困難と認められるため、時価についての記載を行っておりません。

(注3) 金銭債権及び満期のある有価証券の連結決算日後の償還予定額

前連結会計年度(2018年3月31日)

(単位:千円)

	1年以内	1年超 5年以内	5年超 10年以内	10年超
現金及び預金	652,699			
売掛金	37,115			
合計	689,814			

当連結会計年度(2019年3月31日)

(単位:千円)

	1年以内	1年超 5年以内	5年超 10年以内	10年超
現金及び預金	740,167			
売掛金	41,793			
合計	781,961			

(注4) 長期借入金、リース債務及びその他の有利子負債の連結決算日後の返済予定額

前連結会計年度(2018年3月31日)

(単位:千円)

	1年以内	1年超 2年以内	2年超 3年以内	3年超 4年以内	4年超 5年以内	5年超
長期借入金	66,348	66,348	66,348	42,979	14,400	21,600
リース債務	22,243	16,912	15,209	10,191	4,083	1,279
合計	88,591	83,260	81,557	53,170	18,483	22,879

当連結会計年度(2019年3月31日)

(単位:千円)

	1年以内	1年超 2年以内	2年超 3年以内	3年超 4年以内	4年超 5年以内	5年超
長期借入金	66,348	66,348	42,979	14,400	14,400	7,200
リース債務	17,554	15,851	10,833	4,725	1,761	
合計	83,902	82,199	53,812	19,125	16,161	7,200

(有価証券関係)

1 その他有価証券

前連結会計年度(2018年3月31日)

(単位:千円)

区分	連結貸借対照表計上額	取得原価	差額
連結貸借対照表計上額が 取得原価を超えるもの			
株式	8,275	5,163	3,112
投資信託	6,762	6,224	537
小計	15,038	11,388	3,650
連結貸借対照表計上額が 取得原価を超えないもの			
株式			
小計			
合計	15,038	11,388	3,650

(注)非上場株式(連結貸借対照表計上額104,900千円)については、市場価額がなく、時価を把握することが極めて困難と認められることから、上記の「その他有価証券」には含めておりません。

当連結会計年度(2019年3月31日)

(単位:千円)

区分	連結貸借対照表計上額	取得原価	差額
連結貸借対照表計上額が 取得原価を超えるもの			
株式	7,226	5,163	2,063
投資信託	6,753	6,101	651
小計	13,979	11,264	2,714
連結貸借対照表計上額が 取得原価を超えないもの			
株式			
小計			
合計	13,979	11,264	2,714

(注)非上場株式(連結貸借対照表計上額104,900千円)については、市場価額がなく、時価を把握することが極めて困難と認められることから、上記の「その他有価証券」には含めておりません。

2 連結会計年度中に売却したその他有価証券

前連結会計年度(自 2017年4月1日 至 2018年3月31日)

重要性が乏しいため、記載を省略しております。

当連結会計年度(自 2018年4月1日 至 2019年3月31日)

連結会計年度中に売却したその他有価証券はありません。

3 減損処理を行った有価証券

前連結会計年度において、該当事項はありません。

当連結会計年度において、該当事項はありません。

(デリバティブ取引関係)

該当事項はありません。

(退職給付関係)

1 採用している退職給付制度の概要

当社及び連結子会社は、確定給付型の制度として退職一時金制度（非積立型制度）を設けております。なお、当社及び連結子会社が有する退職一時金制度は、簡便法により退職給付に係る負債及び退職給付費用を計算しておりません。

2 確定給付制度

(1) 簡便法を適用した制度の、退職給付に係る負債の期首残高と期末残高の調整表

	前連結会計年度 (自 2017年4月1日 至 2018年3月31日)	当連結会計年度 (自 2018年4月1日 至 2019年3月31日)
退職給付に係る負債の期首残高	113,690千円	110,194千円
退職給付費用	7,673千円	7,295千円
退職給付の支払額	11,169千円	24,200千円
退職給付に係る負債の期末残高	110,194千円	93,289千円

(2) 退職給付債務の期末残高と連結貸借対照表に計上された退職給付に係る負債の調整表

	前連結会計年度 (2018年3月31日)	当連結会計年度 (2019年3月31日)
非積立型制度の退職給付債務	110,194千円	93,289千円
連結貸借対照表に計上された負債と資産の純額	110,194千円	93,289千円
退職給付に係る負債	110,194千円	93,289千円
連結貸借対照表に計上された負債と資産の純額	110,194千円	93,289千円

(3) 退職給付費用

簡便法で計算した退職給付費用 前連結会計年度7,673千円 当連結会計年度7,295千円

(注) 当社及び連結子会社は、退職給付規程に定められた従業員の数がいずれも300人未満であり、またグループ全体としても300人に満たないため、簡便法による期末自己都合要支給額の100%を退職給付債務としております。

(ストック・オプション等関係)

該当事項はありません。

(税効果会計関係)

1 繰延税金資産及び繰延税金負債の発生の主な原因別の内訳

		前連結会計年度 (2018年3月31日)	当連結会計年度 (2019年3月31日)
繰延税金資産	税務上の繰越欠損金(注) 2	243,964千円	233,513千円
	貸倒に係る損失	18,533千円	18,595千円
	その他の投資評価損	87,815千円	87,280千円
	減損損失	1,601千円	1,601千円
	退職給付に係る負債	33,741千円	28,565千円
	投資有価証券評価損	39,914千円	39,914千円
	関係会社株式評価損	21,434千円	21,434千円
	減価償却超過額	7,364千円	7,059千円
	賞与引当金	3,501千円	3,950千円
	その他	8,224千円	13,364千円
	繰延税金資産小計	466,095千円	455,279千円
	税務上の繰越欠損金に係る評価性引当額(注) 2		203,331千円
	将来減算一時差異等の合計に係る評価性引当額		198,295千円
	評価性引当額小計(注) 1	418,562千円	401,627千円
繰延税金資産合計		47,532千円	53,652千円
繰延税金負債	その他有価証券評価差額金	1,117千円	831千円
繰延税金資産の純額		46,415千円	52,821千円
再評価に係る繰延税金負債	事業用土地再評価差額	1,082,196千円	1,082,196千円

(注) 1. 評価性引当額が16,935千円減少しております。この減少の主な内容は、当社及び一部の連結子会社において将来の課税所得の見込みの見直しに伴い評価性引当額を29,616千円減額し、連結子会社武蔵野エンタテインメント(株)における税務上の繰越欠損金に係る評価性引当額12,680千円を追加的に認識したことに伴うものであります。

2. 税務上の繰越欠損金及びその繰延税金資産の繰越期限別の金額

当連結会計年度(2019年3月31日)

	1年以内	1年超 2年以内	2年超 3年以内	3年超 4年以内	4年超 5年以内	5年超	合計
税務上の繰越欠損金(a)	4,365	63,525	39,109	8,342	1,847	116,323	233,513千円
評価性引当額	2,121	63,525	39,109	8,342	1,847	88,385	203,331 "
繰延税金資産	2,244					27,938	(b)30,182 "

(a) 税務上の繰越欠損金は、法定実効税率を乗じた額であります。

(b) 税務上の繰越欠損金233,513千円(法定実効税率を乗じた額)について、繰延税金資産30,182千円を計上しております。当該繰延税金資産30,182千円は、当社及び連結子会社における税務上の繰越欠損金の残高233,513千円(法定実効税率を乗じた額)の一部について認識したものであります。当該繰延税金資産を計上した税務上の繰越欠損金は、当社が2018年3月期に減損処理済固定資産を売却したこと及び連結子会社自由ヶ丘土地興業(株)が過去の複数年度において税引前当期純損失を計上したことにより生じたものであり、将来の課税所得の見込みにより、回収可能と判断し評価性引当額を認識しておりません。

2 法定実効税率と税効果会計適用後の法人税等の負担率との間に重要な差異があるときの、当該差異の原因となった
 主要な項目別の内訳

	前連結会計年度 (2018年3月31日)	当連結会計年度 (2019年3月31日)
法定実効税率	30.86 %	30.62 %
(調整)		
交際費等永久に損金に算入されない項目	1.07 %	1.34 %
受取配当金等永久に益金に算入されない項目	10.15 %	2.31 %
住民税均等割等	2.57 %	1.58 %
持分法による投資損益	7.35 %	5.41 %
評価性引当額の増減	23.21 %	10.71 %
留保金課税		6.61 %
その他	0.94 %	0.54 %
税効果会計適用後の法人税等の負担率	5.26 %	22.26 %

(資産除去債務関係)

1 資産除去債務のうち連結貸借対照表に計上しているもの

重要性が乏しいため、注記を省略しております。

2 連結貸借対照表に計上しているもの以外の資産除去債務

当社グループは、建物賃貸借契約に基づき使用する建物等について、退去時における原状回復に係る債務を有しておりますが、連結貸借対照表に計上しているものを除き、当該債務に関連する資産の使用期間が明確でなく、現在のところ移転・退去等も予定されていないことから、資産除去債務を合理的に見積もることができず、当該債務に見合う資産除去債務を計上しておりません。

(賃貸等不動産関係)

当社グループでは、主に東京都及び埼玉県において、賃貸用の商業テナントビル(土地を含む。)や商業テナントビルに供している敷地等を所有しております。

当該賃貸等不動産の連結貸借対照表計上額、期中増減額及び時価は以下のとおりであります。

(単位：千円)

		前連結会計年度 (自 2017年4月1日 至 2018年3月31日)	当連結会計年度 (自 2018年4月1日 至 2019年3月31日)
連結貸借対照表計上額	期首残高	4,305,851	4,275,494
	期中増減額	30,356	169,597
	期末残高	4,275,494	4,445,092
期末時価		8,615,126	9,335,776

- (注) 1 連結貸借対照表計上額は、取得原価から減価償却累計額及び減損損失累計額を控除した金額であります。
 2 期中増減額のうち、前連結会計年度の主な減少は、減価償却費30,356千円であります。
 当連結会計年度の主な増加は商業テナントビルの建物付属設備等211,383千円であり、主な減少は減価償却費41,785千円であります。
 3 期末の時価は、主として「不動産鑑定評価基準」に基づいて自社で算定した金額(指標等を用いて調整を行ったものを含む。)であります。

また、賃貸等不動産に関する損益は、次のとおりであります。

(単位：千円)

	前連結会計年度 (自 2017年4月1日 至 2018年3月31日)	当連結会計年度 (自 2018年4月1日 至 2019年3月31日)
賃貸収益	495,226	643,386
賃貸費用	148,287	168,889
差額	346,939	474,496
その他損益	3,000	

- (注) 1 賃貸収益および賃貸費用は、不動産賃貸収入、不動産投資収入とこれに対する費用(減価償却費、修繕費、水道光熱費、管理費、租税公課等)であります。
 2 前連結会計年度のその他損益は、旧甲府武蔵野シネマ・ファイブ土地建物の売却益であります。

(セグメント情報等)

【セグメント情報】

1 報告セグメントの概要

当社の報告セグメントは、当社の構成単位のうち分離された財務情報が入手可能であり、取締役会が、経営資源の配分の決定及び業績を評価するために、定期的に検討を行う対象となっているものです。

当社は、本社に各事業部門を統括する営業本部を置き、各事業部門はそれぞれの責任者のもとに包括的な戦略を立案し、国内に限定して事業活動を展開しております。

従って当社は、営業本部を基礎とした事業別セグメントから構成されており、「映画事業」「不動産事業」「自動車教習事業」「商事事業」からなる4部門を報告セグメントとしております。

「映画事業」は映画興行、映画配給及び映画館売店等の運営を行っております。「不動産事業」は不動産の賃貸及び販売、また不動産投資業を行っております。「自動車教習事業」は自動車教習所の運営を行っております。

「商事事業」は住宅資材の販売及び飲食店等の委託経営を行っております。

「スポーツ・レジャー事業」につきましては、営業中止中であります。

2 報告セグメントごとの売上高、利益又は損失、資産、負債その他の項目の金額の算定方法

報告されている事業セグメントの会計処理の方法は、「連結財務諸表作成のための基本となる重要な事項」における記載と概ね同一であります。

事業セグメントの利益は、営業利益をベースとした数値であります。セグメント間の内部売上高又は振替高は、市場実勢価格に基づいております。

3 報告セグメントごとの売上高、利益又は損失、資産、負債その他の項目の金額に関する情報
 前連結会計年度(自 2017年4月1日 至 2018年3月31日)

(単位：千円)

	報告セグメント					その他(注)	合計
	映画事業	不動産事業	自動車教習事業	商事事業	計		
売上高							
外部顧客への売上高	591,104	574,868	320,597	81,300	1,567,870	8,826	1,576,697
セグメント間の内部 売上高又は振替高		70,416			70,416		70,416
計	591,104	645,284	320,597	81,300	1,638,287	8,826	1,647,114
セグメント利益又は損失 ()	58,805	367,582	16,377	7,733	332,888	3,120	336,008
セグメント資産	502,125	4,384,384	428,484	292	5,315,286	2,451	5,317,738
その他の項目							
減価償却費	53,131	30,477	26,451		110,060	374	110,435
有形固定資産及び無形 固定資産の増加額	2,150	469	27,554		30,175		30,175

(注) 1. 「その他」の区分は主として著作権収入や自販機手数料等であり、報告セグメントに含まれない事業セグメントであります。

当連結会計年度(自 2018年4月1日 至 2019年3月31日)

(単位：千円)

	報告セグメント					その他(注)	合計
	映画事業	不動産事業	自動車教習事業	商事事業	計		
売上高							
外部顧客への売上高	563,961	724,133	311,477	81,299	1,680,870	7,948	1,688,818
セグメント間の内部売上高又は振替高	1,348	70,416			71,764		71,764
計	565,309	794,549	311,477	81,299	1,752,635	7,948	1,760,583
セグメント利益又は損失()	60,469	478,258	36,441	7,724	461,954	2,538	464,492
セグメント資産	466,497	4,541,636	438,051	208	5,446,394	2,273	5,448,667
その他の項目							
減価償却費	50,374	41,921	24,490		116,786	351	117,138
有形固定資産及び無形固定資産の増加額	26,302	211,383	12,142		249,828	443	250,271

(注) 1. 「その他」の区分は主として著作権収入や自販機手数料等であり、報告セグメントに含まれない事業セグメントであります。

4 報告セグメント合計額と連結財務諸表計上額との差額及び当該差額の主な内容(差異調整に関する事項)

(単位：千円)

売上高	前連結会計年度	当連結会計年度
報告セグメント計	1,638,287	1,752,635
「その他」の区分の売上高	8,826	7,948
セグメント間取引消去	70,416	71,764
連結財務諸表の売上高	1,576,697	1,688,818

(単位：千円)

利益	前連結会計年度	当連結会計年度
報告セグメント計	332,888	461,954
「その他」の区分の利益	3,120	2,538
セグメント間取引消去	693	147
全社費用(注)	302,148	324,819
連結財務諸表の営業利益	34,553	139,525

(注) 全社費用は、主に報告セグメントに帰属しない一般管理費であります。

(単位：千円)

資産	前連結会計年度	当連結会計年度
報告セグメント計	5,315,286	5,446,394
「その他」の区分の資産	2,451	2,273
全社資産(注)	915,094	1,017,762
連結財務諸表の資産合計	6,232,833	6,466,430

(注) 全社資産の主なものは、余資運用資金(現預金等)、長期投資資金(投資有価証券)及び管理部門に係る資産等であります。

(単位：千円)

その他の項目	報告セグメント計		その他		調整額		連結財務諸表計上額	
	前連結 会計年度	当連結 会計年度	前連結 会計年度	当連結 会計年度	前連結 会計年度	当連結 会計年度	前連結 会計年度	当連結 会計年度
減価償却費	110,060	116,786	374	351	5,576	4,743	116,011	121,881
有形固定資産及び 無形固定資産の増加額	30,175	249,828		443		3,471	30,175	253,743

(注) 調整額は報告セグメントに帰属しない全社費用または全社資産に係るものであります。

【関連情報】

前連結会計年度(自 2017年4月1日 至 2018年3月31日)

1 製品及びサービスごとの情報

セグメント情報に同様の情報を開示しているため、記載を省略しております。

2 地域ごとの情報

(1) 売上高

本邦以外の外部顧客への売上高がないため、該当事項はありません。

(2) 有形固定資産

本邦以外に所在している有形固定資産がないため、該当事項はありません。

3 主要な顧客ごとの情報

(単位：千円)

顧客の名称又は氏名	売上高	関連するセグメント名
株式会社高島屋	221,592	不動産事業

当連結会計年度(自 2018年4月1日 至 2019年3月31日)

1 製品及びサービスごとの情報

セグメント情報に同様の情報を開示しているため、記載を省略しております。

2 地域ごとの情報

(1) 売上高

本邦以外の外部顧客への売上高がないため、該当事項はありません。

(2) 有形固定資産

本邦以外に所在している有形固定資産がないため、該当事項はありません。

3 主要な顧客ごとの情報

(単位：千円)

顧客の名称又は氏名	売上高	関連するセグメント名
株式会社高島屋	221,592	不動産事業

【報告セグメントごとの固定資産の減損損失に関する情報】

該当事項はありません。

【報告セグメントごとののれんの償却額及び未償却残高に関する情報】

該当事項はありません。

【報告セグメントごとの負ののれん発生益に関する情報】

該当事項はありません。

【関連当事者情報】

1 関連当事者との取引

(1) 連結財務諸表提出会社と関連当事者の取引

(ア) 連結財務諸表提出会社の非連結子会社及び関連会社等

前連結会計年度(自 2017年4月1日 至 2018年3月31日)

種類	会社等の名称 又は氏名	所在地	資本金又は 出資金 (千円)	事業の内容 又は職業	議決権等 の所有 (被所有) 割合(%)	関連当事者 との関係	取引の内容	取引金額 (千円)	科目	期末残高 (千円)
関連 会社	(株)野和ビル	東京都 新宿区	20,000	ビル賃貸業	(所有) 直接50.0	敷地の賃貸 役員の兼任	敷地の賃貸	155,028	長期預り 敷金 前受金	411,300
							債務保証	341,000		12,919

(注) 1. 取引条件及び取引条件の決定方針等

- ・取引条件の決定については、一般取引条件を参考に協議の上決定しております。
- 2. 期末残高、取引金額には消費税等は含まれておりません。
- 3. 債務保証につきましては金融機関よりの借入金に対して債務保証を行ったものであり、保証料の受領はしておりません。

当連結会計年度(自 2018年4月1日 至 2019年3月31日)

種類	会社等の名称 又は氏名	所在地	資本金又は 出資金 (千円)	事業の内容 又は職業	議決権等 の所有 (被所有) 割合(%)	関連当事者 との関係	取引の内容	取引金額 (千円)	科目	期末残高 (千円)
関連 会社	(株)野和ビル	東京都 新宿区	20,000	ビル賃貸業	(所有) 直接50.0	敷地の賃貸 役員の兼任	敷地の賃貸	155,028	長期預り 敷金 前受金	411,300
							債務保証	304,970		12,919

(注) 1. 取引条件及び取引条件の決定方針等

- ・取引条件の決定については、一般取引条件を参考に協議の上決定しております。
- 2. 期末残高、取引金額には消費税等は含まれておりません。
- 3. 債務保証につきましては金融機関よりの借入金に対して債務保証を行ったものであり、保証料の受領はしておりません。

(イ) 連結財務諸表提出会社の役員及び主要株主(個人の場合に限る)等

前連結会計年度(自 2017年4月1日 至 2018年3月31日)

種類	会社等の名称 又は氏名	所在地	資本金又は 出資金 (千円)	事業の内容 又は職業	議決権等 の 被所有割合 (%)	関連当事者 との関係	取引の内容	取引金額 (千円)	科目	期末残高 (千円)
役員	河野義勝			当社 代表取締役 社長	直接33.4		銀行借入に 対する債務 被保証	29,680		

(注) 1. 取引条件及び取引条件の決定方針等

- ・取引条件の決定については、一般取引条件を参考に協議の上決定しております。
- 2. 取引金額には消費税等は含まれておりません。
- 3. 当社は銀行借入に対して、代表取締役社長河野義勝より債務保証を受けており、取引金額は期末時点での被保証残高であります。なお、保証料の支払いは行っておりません。

当連結会計年度(自 2018年4月1日 至 2019年3月31日)

種類	会社等の名称 又は氏名	所在地	資本金又は 出資金 (千円)	事業の内容 又は職業	議決権等 の 被所有割合 (%)	関連当事者 との関係	取引の内容	取引金額 (千円)	科目	期末残高 (千円)
役員	河野義勝			当社 代表取締役 社長	直接33.2		銀行借入に 対する債務 被保証	20,800		

(注) 1. 取引条件及び取引条件の決定方針等

- ・取引条件の決定については、一般取引条件を参考に協議の上決定しております。
- 2. 取引金額には消費税等は含まれておりません。
- 3. 当社は銀行借入に対して、代表取締役社長河野義勝より債務保証を受けており、取引金額は期末時点での被保証残高であります。なお、保証料の支払いは行っておりません。

(2) 連結財務諸表提出会社の連結子会社と関連当事者との取引

(ア) 連結財務諸表提出会社の役員及び主要株主(個人の場合に限る)等

前連結会計年度(自 2017年4月1日 至 2018年3月31日)

種類	会社等の名称 又は氏名	所在地	資本金又は 出資金 (千円)	事業の内容 又は職業	議決権等 の 被所有割合 (%)	関連当事者 との関係	取引の内容	取引金額 (千円)	科目	期末残高 (千円)
役員	河野義勝			当社 代表取締役 社長	直接33.4		銀行借入に 対する債務 被保証	9,000		

(注) 1. 取引条件及び取引条件の決定方針等

- ・取引条件の決定については、一般取引条件を参考に協議の上決定しております。
- 2. 取引金額には消費税等は含まれておりません。
- 3. 連結子会社の銀行借入に対して、代表取締役社長河野義勝より債務保証を受けており、取引金額は期末時点での被保証残高であります。なお、保証料の支払いは行っておりません。

当連結会計年度(自 2018年4月1日 至 2019年3月31日)

種類	会社等の名称 又は氏名	所在地	資本金又は 出資金 (千円)	事業の内容 又は職業	議決権等 の 被所有割合 (%)	関連当事者 との関係	取引の内容	取引金額 (千円)	科目	期末残高 (千円)
役員	河野義勝			当社 代表取締役 社長	直接33.2		銀行借入に 対する債務 被保証	6,000		

(注) 1. 取引条件及び取引条件の決定方針等

- ・取引条件の決定については、一般取引条件を参考に協議の上決定しております。
- 2. 取引金額には消費税等は含まれておりません。
- 3. 連結子会社の銀行借入に対して、代表取締役社長河野義勝より債務保証を受けており、取引金額は期末時点での被保証残高であります。なお、保証料の支払いは行っておりません。

2 親会社又は重要な関連会社に関する注記

(1) 親会社情報

該当事項はありません。

(2) 重要な関連会社の要約財務情報

重要な関連会社は(株)野和ビルであり、その要約財務情報は以下のとおりであります。

前連結会計年度(自 2017年4月1日 至 2018年3月31日)

(単位:千円)

流動資産合計	147,571
固定資産合計	1,597,767
流動負債合計	70,815
固定負債合計	1,147,723
純資産合計	526,799
売上高	553,681
税引前当期純利益	59,118
当期純利益	38,992

当連結会計年度(自 2018年4月1日 至 2019年3月31日)

(単位:千円)

流動資産合計	142,334
固定資産合計	1,572,652
流動負債合計	69,997
固定負債合計	1,075,663
純資産合計	569,325
売上高	553,253
税引前当期純利益	63,854
当期純利益	42,526

(1株当たり情報)

	前連結会計年度 (自 2017年4月1日 至 2018年3月31日)	当連結会計年度 (自 2018年4月1日 至 2019年3月31日)
1株当たり純資産額	3,470.13円	3,587.01円
1株当たり当期純利益金額	97.75円	117.46円
潜在株式調整後 1株当たり当期純利益金額		

(注) 1. 潜在株式調整後1株当たり当期純利益金額については、潜在株式がないため記載しておりません。
 2. 当社は2017年10月1日付で普通株式10株につき1株の割合で株式併合を行っております。「1株当たり純資産額」「1株当たり当期純利益金額」は、前連結会計年度の期首に当該株式併合が行われたと仮定して算定しております。

3. 1株当たり当期純利益金額の算定上の基礎は、以下のとおりであります。

項目	前連結会計年度 (自 2017年4月1日 至 2018年3月31日)	当連結会計年度 (自 2018年4月1日 至 2019年3月31日)
1株当たり当期純利益金額		
親会社株主に帰属する当期純利益(千円)	102,297	122,916
普通株主に帰属しない金額(千円)		
普通株式に係る親会社株主に帰属する 当期純利益(千円)	102,297	122,916
普通株式の期中平均株式数(株)	1,046,565	1,046,469

3. 1株当たり純資産額の算定上の基礎は、以下のとおりであります。

項目	前連結会計年度末 (2018年3月31日)	当連結会計年度末 (2019年3月31日)
純資産の部の合計額(千円)	3,631,467	3,753,637
普通株式に係る期末の純資産額(千円)	3,631,467	3,753,637
1株当たり純資産額の算定に用いられた期末の普通株式 の数(株)	1,046,492	1,046,454

(重要な後発事象)

該当事項はありません。

【連結附属明細表】

【社債明細表】

該当事項はありません。

【借入金等明細表】

区分	当期首残高 (千円)	当期末残高 (千円)	平均利率 (%)	返済期限
短期借入金				
1年以内に返済予定の長期借入金	66,348	66,348	0.803	
1年以内に返済予定のリース債務	22,243	17,554		
長期借入金(1年以内に返済予定のものを除く。)	211,675	145,327	0.803	2021年1月～ 2024年11月
リース債務(1年以内に返済予定のものを除く。)	47,675	33,171		2020年7月～ 2023年12月
その他有利子負債				
合計	347,942	262,400		

- (注) 1 「平均利率」については、借入金の期末残高に対する加重平均利率を記載しております。
 2 リース債務及びその他の有利子負債については、計上方法を利息相当額を認識しない簡便処理によっているため、「平均利率」を記載しておりません。
 3 長期借入金、リース債務(1年以内返済予定のものを除く)の連結決算日後5年内における返済予定額は以下のとおりであります。

	1年超2年以内 (千円)	2年超3年以内 (千円)	3年超4年以内 (千円)	4年超5年以内 (千円)
長期借入金	66,348	42,979	14,400	14,400
リース債務	15,851	10,833	4,725	1,761

【資産除去債務明細表】

当連結会計年度期首及び当連結会計年度末における資産除去債務の金額が当連結会計年度期首及び当連結会計年度末における負債及び純資産の合計額の100分の1以下であるため、記載を省略しております。

(2) 【その他】

当連結会計年度における四半期情報

(累計期間)	第1四半期	第2四半期	第3四半期	当連結会計年度
売上高 (千円)	571,512	957,086	1,314,243	1,688,818
税金等調整前四半期(当期)純利益金額 (千円)	183,717	171,745	179,224	158,113
親会社株主に帰属する四半期(当期)純利益金額 (千円)	129,274	121,147	130,019	122,916
1株当たり四半期(当期)純利益金額 (円)	123.53	115.77	124.25	117.46

(会計期間)	第1四半期	第2四半期	第3四半期	第4四半期
1株当たり四半期純利益金額又は四半期純損失金額 (円)	123.53	7.77	8.48	6.79

2 【財務諸表等】

(1) 【財務諸表】

【貸借対照表】

(単位：千円)

	前事業年度 (2018年3月31日)	当事業年度 (2019年3月31日)
資産の部		
流動資産		
現金及び預金	297,580	384,153
売掛金	33,312	36,919
たな卸資産	1,554	1,458
関係会社短期貸付金	-	25,000
その他	2,65,407	2,50,741
貸倒引当金	942	49
流動資産合計	395,912	497,223
固定資産		
有形固定資産		
建物	3,534,275	3,701,585
構築物	1,891	1,751
機械及び装置	7,951	6,259
工具、器具及び備品	22,921	18,544
土地	3,3,868,568	3,3,868,568
リース資産	69,919	50,725
建設仮勘定	3,715	-
有形固定資産合計	4,509,243	4,647,434
無形固定資産		
借地権	13,460	13,460
商標権	4,018	3,784
その他	5,480	4,677
無形固定資産合計	22,959	21,922
投資その他の資産		
投資有価証券	119,438	118,379
関係会社株式	69,000	69,000
関係会社長期貸付金	424,500	417,500
繰延税金資産	27,843	27,106
敷金及び保証金	2,665,726	2,665,226
その他	50,514	45,392
貸倒引当金	319,607	351,041
投資損失引当金	39,000	39,000
投資その他の資産合計	998,415	952,563
固定資産合計	5,530,617	5,621,920
資産合計	5,926,530	6,119,143

(単位：千円)

	前事業年度 (2018年3月31日)	当事業年度 (2019年3月31日)
負債の部		
流動負債		
買掛金	84,721	2 55,217
1年内返済予定の長期借入金	3 63,348	3 63,348
未払金	140,949	363,356
未払費用	8,256	9,080
未払法人税等	3,160	41,350
前受金	49,078	49,082
賞与引当金	7,796	9,384
その他	57,547	31,778
流動負債合計	414,859	622,598
固定負債		
長期借入金	3 205,675	3 142,327
退職給付引当金	34,656	37,793
役員退職慰労引当金	8,906	8,906
長期預り敷金	2 618,136	2 618,164
再評価に係る繰延税金負債	1,082,196	1,082,196
その他	55,669	41,310
固定負債合計	2,005,240	1,930,698
負債合計	2,420,100	2,553,296
純資産の部		
株主資本		
資本金	1,004,500	1,004,500
利益剰余金		
その他利益剰余金		
繰越利益剰余金	55,765	115,928
利益剰余金合計	55,765	115,928
自己株式	8,451	8,549
株主資本合計	1,051,813	1,111,879
評価・換算差額等		
その他有価証券評価差額金	2,532	1,883
土地再評価差額金	2,452,083	2,452,083
評価・換算差額等合計	2,454,616	2,453,967
純資産合計	3,506,430	3,565,847
負債純資産合計	5,926,530	6,119,143

【損益計算書】

(単位：千円)

	前事業年度 (自 2017年 4月 1日 至 2018年 3月31日)	当事業年度 (自 2018年 4月 1日 至 2019年 3月31日)
売上高	1 1,162,689	1 1,284,081
売上原価	1 819,693	1 835,787
売上総利益	342,995	448,293
販売費及び一般管理費	2 302,148	2 324,819
営業利益	40,846	123,474
営業外収益		
受取利息及び配当金	1 60,842	1 13,523
その他	6,729	803
営業外収益合計	67,571	14,327
営業外費用		
支払利息	2,931	1,875
遊休資産維持管理費用	13,707	-
その他	719	3,235
営業外費用合計	17,358	5,110
経常利益	91,060	132,690
特別損失		
貸倒引当金繰入額	3 30,663	3 32,232
環境対策費	-	4,565
特別損失合計	30,663	36,797
税引前当期純利益	60,396	95,893
法人税、住民税及び事業税	2,693	34,706
法人税等調整額	10,365	1,023
法人税等合計	7,672	35,729
当期純利益	68,069	60,163

【売上原価明細書】

区分	注記 番号	前事業年度 (自 2017年4月1日 至 2018年3月31日)		当事業年度 (自 2018年4月1日 至 2019年3月31日)	
		金額(千円)	構成比 (%)	金額(千円)	構成比 (%)
1 映画事業売上原価					
1 写真料		270,105		251,292	
2 人件費		89,197		92,410	
3 諸経費		248,174		247,014	
計		607,477	74.1	590,717	70.7
2 不動産事業売上原価					
1 保守管理費		10,276		10,359	
2 減価償却費		24,253		35,428	
3 諸経費		171,921		193,814	
計		206,451	25.2	239,602	28.7
3 その他の事業売上原価					
1 人件費		3,016		3,121	
2 商品仕入原価		2,057		2,057	
3 諸経費		689		288	
計		5,763	0.7	5,467	0.6
合計		819,693	100.0	835,787	100.0

【株主資本等変動計算書】

前事業年度(自 2017年4月1日 至 2018年3月31日)

(単位：千円)

	株主資本				
	資本金	利益剰余金		自己株式	株主資本合計
		その他利益剰余金 繰越利益剰余金	利益剰余金合計		
当期首残高	1,004,500	12,303	12,303	7,943	984,253
当期変動額					
当期純利益		68,069	68,069		68,069
自己株式の取得				508	508
株主資本以外の項目 の当期変動額(純額)					
当期変動額合計	-	68,069	68,069	508	67,560
当期末残高	1,004,500	55,765	55,765	8,451	1,051,813

	評価・換算差額等			純資産合計
	その他有価証券 評価差額金	土地再評価差額金	評価・換算 差額等合計	
当期首残高	1,914	2,452,083	2,453,998	3,438,251
当期変動額				
当期純利益				68,069
自己株式の取得				508
株主資本以外の項目 の当期変動額(純額)	617	-	617	617
当期変動額合計	617	-	617	68,178
当期末残高	2,532	2,452,083	2,454,616	3,506,430

当事業年度(自 2018年4月1日 至 2019年3月31日)

(単位：千円)

	株主資本				
	資本金	利益剰余金		自己株式	株主資本合計
		その他利益剰余金	利益剰余金合計		
		繰越利益剰余金			
当期首残高	1,004,500	55,765	55,765	8,451	1,051,813
当期変動額					
当期純利益		60,163	60,163		60,163
自己株式の取得				97	97
株主資本以外の項目 の当期変動額(純額)					
当期変動額合計	-	60,163	60,163	97	60,065
当期末残高	1,004,500	115,928	115,928	8,549	1,111,879

	評価・換算差額等			純資産合計
	その他有価証券 評価差額金	土地再評価差額金	評価・換算 差額等合計	
当期首残高	2,532	2,452,083	2,454,616	3,506,430
当期変動額				
当期純利益				60,163
自己株式の取得				97
株主資本以外の項目 の当期変動額(純額)	648	-	648	648
当期変動額合計	648	-	648	59,417
当期末残高	1,883	2,452,083	2,453,967	3,565,847

【注記事項】

(重要な会計方針)

1 資産の評価基準及び評価方法

(1)有価証券の評価基準及び評価方法

子会社株式及び関連会社株式

移動平均法による原価法

その他有価証券

時価のあるもの

決算日の市場価格等に基づく時価法

(評価差額は全部純資産直入法により処理し、売却原価は移動平均法により算定)

時価のないもの

移動平均法による原価法

(2)たな卸資産の評価基準及び評価方法

通常の販売目的で保有するたな卸資産

商品及び貯蔵品 最終仕入原価法(収益性の低下による簿価切下げの方法)

2 固定資産の減価償却の方法

(1)有形固定資産(リース資産を除く)

建物及び構築物(2016年3月31日以前に取得した建物附属設備及び構築物を除く)

定額法によっております。

その他の有形固定資産(リース資産を除く)

定率法によっております。

なお、主な耐用年数については次のとおりであります。

建物 8～36年

構築物 15年

機械及び装置 9～10年

工具、器具及び備品 4～15年

(2)無形固定資産(リース資産を除く)

定額法によっております。

なお、自社利用のソフトウェアについては、社内における利用可能期間(5年)に基づく定額法によっております。

(3)リース資産(所有権移転外ファイナンス・リース取引に係るリース資産)

リース期間を耐用年数とし、残存価額を零として算定する定額法によっております。

3 引当金の計上基準

(1) 貸倒引当金

債権の貸倒による損失に備えるため、一般債権については貸倒実績率により、貸倒懸念債権等については個別に回収可能性を勘案し、回収不能見込み額を計上しております。

(2) 投資損失引当金

関係会社への投資に係る損失に備えるため、当該会社の財政状態および回収可能性を勘案して、必要と認められる額を計上しております。

(3) 賞与引当金

従業員賞与の支給に充てるため、将来の支給見込額のうち当期の負担額を計上しております。

(4) 退職給付引当金

従業員の退職給付に備えるため、当事業年度末における退職給付債務(当事業年度末時点の自己都合要支給額を退職給付債務とする簡便法)に基づき、当事業年度末において発生していると認められる額を計上しております。

(5) 役員退職慰労引当金

役員退職慰労金の支出に備えるため「役員退職慰労金規程」に基づく当事業年度末における基準額を計上しております。

4 その他財務諸表作成のための基本となる重要な事項

(1) 重要なヘッジ会計の方法

ヘッジ会計の方法

金利スワップ取引については、特例処理の要件を満たすものは、特例処理を採用しております。

ヘッジ手段とヘッジ対象

ヘッジ手段

金利スワップ

ヘッジ対象

借入金の利息

ヘッジ方針

借入金の金利変動リスクを回避する目的で金利スワップ取引を行っております。

ヘッジの有効性評価の方法

金利スワップの特例処理の要件を満たしておりますので、決算日における有効性の評価を省略しております。

(2)消費税等の会計処理

消費税および地方消費税の会計処理は税抜方式によるおります。

(表示方法の変更)

「『税効果会計に係る会計基準』の一部改正」の適用に伴う変更

「『税効果会計に係る会計基準』の一部改正」(企業会計基準第28号 2018年2月16日)を当事業年度の期首から適用しており、繰延税金資産は投資その他の資産の区分に表示し、繰延税金負債は固定負債の区分に表示する方法に変更しております。

この結果、前事業年度の貸借対照表において、「流動資産」の「繰延税金資産」28,961千円及び「固定負債」の「繰延税金負債」1,117千円を「投資その他の資産」の「繰延税金資産」27,843千円に含めて表示しております。

また、税効果会計関係注記において、税効果会計基準一部改正第4項に定める「税効果会計に係る会計基準」注解(注8)(1)(評価性引当額の合計額を除く。)に記載された内容を追加しております。ただし、当該内容のうち前事業年度に係る内容については、税効果会計基準一部改正第7項に定める経過的な取扱いに従って記載しておりません。

(貸借対照表関係)

1 たな卸資産の内訳は次の通りであります。

	前事業年度 (2018年3月31日)	当事業年度 (2019年3月31日)
商品	554千円	458千円
合計	554千円	458千円

2 区分掲記されたもの以外で各科目に含まれている関係会社に対するものは次のとおりであります。

	前事業年度 (2018年3月31日)	当事業年度 (2019年3月31日)
短期金銭債権	709千円	1,385千円
長期金銭債権	621,404千円	621,404千円
短期金銭債務		100千円
長期金銭債務	411,300千円	411,300千円

3 担保資産及び担保付債務

担保に供している資産は次のとおりであります。

	前事業年度 (2018年3月31日)	当事業年度 (2019年3月31日)
建物	209,616千円	379,190千円
土地	3,686,683千円	3,686,683千円
合計	3,896,299千円	4,065,873千円

担保付債務は次のとおりであります。

	前事業年度 (2018年3月31日)	当事業年度 (2019年3月31日)
長期借入金	119,942千円	79,832千円
(うち1年以内返済予定の長期借入金)	30,072千円	30,072千円)

4 保証債務

下記の関係会社の金融機関からの借入金に対し債務保証をしております。

	前事業年度 (2018年3月31日)	当事業年度 (2019年3月31日)
株野和ビル	341,000千円	304,970千円

(損益計算書関係)

1 各項目に含まれている関係会社に対するものは、次のとおりであります。

	前事業年度 (自 2017年4月1日 至 2018年3月31日)	当事業年度 (自 2018年4月1日 至 2019年3月31日)
売上高	160,068千円	160,068千円
売上原価	115,146千円	114,981千円
受取利息	10,359千円	11,266千円

2 販売費及び一般管理費のうち主要な費目及び金額は、次のとおりであります。

	前事業年度 (自 2017年4月1日 至 2018年3月31日)	当事業年度 (自 2018年4月1日 至 2019年3月31日)
役員報酬	84,658千円	86,937千円
給料及び手当	44,917千円	63,415千円
地代家賃	64,003千円	64,003千円

3 貸倒引当金繰入額

前事業年度(自 2017年4月1日 至 2018年3月31日)

関係会社に対する貸倒引当金繰入額であります。

当事業年度(自 2018年4月1日 至 2019年3月31日)

関係会社に対する貸倒引当金繰入額であります。

(有価証券関係)

前事業年度(2018年3月31日)

子会社株式及び関連会社株式

子会社株式及び関連会社株式は、市場価格がなく時価を把握することが極めて困難と認められるため、子会社株式及び関連会社株式の時価を記載していません。

なお、時価を把握することが極めて困難と認められる子会社株式及び関連会社株式の貸借対照表計上額は次の通りであります。

(単位：千円)

区分	貸借対照表計上額
(1) 子会社株式	49,000
(2) 関連会社株式	20,000
計	69,000

(注)子会社株式のうち、自由ヶ丘土地興業株式会社34,500千円及び武蔵野エンタテインメント株式会社4,500千円は投資損失引当処理を行っております。

当事業年度(2019年3月31日)

子会社株式及び関連会社株式

子会社株式及び関連会社株式は、市場価格がなく時価を把握することが極めて困難と認められるため、子会社株式及び関連会社株式の時価を記載していません。

なお、時価を把握することが極めて困難と認められる子会社株式及び関連会社株式の貸借対照表計上額は次の通りであります。

(単位：千円)

区分	貸借対照表計上額
(1) 子会社株式	49,000
(2) 関連会社株式	20,000
計	69,000

(注)子会社株式のうち、自由ヶ丘土地興業株式会社34,500千円及び武蔵野エンタテインメント株式会社4,500千円は投資損失引当処理を行っております。

(税効果会計関係)

1 繰延税金資産及び繰延税金負債の発生の主な原因別の内訳

		前事業年度 (2018年3月31日)	当事業年度 (2019年3月31日)
繰延税金資産	関係会社株式評価損	138,325千円	138,325千円
	貸倒に係る損失	114,271千円	124,158千円
	減損損失	1,601千円	1,601千円
	税務上の繰越欠損金	67,156千円	45,694千円
	投資有価証券評価損	39,914千円	39,914千円
	退職給付引当金	10,611千円	11,572千円
	その他の投資評価損	4,759千円	4,224千円
	賞与引当金	2,387千円	2,873千円
	その他	8,122千円	11,060千円
	繰延税金資産小計	387,150千円	379,424千円
	税務上の繰越欠損金に係る評価性引当額		17,756千円
	将来減算一時差異等の合計額に係る評価性引当額		333,730千円
	評価性引当額小計	358,189千円	351,486千円
繰延税金資産合計		28,961千円	27,938千円
繰延税金負債	その他有価証券評価差額金	1,117千円	831千円
繰延税金資産の純額		27,843千円	27,106千円
再評価に係る繰延税金負債	事業用土地再評価差額	1,082,196千円	1,082,196千円

2 法定実効税率と税効果会計適用後の法人税等の負担率との間に重要な差異があるときの、当該差異の原因となった主要な項目別の内訳

	前事業年度 (2018年3月31日)	当事業年度 (2019年3月31日)
法定実効税率	30.86 %	30.62 %
(調整)		
交際費等永久に損金に算入されない項目	1.69 %	1.13 %
受取配当金等永久に益金に算入されない項目	14.88 %	0.75 %
住民税均等割等	3.79 %	2.39 %
評価性引当額の増減	33.68 %	6.99 %
留保金課税		10.90 %
その他	0.48 %	0.04 %
税効果会計適用後の法人税等の負担率	12.70 %	37.26 %

(重要な後発事象)

該当事項はありません。

【附属明細表】

【有形固定資産等明細表】

(単位：千円)

区分	資産の種類	当期首残高	当期増加額	当期減少額	当期償却額	当期末残高	減価償却 累計額
有形固定資産	建物	534,275	228,590 *1*2	0	61,281	701,585	1,194,285
	構築物	1,891			140	1,751	338
	機械及び装置	7,951			1,692	6,259	7,652
	車両運搬具	0				0	4,077
	工具、器具及び備品	22,921	442	1,427	3,391	18,544	27,769
	土地	3,868,568 (3,534,280)				3,868,568 (3,534,280)	
	リース資産	69,919	3,210		22,404	50,725	50,092
	建設仮勘定	3,715		3,715			
	計	4,509,243	232,243	5,143	88,908	4,647,434	1,284,216
無形固定資産	借地権	13,460				13,460	
	商標権	4,018	443		677	3,784	
	電話加入権	4,007				4,007	
	ソフトウェア	1,473	261		1,064	670	
	計	22,959	705		1,742	21,922	

(注) 1. 当期増減の主な内容

*1 大宮ビル更新工事 202,730千円

*2 シネマカリテロビー改装工事 25,859千円

2. 土地の当期首残高及び当期末残高の()内は内書きで、土地の再評価に関する法律(1998年3月31日公布法律34号)により行った事業用土地の再評価実施前の帳簿価額との差額であります。

【引当金明細表】

(単位：千円)

科目	当期首残高	当期増加額	当期減少額	当期末残高
貸倒引当金（短期）	942	42	935	49
貸倒引当金（長期）	319,607	90,949	59,514	351,041
投資損失引当金	39,000			39,000
賞与引当金	7,796	9,384	7,796	9,384
役員退職慰労引当金	8,906			8,906

(2) 【主な資産及び負債の内容】

連結財務諸表を作成しているため、記載を省略しております。

(3) 【その他】

該当事項はありません。

第6 【提出会社の株式事務の概要】

事業年度	4月1日から3月31日まで																			
定時株主総会	6月中																			
基準日	3月31日																			
剰余金の配当の基準日	9月30日、3月31日																			
1単元の株式数	100株																			
単元未満株式の買取り																				
取扱場所	(特別口座) 東京都千代田区丸の内一丁目4番5号 三菱UFJ信託銀行株式会社 証券代行部																			
株主名簿管理人	(特別口座) 東京都千代田区丸の内一丁目4番5号 三菱UFJ信託銀行株式会社																			
取次所																				
買取手数料	無料																			
公告掲載方法	当会社の公告方法は、電子公告とする。ただし、事故その他やむを得ない事由によって電子公告による公告をすることができない場合は、日本経済新聞に掲載して行う。なお、電子公告は当社のホームページに掲載しており、そのアドレスは次のとおりです。 http://www.musashino-k.co.jp/																			
株主に対する特典	<p>株主優待方法(2019年3月31日権利確定分実績)</p> <table border="1"> <thead> <tr> <th>ご所有株式数</th> <th>株主優待券</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>100株以上</td> <td>・武蔵野館映画無料優待券6枚 ・「映画割引優待券」6枚</td> </tr> <tr> <td>200 "</td> <td>・武蔵野館映画無料優待券12枚 ・「映画割引優待券」12枚</td> </tr> <tr> <td>300 "</td> <td>・武蔵野館映画無料優待券18枚 ・「映画割引優待券」18枚</td> </tr> <tr> <td>500 "</td> <td>・個人通用パス</td> </tr> <tr> <td>800 "</td> <td>・同伴1名通用パス</td> </tr> <tr> <td>1,000 "</td> <td>・同伴2名通用パス</td> </tr> </tbody> </table> <p>(ご注意) 「映画割引優待券」のご利用で、1枚につき1作品を武蔵野館またはシネマカリテのいずれか一館にて割引でのご優待料金(800円)でご鑑賞いただけます。 シネマカリテでの株主優待のご利用は、従来どおり割引でのご優待料金(800円)のご鑑賞となります。 株主優待証・株主優待券のご利用につきましては、当日劇場受付での引き換えとなり、事前の引き換えはできません。 インターネット(パソコンやスマートフォン、携帯電話等)でのご予約はできません。 株主優待証・株主優待券でのご利用につきましては、公開初日が土・日・祝日の場合は翌平日より、平日の場合は土・日・祝日を挟んだ翌平日よりご利用いただけます。 上映作品によりましては予約販売分に集中し、お席の確保が難しくなる場合もございますので、予めご了承ください。 株主優待制度のご利用にあたりましては、株主優待券綴、株主優待証に記載されている注意事項をご確認の上、ご利用くださいますようお願い申し上げます。</p> <p>株主優待券は年2回(6月下旬、12月上旬)発行致します。</p> <p>株主優待券通用劇場</p> <table border="1"> <thead> <tr> <th>所在地</th> <th>劇場名</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td rowspan="2">東京都新宿区</td> <td>武蔵野館1・2・3</td> </tr> <tr> <td>シネマカリテ</td> </tr> </tbody> </table> <p>(注)株主優待券は1枚で1名通用</p>	ご所有株式数	株主優待券	100株以上	・武蔵野館映画無料優待券6枚 ・「映画割引優待券」6枚	200 "	・武蔵野館映画無料優待券12枚 ・「映画割引優待券」12枚	300 "	・武蔵野館映画無料優待券18枚 ・「映画割引優待券」18枚	500 "	・個人通用パス	800 "	・同伴1名通用パス	1,000 "	・同伴2名通用パス	所在地	劇場名	東京都新宿区	武蔵野館1・2・3	シネマカリテ
ご所有株式数	株主優待券																			
100株以上	・武蔵野館映画無料優待券6枚 ・「映画割引優待券」6枚																			
200 "	・武蔵野館映画無料優待券12枚 ・「映画割引優待券」12枚																			
300 "	・武蔵野館映画無料優待券18枚 ・「映画割引優待券」18枚																			
500 "	・個人通用パス																			
800 "	・同伴1名通用パス																			
1,000 "	・同伴2名通用パス																			
所在地	劇場名																			
東京都新宿区	武蔵野館1・2・3																			
	シネマカリテ																			

- (注) 当会社の株主は、その有する単元未満株式について、次に掲げる権利以外の権利を行使することができない。
- (1) 会社法第189条第2項各号に掲げる権利
 - (2) 会社法第166条第1項の規定による請求をする権利
 - (3) 株主の有する株式数に応じて募集株式の割当ておよび募集新株予約権の割当てを受ける権利

第7 【提出会社の参考情報】

1 【提出会社の親会社等の情報】

当社には、金融商品取引法第24条の7第1項に規定する親会社等はありません。

2 【その他の参考情報】

当事業年度の開始日から有価証券報告書提出日までの間に、次の書類を提出しております。

(1)	有価証券報告書 及びその添付書類、 確認書	事業年度	自 2017年4月1日	2018年6月29日
		(第147期)	至 2018年3月31日	関東財務局長に提出。
(2)	内部統制報告書	事業年度	自 2017年4月1日	2018年6月29日
		(第147期)	至 2018年3月31日	関東財務局長に提出。
(3)	四半期報告書 及び確認書	(第148期)	自 2018年4月1日	2018年8月13日
		第1四半期)	至 2018年6月30日	関東財務局長に提出。
		(第148期)	自 2018年7月1日	2018年11月14日
		第2四半期)	至 2018年9月30日	関東財務局長に提出。
		(第148期)	自 2018年10月1日	2019年2月14日
		第3四半期)	至 2018年12月31日	関東財務局長に提出。
(4)	臨時報告書	企業内容等の開示に関する内閣府令第19条第2項第9号の2(株主総会における議決権行使の結果)の規定に基づくもの。		2018年7月2日 関東財務局長に提出。

第二部 【提出会社の保証会社等の情報】

該当事項はありません。

独立監査人の監査報告書及び内部統制監査報告書

2019年6月21日

武蔵野興業株式会社
取締役会 御中

八重洲監査法人

代表社員 公認会計士 武田 勇 蔵 印
業務執行社員

業務執行社員 公認会計士 滝澤 直 樹 印

< 財務諸表監査 >

当監査法人は、金融商品取引法第193条の2第1項の規定に基づく監査証明を行うため、「経理の状況」に掲げられている武蔵野興業株式会社の2018年4月1日から2019年3月31日までの連結会計年度の連結財務諸表、すなわち、連結貸借対照表、連結損益計算書、連結包括利益計算書、連結株主資本等変動計算書、連結キャッシュ・フロー計算書、連結財務諸表作成のための基本となる重要な事項、その他の注記及び連結附属明細表について監査を行った。

連結財務諸表に対する経営者の責任

経営者の責任は、我が国において一般に公正妥当と認められる企業会計の基準に準拠して連結財務諸表を作成し適正に表示することにある。これには、不正又は誤謬による重要な虚偽表示のない連結財務諸表を作成し適正に表示するために経営者が必要と判断した内部統制を整備及び運用することが含まれる。

監査人の責任

当監査法人の責任は、当監査法人が実施した監査に基づいて、独立の立場から連結財務諸表に対する意見を表明することにある。当監査法人は、我が国において一般に公正妥当と認められる監査の基準に準拠して監査を行った。監査の基準は、当監査法人に連結財務諸表に重要な虚偽表示がないかどうかについて合理的な保証を得るために、監査計画を策定し、これに基づき監査を実施することを求めている。

監査においては、連結財務諸表の金額及び開示について監査証拠を入手するための手続が実施される。監査手続は、当監査法人の判断により、不正又は誤謬による連結財務諸表の重要な虚偽表示のリスクの評価に基づいて選択及び適用される。財務諸表監査の目的は、内部統制の有効性について意見表明するためのものではないが、当監査法人は、リスク評価の実施に際して、状況に応じた適切な監査手続を立案するために、連結財務諸表の作成と適正な表示に関連する内部統制を検討する。また、監査には、経営者が採用した会計方針及びその適用方法並びに経営者によって行われた見積りの評価も含め全体としての連結財務諸表の表示を検討することが含まれる。

当監査法人は、意見表明の基礎となる十分かつ適切な監査証拠を入手したと判断している。

監査意見

当監査法人は、上記の連結財務諸表が、我が国において一般に公正妥当と認められる企業会計の基準に準拠して、武蔵野興業株式会社及び連結子会社の2019年3月31日現在の財政状態並びに同日をもって終了する連結会計年度の経営成績及びキャッシュ・フローの状況をすべての重要な点において適正に表示しているものと認める。

< 内部統制監査 >

当監査法人は、金融商品取引法第193条の2第2項の規定に基づく監査証明を行うため、武蔵野興業株式会社の2019年3月31日現在の内部統制報告書について監査を行った。

内部統制報告書に対する経営者の責任

経営者の責任は、財務報告に係る内部統制を整備及び運用し、我が国において一般に公正妥当と認められる財務報告に係る内部統制の評価の基準に準拠して内部統制報告書を作成し適正に表示することにある。

なお、財務報告に係る内部統制により財務報告の虚偽の記載を完全には防止又は発見することができない可能性がある。

監査人の責任

当監査法人の責任は、当監査法人が実施した内部統制監査に基づいて、独立の立場から内部統制報告書に対する意見を表明することにある。当監査法人は、我が国において一般に公正妥当と認められる財務報告に係る内部統制の監査の基準に準拠して内部統制監査を行った。財務報告に係る内部統制の監査の基準は、当監査法人に内部統制報告書に重要な虚偽表示がないかどうかについて合理的な保証を得るために、監査計画を策定し、これに基づき内部統制監査を実施することを求めている。

内部統制監査においては、内部統制報告書における財務報告に係る内部統制の評価結果について監査証拠を入手するための手続が実施される。内部統制監査の監査手続は、当監査法人の判断により、財務報告の信頼性に及ぼす影響の重要性に基づいて選択及び適用される。また、内部統制監査には、財務報告に係る内部統制の評価範囲、評価手続及び評価結果について経営者が行った記載を含め、全体としての内部統制報告書の表示を検討することが含まれる。

当監査法人は、意見表明の基礎となる十分かつ適切な監査証拠を入手したと判断している。

監査意見

当監査法人は、武蔵野興業株式会社が2019年3月31日現在の財務報告に係る内部統制は有効であると表示した上記の内部統制報告書が、我が国において一般に公正妥当と認められる財務報告に係る内部統制の評価の基準に準拠して、財務報告に係る内部統制の評価結果について、すべての重要な点において適正に表示しているものと認める。

利害関係

会社と当監査法人又は業務執行社員との間には、公認会計士法の規定により記載すべき利害関係はない。

以 上

-
1. 上記は監査報告書の原本に記載された事項を電子化したものであり、その原本は当社（有価証券報告書提出会社）が別途保管しております。
 2. XBRLデータは監査の対象には含まれていません。

独立監査人の監査報告書

2019年6月21日

武蔵野興業株式会社
取締役会 御中

八重洲監査法人

代表社員 公認会計士 武田 勇 蔵 印
業務執行社員

業務執行社員 公認会計士 滝澤 直 樹 印

当監査法人は、金融商品取引法第193条の2第1項の規定に基づく監査証明を行うため、「経理の状況」に掲げられている武蔵野興業株式会社の2018年4月1日から2019年3月31日までの第148期事業年度の財務諸表、すなわち、貸借対照表、損益計算書、株主資本等変動計算書、重要な会計方針、その他の注記及び附属明細表について監査を行った。

財務諸表に対する経営者の責任

経営者の責任は、我が国において一般に公正妥当と認められる企業会計の基準に準拠して財務諸表を作成し適正に表示することにある。これには、不正又は誤謬による重要な虚偽表示のない財務諸表を作成し適正に表示するために経営者が必要と判断した内部統制を整備及び運用することが含まれる。

監査人の責任

当監査法人の責任は、当監査法人が実施した監査に基づいて、独立の立場から財務諸表に対する意見を表明することにある。当監査法人は、我が国において一般に公正妥当と認められる監査の基準に準拠して監査を行った。監査の基準は、当監査法人に財務諸表に重要な虚偽表示がないかどうかについて合理的な保証を得るために、監査計画を策定し、これに基づき監査を実施することを求めている。

監査においては、財務諸表の金額及び開示について監査証拠を入手するための手続が実施される。監査手続は、当監査法人の判断により、不正又は誤謬による財務諸表の重要な虚偽表示のリスクの評価に基づいて選択及び適用される。財務諸表監査の目的は、内部統制の有効性について意見表明するためのものではないが、当監査法人は、リスク評価の実施に際して、状況に応じた適切な監査手続を立案するために、財務諸表の作成と適正な表示に関連する内部統制を検討する。また、監査には、経営者が採用した会計方針及びその適用方法並びに経営者によって行われた見積りの評価も含め全体としての財務諸表の表示を検討することが含まれる。

当監査法人は、意見表明の基礎となる十分かつ適切な監査証拠を入手したと判断している。

監査意見

当監査法人は、上記の財務諸表が、我が国において一般に公正妥当と認められる企業会計の基準に準拠して、武蔵野興業株式会社の2019年3月31日現在の財政状態及び同日をもって終了する事業年度の経営成績をすべての重要な点において適正に表示しているものと認める。

利害関係

会社と当監査法人又は業務執行社員との間には、公認会計士法の規定により記載すべき利害関係はない。

以 上

1. 上記は監査報告書の原本に記載された事項を電子化したものであり、その原本は当社（有価証券報告書提出会社）が別途保管しております。
2. XBRLデータは監査の対象には含まれていません。